

---

# バカとテストと召喚獣もう一人の観察処分者

サドマヨ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣もう一人の観察処分者

### 【Zコード】

N4412W

### 【作者名】

サドマヨ

### 【あらすじ】

最先端技術「試験召喚システム」を導入した試験校「文月学園」に一人の転校生がやってきた。そいつの名前は……将軍！？しかも転校生なのに觀察処分者！？

吉井明久や坂本雄一、Fクラスの仲間達と共にクラスの設備を巡る戦争や騒動が始まる。

## プロローグ

### 文月学園

そこは最先端技術「試験召喚システム」を取り入れた試験校  
その校舎に続く坂道を駆ける青髪の少年がいた

「なんて最悪な日なんだ。転校初日から遅刻をしてしまつとは……！」

既に閉ざされている門を物ともせずに飛び越し、校舎に向かって走  
つていく

その少年に一人の男がドスのきいた声で呼び止める

「転校初日から遅刻とはいじ」身分だな、将軍」

将軍と呼び止められた少年はその足止め、威風堂々と立つ男に目  
を向ける

「この人、かなりデキる……！？」

男の迫力に気圧されながらも軽く頭を下げる

「でも仕方無いですよ？いきなりの転校だつたし、編入試験の勉強  
続きで寝不足だし、来る途中でお爺さんに絡んでいた悪徳商人を成  
敗していたし」

「最後のはどう見てもおかしいだろ」「UN

少年はポリポリと頭をかきながら「そうですか?」と返事をする  
「まあ良い。右も左も分からん生徒を導くのも教師の務めだ。自己  
紹介が遅れたが、俺は生活指導の西村だ」

「生活指導……ですか。如何にもって感じがします」

生徒の殆どから鉄人と呼ばれる男、西村宗一は封筒を取り出し、少  
年に差し出す

宛名の欄には『将軍』と大きく書かれていた

「確かにクラスはA～Fまでありましたよね?」

「そうだ。まあお前の行くクラスは言わずもがなだが

「すみません……バカ親が学費の計算を怠つたせいで

將軍は落ち込み気味になりながら封筒を開き、中に入ってる紙を取  
り出す

そして自分のクラスを確認する

『将軍……Fクラス』

「覚悟してはいたけど、いざ確認すると心が痛い……」

「通えるだけマジだと思つが？学園長に直談判してなかつたらお前はここにいなー」

「そうですね。それもありますけど、これまで付ける必要は無いんじゃないですか？」

将軍が紙を鉄人の前に掲げ、ある箇所を指差す

そこにはこう書かれていた

『將軍。上記の者を学費滞納の為、観察処分者として認定する』

## 主人公設定（前書き）

やつと小説を投稿できました…

## 主人公設定

名前… 将軍 16歳

イメージCV… 檜山修之

文翔学園高等部2年Fクラスに編入する事になつた少年

ある理由から将軍を自分の名前としている

趣味は武器を自作する事

身体能力も高く、常に懐に武器やら何やらを入れている（どうやら  
出し入れしてゐるかは企業秘密）

学力は学年首席に匹敵するが、「面白くないと言わわれるのは嫌だ」とたまにふざけた珍解答をする

吉井明久と同じ観察処分者

その理由は両親が学費の額を間違えて支払いを延滞していたから

召喚獣の装備は黒い鎧にノコギリ刃の剣、背中に背負つた二本の銃剣

## 主人公設定（後書き）

主となる人物の設定を紹介しました。腕輪なんかは後で出します。

## 将軍Fクラスに入る（前書き）

いろいろ飛ばしがちな部分もありますが刺々しいコメントは「勘弁を…」

## 将軍Fクラスに入る

問 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

「問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジュラルミニン

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題なのです  
が、姫路さんは引っ掛けませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払つていなかつたこと』

## 教師のコメント

そりは問題じゃあつません。

## 吉井明久の答え

『「金の例……未来金（すこべく強）」』

## 教師のコメント

すこべく強いと言われても。

## 將軍の答え

『「金の例……古代に伝わる伝説の金オリハルコン」』

## 教師のコメント

是非その金金があつたら見てみたいのです。

将軍は今、自分がこれから所属するFクラスに向かっていた

「I.IJがFクラスか。想像以上に汚い場所だな」

取れかけているクラスマ、ひび割れた窓、ボロボロになっている門を見て思つた事を口に出す将軍

まさかI.IJまで酷いとは…と思いつつも諦めて戸を開けた

「すみません。少し遅れました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

ズダンツ！！とナイフが教壇に立っていた男の頬を掠めて黒板に刺さつた

投げた犯人は

「おっといけない。ムカついたから反射的に投げてしまった」

將軍だった

「初対面の人間に何しやがるー？」

「貴様こそ初対面の人間にウジ虫呼ばわりとはどういって見だ？」

頬から血を垂らしながら抗議する男に一步も引き下がらない將軍

今にも火花が飛び散りそうな光景だ

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ……って何この状況？」

「俺はお前の後ろにいるそいつの事を言つたんだ

「謝罪も無しか？幼稚園から出直して……」

将軍と教壇に立っている男がメンチを斬り合つ

遅れて入ってきた少年は「それ」と席に着く

そのまま後ろで、中年の中澤と、ピンク色の髪を持つ女子生徒が入ってきた

「ふああああ、ねむ…」

皆が自己紹介の最中、将軍は寝不足なせいで寝そりとなっていた

だが寝たいと言つ氣持ちを押し殺して何とか自己紹介を聞いていく

「あつがとうござります姫路さん。それでは最後の君、自己紹介をお願いします」

イマイチ回らない頭で人物の整理をしていると自分の番が来た

呼ばれた将軍は立ち上がって教壇の前に移動する

「えー、俺は新入生は新入生だけど、今日からここに転校してきました。名前は 将軍だ」

自分の名前を伝えた瞬間、場の空気が凍り付いた

## 将軍はとても危険な青少年

問 以下の意味を持つ諺を答えなさい。

『?得意なことでも失敗してしまう事』

『?悪い事があつた上に更に悪い事が起きる喻え』

姫路瑞希の答え

『?弘法も筆の誤り』

『?泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも?なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、  
?なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り目に祟り目』などがあります  
ね。

土屋康太の答え

『?弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『?泣きつ面踏みつけたり』

将軍の答え

『?泣きつ面踏みつけたり』

教師のコメント

君達は鬼ですか。

「 「 「 .....」」

クラス内に漂う静寂の空氣

将軍は一刻も早く白席に戻りたいと心の底から願っていた

「あの、それ……名前じゃなくてあだ名だと思ひますナビ……」

手を擧げるピンク色の髪を持つ女子 姫路瑞希

将軍はそれに気付いて我に返る

「す、スマン…本当に将軍が俺の名前なんだ…いやんと理由もある  
！」

将軍は色々追求されるのを避ける為、自分の名前の真相を手つ取り早く話す事にした

「俺は子供の頃、テレビで放映してた時代劇に出てくる将軍に憧れて、遊びでその真似事をしていたら次第に友達から将軍と呼ばれる様になった」

「　　「まつまつ」「　」

「そして俺の両親や近所の人も面白がって俺を将軍と呼び始めた」

「　　「は……？」」

視線の痛さに将軍は本氣で死にたいと思つた

しかし挫ける事なく話を続ける

「十年もの間その名で呼ばれ続けた結果、俺は自分の本当の名前を忘れてしまった」

「　　」  
「　　」  
「　　」  
「　　」  
「　　」

今度は憐れみの視線が将軍に突き刺さる

「名前が書いてある持ち物を徹底的に調べても將軍としか書かれておらず、両親や近所の人に聞いても『ごめん。忘れた』としか返つてこなかつた」

.....

憐れみの視線が更にレベルアップした

「だ、だから俺は仕方無いから將軍を自分の名前としてる訳だ」

将軍は話し終わると早歩きで自席に戻る

そこへ隣の席にいる少年　吉井明久と後ろの頬を切られた少年　坂本雄一が話し掛けてきた

「辛い事言わせちゃつて」めん

「……お前、笑わないのか？こんなふざけた名前の人間を」

本名じやない名前を気にする将軍

子供の頃みたいにからかわれるんじやないかと思つていた

「親にも忘れられてたんじや笑えないよ

「ああ。最初に聞いた時は明久並みに頭がイカれてるなと思つてた  
が、あんな過去があつたんじや仕方無いな」

ズダンッ！と投擲された模造刀が後ろの壁に突き刺さり、雄一の髪  
の毛が少しだけ切れた

「スマン。つこつかり投げてしまった」

「うつかりつてレベルじゃないだろー。明らかに悪意を込めて投げてんじゃねえか！」

躊躇いなく刃物を投げる将軍ゴビゴビの上クラスの面々

雄一は將軍の行動に激昂する

「違うぞ。悪意を込めてるんじゃない。殺意を込めて投げたんだ」

「余計に悪いわボケつ！！」

「将軍、今アレを制服の上着の中から出さなかつた……？」

「氣のせいだ」

その後、ボロいために教卓が壊れ、担任の福原先生が新しいものを取りに教室を出でていったり、明久と雄一が立ち上がって廊下に出たりしていた

将軍は一切氣にする事なくまた机に突つ伏して寝ようとする

しばらくすると先生が新しい教卓それでもまだボロいを持って戻ってきた

同じようなタイミングで明久と雄一が教室に入ってくる

そして明久は席に着き、雄一はゆっくりと教壇に歩み寄る

「さつきも説明したが、俺はこのFクラスの代表だ。代表として皆に一つ聞きたい」

雄一の視線が教室内の各所に移る

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

備品を順番に眺めていく」と告げる

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい

が  
不満は無いか？

「 「 「 大ありじゃあつ！ 」 」 」

Fクラス生徒の魂の叫びが木霊し、寝ていた将軍はビックリして飛び起きた

「 だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている 」

「 そうだそうだ！ 」

「 いくら学費が安いからと言つて、この設備はあんまりだー改善を要求するー。 」

次々と挙がる不満の声

雄一は自信に溢れた笑みを浮かべ

「これは代表としての提案だが  
験召喚戦争を仕掛けよつと思つ」

FクラスはAクラスに試

戦争の引き金を引いた

## 一人の観察処分者

問 以下の英文を訳しなさい

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師の「コメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 ?      「 \* × 」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

將軍の答え

「（テスト用紙がビニリに破けてる）」

教師のコメント

何故あなただけテスト中にカッターを投げられていたんですか。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

至る所から不満の声が上がる

将軍はすっかり目が覚めてしまい、教壇に立っている雄一に視線を向ける

「そんな事はない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

「セイ!まで言つからには根拠があるんだうつな?」

「勿論だ。このクラスには試験召喚戦争で勝つ事の出来る要素が揃つていて。それを今から説明してやる」

雄一は不敵な笑みを浮かべて壇上から皆を見下ろす

「おい、康太。畠に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に  
来い」

「…………（ブンブン）」

「は、はわつ」

康太と呼ばれた男子は手と顔を左右に振り否定のポーズを取り、姫  
路瑞希はスカートの裾を押さえて遠ざかる

そして康太は顔についた畠の跡を隠しながら前に出る

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性職者だ」<sup>ハツリーニ</sup>

「……………（ハングン）」

「ムツツリーーー？」

もちろん将軍は知らないが、ムツツリーーーの名を聞いた男子生徒達がざわつく

「おー、吉井。ムツツリーーーって男はそんなに有名なのか？」

「まあね。男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑の意味で有名なんだ」

「姿行動名前からしてただのスケベなんじゃないのか？」

「……………。（アソアソ）」

「違つて將軍。ムッシリーはただのスケベじゃない。ムッシリスト  
ケベなんだ」

「……………。（ブンブン）」

「うそだよ！」

まあそんな事しても無駄だわ! などムッシリーの名を認識

「姫路の事は説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知つてゐる筈だ」

「えつ？ わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

姫路瑞希はAクラスに入る程の学力を持っているのだが、振り分け試験当日に高熱を出してしまい途中退席

結果、Fクラスに振り分けられてしまったのだ

「そつだ。俺達には姫路さんがないんだつた

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何をいらないな」

将軍は予想以上にバカな声を上げるバカに頭を悩ませる

「木下秀吉だつている。当然俺も全力をつくす」

秀吉は学力はさほど高くないが演劇部のホープ、双子の姉がいると  
かで有名

雄一も小学生の頃は神童と呼ばれており、実質このクラスにはAク  
ラスレベルが2人いる事になる

気が付けばクラス内の士気は上がっていた

「それに、吉井明久だつている」

そして一気に下がった

周りでは誰だよとか聞いた事ないぞ等の声が上がる

「そりゃ。知らないようなら教えてやる。」  
「この肩書きは観察処  
分者だ」

「……それってバカの代名詞じゃなかつたっけ？」

クラスの誰かから致命的な台詞が

將軍も実は観察処分者なため、自然と懐に手を入れて何かを取り出そうとしている

「ち、違つよつーちょっとお茶目な16歳に付けられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ。教師の雑用係をし、いてもいなくとも戦力に影響がない雑魚だ」

雄一の言葉に將軍の何かが切れ、明久が反論しようとしたと同時に  
懷に忍ばせてあつた何かを投擲

投擲された何かは雄一の顔のすぐ横に刺さつた

その何かとは  
明らかに懷に入るサイズじやない大きさの斧  
だった

一瞬静まり返つた直後に皆が將軍の方を見る

「先に言つてやる。ムカつくから投げた」

「こんなバカでかい斧をどうから取り出した！？いやそれ以前に、俺は明久の事を言つたんだぞ！何でお前がキレる必要があるんだ！」

？」

将军は投げよつとした一本田をしまい、キレた訳を説明してやる事にした

「俺も観察処分者だからだ」

「えええええーつーつー」

「明久、雄一を始め、クラス内の誰もが驚いた

「ちょ、ちょっと待つて将軍！君も観察処分者なの…？」

「ああ。訳ありでな」

「私みたいな試験の途中で退席しちゃったんですか？」

「いや、そうじゃない。何つうか……あまり人に言いたくないんだよな。物凄く間抜けな理由だから」

「明久みたいにバカやらかしたのか」

ズドンズドンっ！ガスッ！

茶化した雄二の顔面右隣に一本目の斧、顔面左には銀の杭が刺さつていた

「……何なんだそれは？」

「次は眼と鼻と耳と口を切断してやる」

「質問に答えるー何処から斧やボーガンなんて物騒なモンを取り出した！？」

「俺の懐に入らない武器など存在しない！」

「断言するなー。」

「落ち着いて将軍！ 今だけは雄一を殺すのを待つてあげて！」

「今だけじゃねえだろー。」

「スマンな吉井。どうも俺はあいつが生物的に大嫌いみたいだ

「安心しろ。初対面だが俺もお前が嫌いだ」

将軍はフンッと息を吐きながらボーガン（連射式）を懐にしまつ

そこへ明久が明久が恐る恐る話しあげる

「それにしても……ボーガンや斧などどうやって用意してるの？」

「大抵の武器は自分で作ってるんだ。裏ルートで武器を取り寄せて改造したり、オリジナルで作ったり。最近はDSや携帯を改造して情報端末や盗聴機も作ったりしている」

話を聞いたクラス内の男子がマーライオンみたいに口をアングリさせた

「それは置いといて、何で転校してきたばかりの君が観察処分者に

？」

明久の言葉に将軍は顔を歪めてしまつ

「……………どうしても言わなきゃダメか？」

「多分言わなかつたら雄一があらぬ理由で決め付けるだろ？から」

「はあ……………分かつた。」

将軍は渋々、自分が観察処分者になつてゐる理由を打ち明ける事にした

「ウチは両親が共働きでな。父さんが研究員、母さんがゲームプログラマーと言う家系で、海外で仕事をしているんだ」

「　　ふむふむ　　」

「ある日、母さんから電話がかかってきて、『～めーん。ゲームの開発費用が少し足りなかつたから学費から抜いちゃつた』って話ををして一方的に切りやがつた」

「　　」  
.....  
「　　」

未だかつてない憐れみの視線の中、将軍の拳がプルプルと震える

「直ぐ様電話し直したら着信拒否された。父さんにも電話したら、見透かされてたかの様に着信拒否された…………そこで学園長に頭を下げて直談判したら、『観察処分者になる代わりに学費の支払いを少し延ばす』と言う条件を出してくれてな。やむ無くその条件を飲んで俺は観察処分者になった、と言つ哉だ」

話し終わった将軍の拳にはいつの間にか斧が握られていた

両親に対する殺意であろう

将軍はその溢れる殺意を何とか押さえ込んで自席に腰を下ろす

そして試召戦争のルールが書いてある紙を開く

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立ち会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。尚、総合科目勝負は学年主任の立ち会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の和がこれに当たる

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると〇点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はトドメを刺されて戦死しない限りは、テストを受け直して点数を補充する事で何度も回復可能である。

五、相手が召喚獣を呼び出したにも関わらず召喚を行わなかつた場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

八、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を

常に意識する」こと。

以上が試験召喚戦争のルールである

## 戦争開始 Dクラス対Fクラス

問 以下の問いに答えなさい

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

将軍の答え

「全ての敵を消滅させる波動」

## 教師のコメント

怖い事を考えないでください。あと、どうして君の答案用紙がボロボロなんですか？

「観察処分者の召喚獣って、疲れや痛みが召喚者に返ってくるのか  
……」

試合戦争のルールと観察処分者の設定と役割を認識した将軍

ルールが記された紙を鞄に放り投げる

「物に触れる事が出来るのは便利だが、やつぱりめんどくさいな」

「さうも言つてられんぞ将軍」

将軍に話しがけてきたのは誰もが振り返る様な美少女　もとい、  
美少年だった

「えっと確か……木下秀吉、だったな?」

将軍は何かクラスメイトの名前を覚えていたようだ

「で、どうしたんだ？」

「うむ。実はお主に用があつての」

「用？用つて何だ？」

「庶と叫ひのせワシのジコロの件の事ぢや。」こんなナニをしておるがワシ  
は

「性別?句を書つてゐるんだ?お前は男だわ

「うーん。」

将軍の言葉に何故か驚く秀吉

将軍は頭にマークを浮かべながら首を傾げる

「…………こつからじや？」

「え？」

「こつからワシが男じやと知つておつたのじや？」

「こつから？そんなもん最初に見た時から分かつたつひつの。男子の制服着てるし、声だつて低いし」

将军は当たり前の様に言つが秀吉はワナワナと震えている

将軍が『何か怒らせる様な事を言ってしまったのか?』と思つたその瞬間

ヒシツ

秀吉が將軍にハグをしてきた

「えつー? な、何やつてんだ秀吉ー?」

「お主だけじゃーー！田でワシを馬と見抜いてくれたのはー！ワシは嬉しいだらけじゃー！」

「いやいやいやちょっと待て！そんな事でいちいち抱き付くのかお前はー？嬉しいのは分かったから離れろ（って何か髪から甘くて良い匂いがするからも少しのままにこようかな……）」

..... プッチーン

教室内の何かがブチ切れた

「ん？今何かがキレた様な音があああああつー…？」

突然将軍に向かつて大量のシャーペンや定規、カッターが投げられた

將軍は秀吉を抱えながら間一髪で回避

「て、テメエら何の真似だ！あと吉井、貴様まで俺にこんな物を投げ付けるたあどうこう了見だ！？」

「将軍、君だけは……君だけは僕の味方だと信じていたのにー！」

「…………抹殺」

「転校生の分際で西のアイドル、木下秀吉に抱き合へとは良い度胸  
じゃねえか！」

「逆だ逆！秀吉から抱き付いてきたから冤罪だ！」

「どうしておひやま 羨ましいんだよつ！」

「セリは言つて直さないのかー？おい坂本、ここつりを向とかじつうー！」

将軍は雄一に一応助けを求めてみるが、雄一はアイコンタクトでこ

う云える

『散々俺に攻撃したバチが当たつたから自分で何とかしろっ

6

「ブチ殺すぞテメエ！」

再び殺傷能力と恨み妬みが込められた文具が將軍に向かつて放たれる

将軍は懐からヌンチャクを取り出してアクションスター並のヌンチャクさばきで攻撃を防ぐ

「この俺に武力行使が通用すると思うなよ。」

將軍が懐にヌンチャクをしまい、再びそこから武器を取り出そうとした所で先生が入ってくる

「皆さん。次はテストですので早く席に着いてください」

「チツ」

カツターを投げた全員が舌打ちをしてから席に着く

将軍は内心ホッとしたのだが

「これで終わる訳が無かつた」

…

「だはあ～、疲れた～！」

ただ今将軍は疲労困憊となつて卓袱台に突つ伏している

何故こうなったのかと言つと……

テストが始まる

始まると同時に将軍にカッターが投げられる

將軍が懐から出したナイフで防御

その後10分毎にカッターが飛んでくる

將軍の答案用紙がビリビリになる

……と言つた一連の行動が昼休みになるまで続いた

『投げてた奴等は後で剥製にしてやるつか…』

完全に殺意が剥き出しになつてゐる心の声

「さて、Dクラスへの宣戦布告の使者と言う大役を決めたいが  
明久と将軍で良いだろ」

何故か自分の名前が上げられた事に気付く

「ちょっと待った雄一。下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷  
い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加える事はない。騙されたと思って行つてみろ」

言われるまま明久は將軍と共にロクラスへ向かつた

だが將軍は雄一の意図と先程カッターを投げていた奴らの反応に気付いていた

「雄一が嘘をついてる?」

「ああ。このまま宣戦布告すれば十中八九リンクをくじつ。奴らの反応を見てすぐに分かつた」

「雄一の野郎……早速嘘ついてやがったのか畜生！」

意図が分かったとはいへ、このまま宣戦布告しなかつたら試召戦争が始まらない

將軍は懐から2リットルサイズのコーラとコップを一つ取り出して  
明久に渡す

「将軍。君の懐にはいろんな物が入ってるんだね…？」

「さっき言ったる。俺の懐に入らない物など存在しない」

「もしかして君は、『えもんの』コータイプ?」

「それだったら俺は今頃『地球破壊爆弾』でバカ共を消し炭にして  
いる」

「それ自分も死んじゃうからね?」

「でもその内殺りかねないかもしない

だって平氣で斧を取り出す人間だから

「じるや、『一ラなんてどうするの?僕達は今から宣戦布告し

に行くんだよ？」

「ただけど同じ学舎にいる人間だ。乾杯して和ませてから宣戦布告した方が怒りは少ない　はずだ」

「今の一瞬の間は何？」

「さて、着いたぞ」

「話を逸らされた！？」

2人はロクラスに到着し、将軍がドアを開ける

「失礼しま～っす」

まずは丁寧に「」挨拶

Dクラス生徒（主に女子から）の視線が集中

「誰だあいつ？」

「見た事ない顔だな」

「ひょっとして朝に聞いた転校生じゃないか？」

「ちょっとカッコいいかも」

「付き合つてください」

熱烈なラブコールをとりあえず受け流し、将軍はクラス代表が誰かを尋ねる

「『』のクラス代表は俺だが、何か用か?」

出でたのはDクラス代表 平賀源一

将軍は懐からコップを取り出して彼に渡す

「あんたがDクラスの代表か。実は大事な話があつてここに来たんだ。まあ立ちながらで悪いが、とりあえず「コーラでも」

「あ、どうもありがとうございます」

平賀源一のコップにコーラが注がれる

「ほい吉井、お前も」

「あつがとう将軍」

明久のコップにも「一ラ」を注ぐ

「で、ラスト一杯は」

三つ目のコップにも「一ラ」が注がれていき

「坂本雄一からの宣戦布告じやあああああつーーー！」

敵代表の顔に「一ラ」をぶちまけた

「何してんの将軍んんんつー!? 穏便に宣戦布告するんじゃなかつたのー?」

突然の恐慌的な行動に待つたをかける明久

しかし、將軍の行動は更にエスカレート

今度はペットボトルに入ってるコーラを平賀の頭上からぶちまける

「オラオラ～、坂本雄一の宣戦布告が飲めねえのか～?」

「やめてーっ！それ火に油注いでるだけだからーっ！」

「おかしいな。これで怒りの矛先が坂本に向くと思ってたのに」

「実行犯は君だから怒りの矛先が二つとも向くのは当然でしょーー？」

自分達の教室に戻った明久と将軍

明久はボロボロだが將軍は無傷…………いや、制服に赤い何かが付着していた

「おい將軍。その赤いシミは何だ？」

「細かい事をいちいち気にするな、ハゲるぞ。つうかハゲろ」

「細かくねえしハゲろって何だ！」

雄一は何故將軍だけ無傷で赤い何かが付着しているのかを明久に聞いてみる

すると明久の顔から血の気が失せていく

「…………R18映像が目から離れない…………」

相当グロい光景だったのかその場で塞ぎ込む明久

「将軍。まさかとは思うが、殺つてないよな?」

「殺つてない　　とは断言しないゾエ　　」

「警察を呼べーここに殺人鬼がいる!」

「[冗談だ。いくら俺でも一線を越えたりはしない]（ドスン）」

将軍の懐から赤い液体が付着しているチエーンソーが落ちた

落とした当人は慌ててチエーンソーを拾い懐にしちまつ

「一線を越えたりはしない

「明らかに悪しきれてなかつたぞー?」

將軍はいろんな意味で侮れない人間である

そして明久達はミーティングの為屋上に移動

そこで昼飯を済ませる事になつたのだが……

「吉井。 それ何だ？」

「何つて、 塩と水」

「お前は将来探検家を目指しているのか?」

明久の貧乏状況に睡然とする将軍

将軍も武器や道具を自作したり裏ルートで取り寄せたりしているが  
ちゃんと残す分だけは残している

だが明久はゲームや漫画の為に食費を削っている

趣味は本当に金がかかってしまう物だ

「……あの、良かつたら私が弁当作つてきましょつか?」

「え？」

瑞希の優しい言葉に明久は耳を疑つた

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお皿でよければ」

瑞希と明久の様子を見て将軍は「何か羨ましいな」と呟く

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作つてくる

なんて「

美波が面白くなさそうな雰囲気で口づけ

「島田。そんな事言つたら失礼だろ。それなら自分で弁当を作つてくれれば良いじゃないか」

将軍の言葉に皆が振り向く

「え？ 将軍、料理出来るの？」

「何だその疑いの眼差しは？」



## 戦争開始 Dクラス対Fクラス（後書き）

いよいよDクラス対Fクラスの試召戦争が始まります。頑張りますので応援よろしくお願いします

## 将軍はエクリスの匂い?

問 以下の問いに答えなさい。

「ベンゼンの化学式を書きなさい。」

姫路瑞希の答え

「C<sub>6</sub>H<sub>6</sub>」

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン=ベンゼン」

教諭の「メント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

「B - E - Z - N - E - Z」

教諭の「メント

あとで土屋君と一緒に職員室に来ぬよいひし。

将軍の答え

「ベンチャーエンターナメント」

教諭の「メント

君も職員室に来なさい。

とうとう始まったDクラスとの試召戦争

前線は秀吉率いる先攻部隊、中間辺りに明久と美波が率いる中堅部隊が配置されており、將軍は教室内で情報端末（改造したDS）を使い教師についての情報を整理していた

本人曰く、どうやって情報を入手したかはナ・イ・ショ らしい

「美人で才女な学年主任が高橋女史。採点が甘い世界史の田中先生。化学担当の五十嵐先生に布施先生。……婚期を逃して単位を盾に生

徒達に交際を迫るようになつた数学の船越先生……」ことはなるべく  
忘れよ」

将軍は教師情報の確認した後、続いて学園内の構図を見る

そこへクラスメイトの一人、須川が雄一に伝言

「吉井隊長からの伝言、『偽情報で教師を別の場所に誘導して欲しい』との事」

「そうか。確かに木内教諭が呼ばれていたから……船越教諭辺りに流すか。明久が体育館裏で待つてるとでも言つておけば確実だ」

雄一の卑劣な言葉を聞いて將軍の頭に電球マークが浮かぶ

「その大役、俺に任せてくれないか？」

將軍は自ら偽情報を流す役目を名乗り出した

「俺なら誰にも気付かれずに放送室に行ける自信がある。使っておいて損は無い筈だ」

須川から了解を得て、將軍は気配を消しながら目的地の放送室に向かつた

雄一は怪しげと睨んでいたが今更やめさせても、と教室に留まる

まあ気配を消さなくとも前線、中堅部隊のお陰でそれぞいじやない状態なんだが

ピンポンパンピンポーン

『数学担当の船越先生、船越先生。お知らせがあります。二年Fクラスの吉井明久が体育館裏で待つてるとの事で、生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそいつです』

スピーカーから流れた情報を聞いた瞬間、雄一はゲラゲラと笑い始めた

しかし、その笑いは一瞬で止む事に……

『つてのは俺のお茶目なジョークDEATH 本当は坂本雄一が「Fクラスでティープキスを教授して貰いたい」と伝えて欲しいと言われたのでお伝えします』

雄一の顔に幾つの青筋が……

『歯を綺麗にして是非とも向かつてあげてください』

ブツッ！

「将軍んんんんんんんんんんんんんん…」

校舎全体に響く雄一の声

何かが物凄い勢いで向かってくる音を察知して、雄一は窓から外へ

飛び出していつた

「坂本……アンタあ男だよ！」

「ああ。感動したよ。代表と言う立場でありながら、まさかクラスの為にそこまでやつてくれるなんて！」

「雄一。君は今最高に輝いているよ！」

この朗報（笑）がFクラスの士気に拍車をかける

「皆！雄一の死を無駄にするな！絶対に勝つて、勝利を雄一の墓に報告するんだ！」

ੴ ਸਤਿਗੁਰ ਪ੍ਰਸਾਦਿ

明久の檄でFクラスの士気が更に上昇

放送室を去った後の将軍は良い笑顔をしていた

「よおつ、 明久」

「將軍！」

役目を終えた將軍が明久の所にやつてきた

「どうだ様子は？」

「盛り上がった士氣とは逆に前線部隊が減らされてるみたいだよ。  
秀吉を含む数人は回復試験を受けているから何とか手を打たないと  
……」

せつかく偽情報を流したのに、と將軍は少しばかり落胆

だが落ち込んではいられない

Dクラスの前線部隊がどんどん押し寄せてくる

「負けてたまるかあつーサモンー！」

明久が叫んだ瞬間、足元に魔法陣が現れ、制服に木刀を持った明久の分身が姿を見せる

「Fクラス中堅部隊、吉井明久。貴公の相手をあがつ！」

突っ込んできた敵召喚獣の前に現れたので衝突してしまい、明久の肩に痛みが走る

将軍は思わず笑ってしまった

「この部隊長はバカだ！俺一人で充分だから、皆は残りを！」

「失礼な発言されてるな明久…」

「くたばれ吉井！」

倒れてる明久の召喚獣に襲い掛かる敵召喚獣

明久は低い姿勢のまま横つ飛びさせ、通過した敵の足を掬つて転がした

そしてロクラスの背後を指差して叫ぶ

「ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

「なにいっー？」

「なぬっ！？何処だ！？」

フルネーム霧島翔子

Aクラスの代表にして学年首席の美少女

Dクラスだけでなく、その場にいた全員が振り返っている

將軍も例外ではない

「いない……あつ、陽動作戦か。ならもっと景気良くやらないとな

将军は明久の行動を察知して懐から手榴弾を取り出す

手榴弾……？

「しょ、将軍！？そんな物をどつする気だよー。」

「安心しろ。こいつはスマーケグレネード。煙幕手榴弾だオラァア  
アアアアアッ！」

安全ピンを引き抜かれた手榴弾は投げた直後に大量の煙を放出

「う、うわっ！何だ！？」

「前が見えない！」

「おっ、丁度良い。ここでも使つか

更に將軍は懷から取り出した爆竹に火を点け投擲

爆発音が響き渡り戦闘の継続は困難になつた

「將軍、君はなんて過激な事を……」

「これくらいやつた方が搅乱出来るだろ？ほり、さつさと云々き上げ  
な

将軍の活躍によって明久の部隊はひとまず窮地を逃れた

この時明久は、「将軍って ラえもんの悪人バージョン……」と恐怖しながら呟いた

やつと煙幕が晴れてDクラスがFクラス部隊の異変に気がつく

「何だ、一人しかいないぞ？しかもさつき煙幕を出した転校生じゃ

ないか

「卑怯な真似をしてくれるじゃないか！」

「でもワイルドで素敵」

「付き合つてください」

将军を睨み付けるDクラスの前線部隊

一人しかいない状況でピンチな筈の将军は不敵な笑みを浮かばせて  
いた

「一度くらいには戦つてやらねえとな。自分の召喚獣がどんな姿か気にならし。肩慣らしには一度いいぜ！サモン！」

キーワードを唱えた将軍の足元に魔法陣が出現し、召喚獣が展開される

黒い鎧を装着し、右手に持つたノゴギリ刃の剣

更に一本の銃剣を背中に背負つた将軍の分身

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

将軍の点数を見て驚愕するロクラスの面々

「能ある鷹は爪隠すつてな。しかし武器を持つてる感覚まで伝わる  
とは、観察処分者つてスゲエな」

将軍は早速召喚獣を動かしてみる

「よつ、まつ、まつ。結構簡単だな」

なんとあつとこう間にコツを掴んだ

一通り動かした後、眼前の敵に剣先を向ける

「最初は誰が来るんだ？」

余裕を見せた顔で挑発する将軍

「ひ、怯むな！相手はたった一人だ！取り囲んで討ち取れ！」

「やっぱ正面から来る奴はいないか」

將軍を取り囲むDクラスの前線部隊

「相手は所詮付け焼き刃、この人数なら勝てる！」

Dクラスの一人がそんな風に声をかける

将軍は一番最初に潰す敵に狙いを定め

「セーフー（ザシュウ）」

「なつ！？」

将軍の分身は敵召喚獣の首を斬り落とした

「ガンガン行くぜーっ！！」

初召喚とは思えない動きで次々と敵召喚獣を斬り捨てていく將軍の  
召喚獣

「ば、バカな！」

「一瞬で全滅だとー!?」

將軍の操作技術は敵の舌を巻かせた

「じゃあな。お陰で勝利への道が近付いてきたぜ」

颯爽と走り去る将軍の背には、うつとりと見とれるロ女子の視線が集中していた

「Dクラスの前線部隊を全滅させたの！？たった一人で！？」

「えっ？ な、何だ？ そんなにダメな事なのか？」

教室に戻ってきた将軍が現状を報告すると明久を含むクラスメイト

全員が目を丸くする

扱い慣れてない筈なのに一人でロクラス前線部隊を壊滅

誰もが驚き称える功績である

「凄いよ将軍！これだけ痛手を負わせたなら、すぐに敵の本隊が出てくるかもしないよ…」

「つむ。これ以上ない程頼もしい味方じやの」

「！」のままなら敵本隊を落とせるぞ！』

「將軍万歳！」

將軍は自分が英雄扱いされている事に照れてしまつ

「既に、將軍の功績を見習つてロクラスを倒そつ！勝利はもう目の前にある！」

「「「おおおおおおおおおおおおおお」」」

FクラスのテンションはMAXになった

その最中、Dクラスの本隊が動いたと言つ報告が耳に入る

「皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

Fクラスより実力が高いから個人同士の戦いに持ち込むDクラス

本隊の人間も分散してFクラスを潰しにかかっている

敵代表平賀源一の防備が薄くなるものの、將軍をぶつけるか数人で取り囲まない限りFクラスは勝つ事が出来ない

將軍は直ぐ様平賀源一に勝負を挑もうとするが近衛部隊に阻まれてしまふ

明久に任せようと考えたが、当人も近衛部隊に邪魔されて動けない

「畜生！あと一歩だったのに！」

明久の悔しがる発言を余所に、平賀の後ろからコソコソとある人物が近付いてくる

将軍はアイコンタクトでそれを明久に教える

「姫路さん、後はよろしくね」

「は？」

「あ、あの……」

瑞希が申し訳なさそうに敵代表平賀源一の肩を叩き、現国勝負を申し込んだ

「うー、うめんなさい。」

「え？ あ、あれ？」

現代国語 129点

Dクラス 平賀源一

V  
S

現代国語 339点

Fクラス 姫路瑞希

瑞希の召喚獣の大剣は一撃でロクラス代表の召喚獣を真つ二つにした

将軍を殺そりとしたら標本になれると思えー。

問 以下の問いに答えなさい。

「good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい」

姫路瑞希・将軍の答え

「good - better - best

bad - worse - worst」

教師のコメント

その通りです。将軍君は今回、眞面目に答えてくれて嬉しいです。

吉井明久の答え

「good - gooder - goodest」

### 教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

「good - gooder - goodest」の比較級と最高級は語尾に - er や - est をつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

### 土屋康太の答え

「bad - butter - bust」

### 教師のコメント

「悪」 「乳製品」 「おひさま」

### Dクラス代表討ち死に

この報告にFクラスは勝利の雄叫び、Dクラスは悲鳴の大合唱

「スゲヒよー本当にDクラスに勝てるなんてー」

「これで畠や卓袱台ともおれいばだなー」

「将軍万歳！」

「姫路さん愛していますー」

今日の戦争で活躍した将軍が讃め称えられている

将軍は照れながら頭をかき、皆と握手していく

「ありがとう将軍！君のお陰でロクラスに勝てたよー。」

「いやいや明久。皆の協力があったからこそ勝てたんだ。  
人で戦うものじゃない……皆で戦うものなんだ！」  
戦争は個

将軍と握手を交わす明久

そこへ忘れられていたクラス代表の姿が……

「将軍」

「おっ。これはこれは代表の坂本雄一。喜んでくれ。俺達はロクラスに見事勝利した」

「ああ。お前の陰だな。握手させてくれ」

右手を伸ばす雄一（左手を後ろで隠しながら）

将軍は笑顔で握手を交わそうとした

ヒュンツ（雄一が何かを突き出さうとする）

ガシッ！（将軍が左手を握る）

カラソツ（雄一が持っていた物を落とす）

「…………」のペンチで何をするつもりだった？』

人斬りを彷彿させる将軍の目が雄一を睨む

雄一は目を閉じて優しく言い放つ

「お前の爪つて、剥がしたくなる程綺麗だよな」

ボキボキボキボキボキボキつ！

「ぐおおおおおおおお！一瞬で指の関節が全部外されたああああああああああああ！」

「さて、どれで切断してやるつかな～」

将軍は残った雄二の右手を捻りながらナイフ、日本刀、斧、鎌、改  
造チーンソー（片手タイプ）を床に整列させていた

「よし。チーンソーにするか」

「ま、待て将軍！そんな物で俺の指を切るつもりか…？」

「心配すんな。万が一ショック死しちまつたらお前の内臓は有効活用してやる。肺も腎臓も心臓も2つあるから高く売れるぞ」

「心臓は一つしかねえぞ！？」

将軍がチヨーンソーのスイッチを入れ、チヨーンソーの凶刃が唸り声を上げる

流石にヤバいと察知した明久は将軍を説得

「落ち着いて将軍！せっかく勝利したのにクラス代表を殺しちゃま  
ずいよー！」には勘弁してあげて！

「……坂本雄一、詫びろ

「す、すまなかつた……」

不本意ながら謝罪した雄一

將軍は軽く舌打ちをした直後に雄一を解放した

「……ブツブツ……」

將軍が何かを呟いている

気になつた明久と雄一は悟られなつように耳を傾ける

「…………人体標本…………」

恐ろしい単語を呟いていた……

「まさか姫路さんがFクラスにいるビックリが、転校生まで高得点者  
だなんて……信じられん」

ヨタヨタと歩み寄るロクラス代表平賀に、瑞希は申し訳なさそうに  
謝る

騙し討ちっぽいが勝負は勝負

負けてしまったDクラスに反論の余地はない

「ルールに則つてクラスを明け渡そ。 ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか?」

「いや、その必要はない」

雄一の言葉に周りがどよめく

「え? なんで?」

「Dクラスを奪つ~~は~~は無いからだ」

明久は雄一の言つてる事がわざり分からなかつた

「忘れたのか？俺達の田標はあくまでもAクラスだ。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが、それでいいのか？」

「もういろいろ条件がある」

そう言つて雄一はDクラスの窓の外に設置されているBクラスの室外機を指した

条件とはBクラスの室外機を壊してもういたいとの事

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあるとは思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

「ちょっと待った

取引の内容に将軍が待つたをかける

「何だ将軍。不満か？」

「不満とは言わねえ。ただ、負けた上に教師に目を付けられるのは少し気の毒過ぎる」

将軍の心優しい言葉にDクラスから感謝の視線が殺到した（主に女子から）

「ならお前が何とかするのか？」

「ああするとも。ちょっと待っててくれ

」そう言つて將軍は懐を漁り始めた

スタンガン、日本刀、斧、鎌、チエーンソー、煙幕手榴弾、ボーガン（連射式）、2リットルサイズのオレンジジュースに大量のお菓子と、ゴロゴロ出てくる

「明久。ドサクサに紛れてジュースとお菓子を拾うな」

「雄一。貴重なカロリー摂取の為には仕方無い事なんだよ?」

「窃盗は仕方無い程度じゃ済まないだろ」

「あれ?おかしいな。確かにの中にあるはず……お、あつたあつた」

やつと目的の物体を探し当てた将軍

手に持っていたのは小型の機械らしき物だ

「何だそれは?」

「特殊な電磁波を発生させて機械を狂わせる装置だ。」いつを取り付けてリモコンのボタンを押せば室外機は動かなくなる

将軍は窓の外に出て、Bクラスの室外機に装置を取り付けた

一仕事終えた彼は床に散らばった日本刀やら何やらを拾い集め懐にしました

「これで後はスイッチを入れれば良いだけだから、必要な時に言つてくれ

「それは良いが、一つだけ聞かせてくれ

「何だ？」

「それ…………どうやらてしまつてんだ……？」

「企業秘密」

分からぬい謎が一つ増えたまま、今日は解散となつた

将軍を殺そびてしたら標本になれると思えー（後書き）

将軍と姫路瑞希の活躍で見事Dクラスに勝利しました！次回はひょ  
つと危ない話の予定です。

集団で襲つのは最低の極みだ！

ロクラスに勝利し、将軍は意氣揚々と皿ヶ崎に帰ってきた

「ただいま～って言つても誰も居ないのは当然だよな」

父親が研究員であるから研究所に缶詰、母親はゲームプログラマー故に下見やら何やらで世界中を回っているから将軍は一人暮らしをしている

しかも毎月十万たる仕送りが口座に振り込まれてくるので生活には困らないし、武器も自作できる

「さて、今日の晩飯は何にしようか？」

腹が減った将軍は食事を作るため冷蔵庫の扉を開ける

中に入っていたのは

瓶に詰められた塩

袋に入ってる砂糖

ケチャップとマヨネーズ（一本の半分ずつ）

唐辛子数百本（笑）

2リットルサイズのお茶

プリン一個

「調味料とプリンしか無いだと…………！？いや、何で唐辛子だけ大量にあるんだ！？そもそも十日分買つた筈なのに唐辛子だけって……！？」

冷蔵庫の中の現状に落胆していると、一枚の紙が目に入る

それを手に取り見ると……

『将軍へ。お腹が空いたから冷蔵庫の中の食料を拝借しちゃいました。代わりに私の大好きな唐辛子を入れておきます。何か困った事があつたら連絡してね？キヤハツ』

暫しの沈黙後、手紙を「ゴミ箱にダンクしてから携帯を取り出し電話を掛ける（非通知設定で）

その相手は将軍の母親

『（フルルルルル…ガチャッ）はい。どちら様ですか？』

「……キサマラブチ殺ス」

ピッ！

母親が慌てたのを確認してから電話を切る

多少の気晴らしがほなつたようだ

将軍はとつあえずテーブルに座り、ラスト一個のプリンを食べる

「…………あ。買ひ物行つてこな

「ねえねえ聞いた優子？今日Fクラスが2つ上のDクラスに勝ったんだって」

「聞いたわ。下位クラスだからって油断するから負けるのよ」

夜道を歩く2人の女子生徒

一人はAクラス所属で秀吉の双子の姉である木下優子

秀吉と瓜二つの容姿なので知り合いですら間違う程似ている

もう一人は彼女と同じAクラスの工藤愛子

ショートカットでボーアッシュな雰囲気の女子だ

最下層のFクラスがDクラスに勝つたと言つ話をしながら帰路を共にしていた

「何でも転校生が活躍したらしいよ？確かに名前は……将軍って言つてた」

「…………何それ。 いつの時代の人？」

Fクラスが勝てたのは姫路瑞希と将軍がいたから

その中でも将軍が話題の中心となっていたが、優子は名前を聞いてドン引きしてしまう

「クラスの皆がそう言つてたから間違いないよ?」

「はあ……」それだからFクラスは

変人の溜まり場とも言われるFクラスに頭を悩ませる優子であつた

「そうそう。これも聞いた話なんだけど、この辺り変質者が出るらしいよ?」

「変質者？」

愛子は近くに貼られているポスターを指す

そのポスターには「変質者出没注意！」と大きく書かれていた

用心しながら歩いてると、目の前の角から人影が……

チカチカと光る街灯がその人影を照らす

「「つー？ 海老ー？」

何故か頭部が海老（恐らく被り物）となつている人間が2人に近付いていく

一目でヤバいと感じた2人は急いで引き返そうとした

「逃がさねえよ？」

後ろから男らしき声

だがそこにいたのはヒトデ（笑）、海月（笑）、蟹（笑）の被り物をした変人集団だった

「な、何……何なのよアンタ達はー…？」

「答[え]る必要もねえな」

海老（笑）が合図すると後ろの3人が2人の口を塞ぎ自由を奪つ

「んーーっーんーーっー！」

「よし。人目に付かない場所に行くぞ」

「マルミヤの～マルは～丸坊主のマル～マルミヤの～ミヤは～都落ちのミヤ～ 意味は特に無いけど、何故かそう名付けた～」

近くにあるスーパー「マルミヤ」で買い物を済ませた将軍は、店内で流れていた音楽「マルミヤソング」を歌いながら帰っている

母親に食料を横領されてしまったので費やした金額は一万を越えた

「唐辛子だけじゃ人間は生きていけねえって毎回言つてんのに全く理解してねえな。次にあいつから電話かかってきたら着信拒否してやる

将軍の怒りはまだ治まっていなかつた

因みに彼の母親はどうしようもない辛党で、白米やお菓子にもタバ  
ス口をかけるアホである

子供の頃、オヤツに出されたプリン（超激辛仕立て）を食べたら口  
から火を吹き、翌日には尻が大変な事になつたらしい……

「母親なら息子の健康を考え『…………か…………』」うつづく  
「…………」

文句を言つてゐる途中で何か声が聞こえたよつた気がする

『のせいか?』と思いつつ、神経を耳に集中させる

『誰か助けてーっ!』

「ひー悲鳴ー?」

その悲鳴は廃工場から聞こえてきた

将軍の現在地は普段滅多に人が通らない道なのだが、  
から帰る時はいつもこの道を使用している  
「マルニヤ」

将軍は両手に持っていた袋を電柱の側に置き、直ぐ様田の前の廃工場の中へ駆けていった

「嫌つー…やめてー…」

「いくら叫んでも誰も来ねえよ。ここは廃工場だし、この近くを通る人間は滅多にいない。大人しくしてた方が怪我しないで済むぜ？」

リーダー格の海老が蟹に押さえられている優子の制服をビリビリに破していく

その隣では愛子も海円とヒトデに制服を破かれている

「純白と黒か……なかなかそろじやねえか」

下着姿にされてしまった優子（純白）と愛子（黒）は体を隠す

「ボ、ボク達に何する気なの……？」

「ん？ そうだな……ストリップが嫌なら、イクまで俺のくすぐり地獄を受けてもらひ」

「く、くすぐり地獄？」

「俺のくすぐりテクは半端じゃ済まねえぞ。以前の獲物は1分でイツたからな」

「「「！」」」

海老の変態的かつ驚異的な攻撃に2人は恐怖を感じ、ヒトデ、海月、

指の関節を鳴らしてゆっくりと近付く海老

「誰か……誰か助けてーつ！」

「無駄だつて言つてんだろ？ 叫んだところで助けに来る奴は『ここにいるぞーつ』 そう、ここにいる……つて何つ！？ 誰だ！」

突然の声に魚介4人組はあるか、優子と愛子も辺りを見回す

魚介4人組の後に救いのヒーロー、將軍が立っていた

「…………今日の飯はシーフード炒飯だな」

海老、ヒトデ、海月、蟹の4人を見た將軍は呑気に晩飯の献立を即決した

將軍は目の前の現状を整理

『謎のシーフード変態軍団が同じ年くらいで下着姿の女子2人を襲つている』と言つ答えを一秒で叩き出した

「覚悟しろよ、シーフード軍団ー！」

「うぬせえーのガキーせつちまえー！」

ヒトデ、海月、蟹の3人がバットや警棒を持って將軍に殴りかかる

將軍はまずヒトデのバットをかわして左足の脛を本気で蹴る

「ほぎやああああつぶー?」

激痛で怯んだヒトデの顔面に拳を入れてバットを奪い、それを蟹に投げつける

まともにへりつた蟹は動きが止まり、更にまわし蹴りで吹っ飛ばされる

後ろから襲い掛かろうとした海月も

「海月は九割が水分で出来ているぞキーーック！！」

「（バキッ！）ぐあっ！」

どうでも良い知識が込められた蹴りで瞬殺され、残ったのは海老だけとなつた

「す、凄い……」

優子と愛子は見惚れていた（特に前者）

「さあて、残つたのはお前だけだ。海老炒飯かエビチリにしてやる  
から覚悟しろよ」

「ふん。俺はどっちも食つ方が好みだ。それに……」

バツ！（海老が着ていたジャケットを投げる）

バサツ（ジャケットで将軍の視界が真っ暗に）

ドガッ！（海老が強烈な前蹴りをくらわす）

「うわー！」

将軍は咄嗟にガードしたがバランスを崩してしまい、海老の拳が顔面に打ち下ろされる

「相手が悪かったな。こつ見えて俺は空手の都大会で優勝してんだよ」

「ぐつ……一海中生物が格闘技をたしなんでいたとは

「元々人間だ」

口元の血を拭つた将軍はお返しと言わんばかりにパンチを繰り出す  
が全てかわされる

「はつ。こんな遅いパンチ、欠伸しながらでも避けられつー!？」

海老の視界が手のひらで遮られる

將軍の田隠しフェイントが成功し、右拳が海老の顔面にヒット

直撃をくらつた海老は尻餅をついてしまつ

「……ゲホッ、ゲホッ」

「大人しく魚屋に帰れ。もしくは警察に出頭しろ」

海老は将軍に悟られないよう腰に左手を忍ばせ、隠していたナイフ  
に手をかける

「つー危ないー」

「！」のクソガキがあーーー！」

「「あやあつー。」」

將軍がナイフで刺された光景に優子と愛子は目を閉じる

恐る恐る目を開いてみると……紙一重でかわし、自分の右腕でナイフを持つた腕を挟む様に防いだ將軍の姿が

「高校生相手にナイフ使うのかアンタは？」

「調子に乗るなよクソガキが……大人をナメくさって、ただで済むと思つなよ……！」

海老の膝が将軍の腹に入り、ナイフを挟んでいた腕が緩んだ隙に引き抜く

「……も、キレた！謝っても許さねえ！」

再び刺そうと突進してくる海老

怒った將軍は懐から折り畳み式トンファーを取り出して海老の鳩尾にぶち込む

「いやあつー！」

海老の動きが止まつたところで將軍はトンファーでメッタ打ち

ナイフを持った腕にも一撃加える

カラーンと落ちたナイフを遠くに蹴つてトンファーをしまつ

「吹き飛べ！ 海老フライパーーンチ！ –（ドゴッ！）」

「それ……普通のパンチじゃん……（ドサッ）」

こうしてシーフード軍団は一人残らずKOされた

「ふう。シーフードながら手強かつた」

將軍はとつあえずそこいらに落ちてた縄を集めてシーフード軍団を縛り、携帯で警察に電話する

「ねえねえ優子」

「な、なに？」

「あの人も惚れてたでしょ？」

「つー？」

核心を突かれたのか物凄く焦る優子

だがその気持ちは正直で、彼女は將軍に一目惚れしてしまったのだ

「よしぃ。これで良いだろう。（クルツ）2人とも大丈  
× く て つ！？」  
× ¥ 全

將軍はいきなり理解不能な言語を口に出してしまう

そもそもその筈、彼の眼前には下着姿となつている優子と愛子がいる

その姿を直視してしまつた訳で……

「 「…………？」」

しかも2人は自分達の現状に気付いていない様子

將軍は顔を赤くしながら制服の上着とシャツを2人に差し出した

「そ、それ着とけよ。風邪引くといけないからな」

「えつ。あ、ありがとう……でも」

「もうすぐ警察が来るからあとよろしく（ダッシュ）」

警察が苦手な将軍は猛ダッシュで廃工場を去つていった

「やつぱつ晩飯はシーフードビンテムか」

**集団で襲つのは最低の極みだ！（後書き）**

見事にシーフード軍団を撃退した将軍でしたー因みにシーフード軍団の元ネタは某カードゲーム漫画の主人公からです（謝罪）

## 日本製殺戮兵器…その名はBENZO-

問 以下の問いに答えなさい。

「水」の化学反応式を書きなさい

姫路瑞希の答え

「 $2\text{H}_2 + \text{O}_2 = 2\text{H}_2\text{O}$ （これは卵焼きの原理）」

教師のコメント

正解ですが卵焼きに化学反応式は使いません。

土屋康太の答え

「 $2\text{H}_2$ （2人が…）+  $\text{O}_2$ （お互いの…）=  $2\text{H}$ （…ブシャアア  
アアアア…）」

教師のコメント  
解答用紙を血で汚さないでください。

吉井明久の答え

「酸素 + アレ = メタン」

教師のコメント

式になつていらない上にアレとは何ですか？

将軍の答え

「シーフードスープが出来る」

教師のコメント

出来ません。

「おひ、明久。おはよい」

「おはよい将軍」

下駄箱で鉢合わせた明久と将軍

軽く挨拶をした後で自分の下駄箱を開けてみると、そこには手紙らしき物が何通かあった

「ん？何だこれ？手紙？」

手に取った手紙はピンク色や白にハート型のシールで封をされており、明らかに女子からの手紙だと推測できる代物だった

「……将軍。それは噂に聞くラブレターだね？」

「つおつ！何か明久から禍々しきオーラが！？」

嫉妬剥き出しで明久はラブレターを貰った将軍を睨んでいる

「やはり君は僕の敵なのか死ねええええええっ！－！」

「危ねえ！？」

明久の恨み妬みが込められたハイキックをかわす将軍

「君はどこのまで僕を惨めにすれば気が済むんだ！共に雄一の幸福を  
ブチ壊そうと誓った決意は嘘だつたのか！」

「いや、そんな誓いはした事ないぞ！？てか、どうしてお前が血の  
涙を流さなきやならないんだ！お前にいつたい何があつたんだ！？」

そこから将軍は明久から話を聞く事に成功した（攻撃をかわしながら  
(ら)

Dクラスに勝利した日の放課後、教科書を取りに教室に戻つたらそ  
こには瑞希がいて手紙の様な物を置こうとしていた

その現場を明久は目撃してしまい、Dクラスに勝利した後で雄一と  
楽しそうに会話をしている瑞希の様子を思い出し、そこから瑞希の

好きな相手は雄一だと確定

以来、心の底から雄一を羨ましいと思つていたのだ

「そんな事があつたのか……」

「僕はもう、あの男を殺しても殺し足りない……！」

「何でだろうな。同じ観察処分者であるせいか、俺も奴が憎たらしくなってきた。生物的にも嫌いだし、何かあつたら俺も協力してやるよ」

「本当！？ありがとう将軍！君はやっぱり僕の味方なんだね！」

「昨日の敵は今日の友と言つぱうに、共通の敵が出来れば問題ナッシング！」

こうして明久は強力な味方を手に入れた

パシャツ

「つー誰だー？」

將軍は妙な音がした方向を睨むが誰もいない

思い過ごしか?と疑問を抱きながら上靴を履く

「よし。やうと決まれば早速雄一に復讐する計画を」

「その必要はねえよ。今日は朝からテストだったよな?」

「え？ そうだけど、それがどうかしたの？」

「一時間目は数学、そして監督の教師は船越先生。この意味が分からぬか……？」

ニヤリと悪人みたいな笑顔で言った将軍

その言葉の意味を理解した明久

2人は最高の気分で教室に向かった

「将軍。 テメエ後で覚えてやがれ」

「なんて卑怯な奴だ。近所のお兄さん（？）独身39歳を囮に使うとは」

昼休みになり、雄一と将軍は睨み合っていた

その原因は昨日の校内放送

監督の教師が船越先生だと知っていた雄一は事前に近所のお兄さん（？）を生け贋にしていた

「流石雄一だね。汚い策を使わせたら右に出る者はいない」

「ああ。人の事情を蹴り倒して弄ぶ最低な人種だ。お前の無念も分かるぞ。それよりも、流石に朝から連續でテストだと疲れる……」

「うむ。疲れたのう」

「…………（「ククク）」

いつの間にか近くに来ていた秀吉とマッシュロー――

休憩を挟んでも朝から昼休みまでテストだったので疲弊しているのは明久や将軍だけではなかった

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな」

ただ一人を除いては

「どういう構造してるんだろ？雄一の身体は」

「内臓だけじゃなく筋肉を売つても高値が付くな。まあいい、とりあえず昼飯だ」

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを

「ちよつと待て」

学食に行こうとした明久を呼び止める将軍

そして懐から絶対に制服の中には入らないくらい巨大な重箱を取り出した

「それって、もしかしてお弁当?」

「その通り。昨日言つたろ?姫路の話を聞いて俺も作つてくれるって

「は、はいっ。頑張つて作つてきました。迷惑じゃなかつたらどう

「ぞつ

瑞希が身体の後ろに隠していたバッグを出してきた

それを聞いて既に断る筈もなく頂く事にした

教室で食つのは勿体ないので屋上へ移動

尚、雄一と美波は飲み物を買いに行っている

瑞希はビニールシートを広げ重箱飲み物を蓋を取る

「…おおつ…」

明久達は一斉に歓声を上げた

重箱の中には定番のオカズがギッシリ詰まっている

「それじゃ、雄一には悪いけど先に」

「いただきつ

גַּם־בְּמִזְרָחָה

「あつ、するいぞ將軍、ムツツリーーー！」

将军は唐揚げ、ムツツリーはエビフライを摘まんで口に運ぶ

「ははっ。ソリコウのは早い者勝ぶがああああっ！？」

バタン！ × 2

ガタガタガタガタ × 2

突然2人が倒れて少刻みに震えだした

「わわつ、土屋君！？将軍君！？」

じぱりくじてムツツリーーが起き上がり瑞希に向けて親指を立てる

凄く美味しいぞと伝えたいんだろう

「あ、お口に含いましたか？良かつたですっ」

喜ぶ瑞希だがムツツリーの足に気付いていない

彼の足はガクガク震えている

「や、やめろ……ーその赤いのを近付けるなあ……ー」

その隣では白田を向いたまま何かを叫ぶ将軍が

ダメージはじつの方が深刻らしい

「しょ、将軍。ほり起きなよ。食べて直ぐに寝るのは体に悪いよっ。」

瑞希の弁当の破壊力を田の当たりにした明久はダラダラと汗を垂らしながら将軍を起こうとする

「あ、父さんの作った薬だ。懐かしいな……よく爆発したっけ……」

「君はいつたい何の夢を見てるんだいー?」

本気でヤバいと察した明久と秀吉は将軍に心臓マッシュージを施す

交代で行つてこや、3巡目でようやく田舎を覚ました

「ひー? 何だ今のは……? (姫路の弁当、ヤバすぎただろー?)」

「田が覚めた? 将軍(僕だつて驚いてるよーまさか姫路さんにはこんな欠点があつたなんて)」

将軍と明久は瑞希に分からぬつアイコンタクトで話し合つ

そこへ飲み物を買つてきた雄一が卵焼きを素手で掴み

パクつ

バタン！ガシャガシャン！

ガタガタガタガタ

缶をぶちまけて倒れた

「さ、坂本！？ちょっとどうしたの！？」

先程の將軍、ムツツリー＝同様激しく震える雄＝

すると目で訴えてきた

『毒を盛つたな……！？』

『毒じやないよ、姫路さんの実力だよ』

明久も目で返事をする

便利な技だ

その後、美波には「そこ、さつきまで虫の死骸があつたよ」と言って退場してもらい、瑞希に悟られないよう必死で作戦会議

『明久！今度はお前が逝け！』

『無理だよー僕だつたらきっと死んじゃうーしかも今何か字が違つてた！』

『そこまで言つならテメエが逝けよ雄一。姫路の好意を無下にする

『氣か？』

『いや、姫路は明久に食べて貰いたくて弁当を作ったのじゃと思つ  
のじやが』

『へ、どうこつ事だ秀吉？それじゃあまるで姫路が明久の事が好きみ  
たいじやねえか』

『みたいではなくその物じや。昨日明久に話しかけられただけで動  
搖しておつたり、弁当を作つてくると言つたから容易に理解出来る  
筈なのじやが？』

『寝てたから知らねー……』

明久の言葉を鵜呑みにしたのがバカみたいと思い、瑞希の意中の相  
手を改めて理解した

だが今は

「あー姫路、アレは何だ！？（明久、雄一を押せんでるー）」

「えつ？何ですか？」

瑞希が明後田の方向を見ている隙に明久が雄一を羽交い締めにして、將軍が弁当（と言ひ乍の殺戮兵器）をスケープゴートの口に押し込む

「わいああつー！」

『へーイ雄一ー』飯はよく噛みまじょつネーつー。

将軍は雄一の顎を掴んで無理矢理噛み碎かせる

「ふう。これでよし」

「やつたね将軍」

「……お主ら、存外鬼畜じやな」

秀吉の言葉と更に激しく震える雄一を無視する観察処分者達

華やかな筈のランチタイムは坂本雄一潰しの時間になってしまった

## ジャンケンのチヨキは結構痛い

「もつ。あんた達が全部食べるからお腹空いたじゃない」

「いやあ、それはすまなかつたな（食わねえ方が正解だつづの…）」

瑞希の弁当は雄一を、そして後に出来れた『ザート』は秀吉を瀕死に追いやり、ひとまず平穏な時間が訪れた

未だに2人の身体が震えている事を除けば

「まあ気を取り直して、今度は俺のを」「賞味あれ」

将軍の懐から巨大な重箱登場

「本当にどうやって出し入れしてるんだ？？」

「うむ。 もはや手品の域を越えておる」

「…………ラえもん」

「誰が ラえもんだ！」

「じゅあル ンニ世？」

「ふわけた事書つてると弁当食わねえぞコハヤロー」

包みを取り、蓋を開けて三段重ねになっている重箱を分けていく

その中身は瑞希の弁当と酷似していた

唯一違つのは三段目のお「きりがあるへりいだ

「……何故だらう。寒氣を感じるよ」

「心配すんな。味は保障する」

そう言つて恐る恐るオカズを口に運ぶ明久

「ウマ—————イツ！」

そして歓喜の声を上げた

あとに続く様に皆がオカズを食べていく

「何だこの美味さはー!?」

「誠に美味しいぞ……！」

「…………プロレベル」

「ほ、本当に美味しいですっ!」

「嘘……何か自信無くしそう……」

相当美味かつたのか、全員が將軍の料理の腕前に驚愕

特に明久はまともな食物を食べてなかつた故に箸が止まらない

「そんなに美味しい美味しい言われるとは思わなかつた……」

「ちよっと将軍…あんたどうじでいじんなに料理が上手このよー。」

「やつです、教えてくださいー。」

頭を搔く将軍に血相を変えて詰め寄る瑞希と美波

女としての見せ場とも言われる料理で打ち負かされたから焦つているのだから

将軍は一旦2人に離れてもうひとつから説明する事に

「昨日の朝話したから知つての通り、俺の父さんは研究員、母さんはゲームプログラマーだから仕事に付きっきりで家には殆ど帰っこない。一人暮らししてゐ内に身に付いたんだ」

「やつこいや言ってたな

「ちなみにどんなゲーム作つてるの?」

「え、言ひやつて良いのか？多分絶対ビックリする

明久の質問に戸惑いを見せながら返事をする将軍

「もうこれ以上お前に関連する事で驚く物はないだろ」

「何か引っ掛かるような言ひつけたが分かった。言ひよ

将軍はコホンと咳払いしてから母親が開発したゲームを告げる

「せりビックリした

ゲームのタイトルを聞いた明久と雄一は揃つて驚愕

更には秀吉とムツツコニーも田を見開いている

「それ本當ーっ！ オッて、あのトコー？」

「あやかあの有名なゲームを作ったのがお前の母親だつたとはー。」

「う、うむ。ワシでもやつた事があるゲームじゅ

「…………（口ク口ク）」

男性陣（？）は全員知っている様だが女性陣は分からぬ

FQとは「ファンタジーアクエスト」の略称

高グラフィックの画像とアニメーション、オンラインに接続しての協力プレイシステムを使用しており、今世界中で注目を集めているゲーム

その人気から書籍化、アニメ化、グッズ化等もされている

毎月将軍の口座に（ピー）千万もの仕送りが振り込まれるのはこれが主な理由かもしれない

「まあこの話はまたいづれしてやるとして、雄一。今後のプランを聞かせて貰いたいんだが」

「良いだろ？ 次の相手はBクラスだ」

次のターゲットはBクラス

雄一の目標はAクラスなのにBクラスを相手にする理由が分からぬ

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

戦つ前から降伏宣言

AクラスとFクラスでは次元が違うので無理もない

試験召喚戦争ではクラス代表を討ち取らない限り勝利は獲られない

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更つてこと？」

「いいや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄一、さつきと言つてる事が違つじやないか」

「もしかして一騎討ちを仕掛けようつてのか？」

唐突に出た将軍の言葉に雄一はそつだと頷き、作戦の説明を始める

「明久。試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるかしつているな？」

「……えーっと」

「知らないのかよつ。設備のランクを一つ落とされる、だろ?」

明久の代わりに答える将軍

雄一は呆れながらも話を続ける

「つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ。では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「合ってるけど間違ってるー。」

予想外のバカな返答に頭をはたく将軍

「ここまでのバカは見た事無いぞと内心思つた

「相手クラスと設備を入れ替えられるんだろう？」

「ああ。そのシステムを利用して交渉をする」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやつたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろ？それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』と言つた具合にな」

確かにいくらAクラスでも連戦はキツいだろう

しかし、これはBクラスを倒してからじゃないと成立しない

その上、瑞希や将軍の存在はDクラスに勝利した事で既に知られて  
いるから何とかの対策もあるはず

「とにかくBクラスをやるぞ。細かい事はその後に教えてやる。ついで明久が將軍。今日のテストが終わったらBクラスに行つて宣言布告してこい」

「断る。雄一が行けば良いじゃないか」

「その通りだ。お前が行けよ」

当然明久と將軍は猛反発

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか

「ジャンケン? 良いだろう。それなら乗つてやる」

雄一の提案に乗る將軍

ルールは至つて単純

負けた方が宣戦布告に行くべと囁つ物だ

「ただのジャンケンでもつまらなこい、心理戦ありでこいつ」

「分かった。それなら俺はチョキを出さう」

「そうか。それなら俺は  
ブチ殺す」

208

「ちよつ……！何その心理戦！？」

「良いく度胸だ。泣きつ面にしてやる

「将軍！」承しかけた！？

殴り合いで始まるんじゃないかと言つ空気が作られる

「行くぞ、最初はグー（ブスリ！）さやああああああっ！田が、田  
がああああああっ！」

「ジャンケンポンっ。はい俺の勝ち」

パー（雄一が田を押さえている手）

チヨキ（将軍）

最初はグーの合図で雄一の両田を潰して勝利した将軍

田を潰せば自動的に手で押さえてくる

しかも、その手はパー以外では効果がない

将軍の見事な作戦勝ちだ

「テメエ汚ねえぞ！」

「汚い？ナニソレ、何処の国の言葉？」

明久は一瞬、クラス代表の座をいずれ乗っ取られるんじゃないかと思つた

「くそつ！明久、次はテメエとジャンケンだ！」

「絶対嫌だ！」と云つた雄一が負けたんだから潔く逝つてこい！」

「誰が行くかボケ！」

「分かつた、分かつた。俺だけで行くよ。どうせそここの雄二郎は怖くて足がすくんでるだろうから」

「おいコラ誰がビビってるだと?それに人の名前を悪口みたいに言つてんじゃねえ!」

これぞまさしく犬猿の仲と言つ物だ

「新参者の将軍に任せて大丈夫じやうつか?Bクラスの代表は、あの根本らしいぞい」

「根本って、あの根本恭一ー?」

明久の返事をよそに、将軍はDS改造情報端末機を開いて人物検索

「根本恭一」と言つゝ男はとにかく評判が悪い

「カンニングの常連」

「喧嘩に刃物はデフォルト装備」

「球技大会で相手チームに一服盛つた」等、目的の為には手段を選ばないらしい

その情報を見た将軍は端末機をしまい、代わりにチヨーンソー（改造片手タイプ）を取り出した

「ちよつ、将軍！？何でチヨーンソーを取り出してるの！？」

「ハツハツハツハツハツハツハ。今日の午後は血の大雨洪水警報が発令じゃ……まずは根本を（ピー）して（ピー）にした後、こいつで（ピー）になった所を（ピー）」「

自主規制音大活躍

将軍が若干…………いや、かなりヤバい事になった

「「めん将軍!」」

「すまぬ」

「さつさのお返しだ

ペチン!（明久のビンタ）

ペチン!（秀吉のビンタ）

ドスッ!（雄一のボディブロー）

3人の攻撃で正氣に戻った將軍は首を振った後、現状を確認

自分の右手 チョーンソー

左手 いつの間にか書いた遺書（名前…根本恭一）

足元 クロロホルムの瓶（嗅いだ人を眠らせる薬品）

正氣に戻った將軍はすぐに上記の物を懐にしまった

「危なかつた。明久と秀吉が正氣にしてくれなかつたら、根本を（  
ピー）してたわ……」

「おいテメエ俺は無視か」

將軍は雄一にだけナイフを（投擲して）プレゼントしておぐ

「心配すんな。俺に攻撃してこよつなら返り討ひに殺氣！」

？」

背後の殺氣を気取った将軍は折り畳み式トンファードで飛んできた物を叩き落とす

叩き落としたのは分度器やコンパス等の文具（殺傷能力あり）

「誰だこんなもん投げやがったのは？」

ドバン！と豪快にドアが開かれる

「このブタ野郎！ブタの分際でお姉様とお皿を共にするなど、美春が即殺します！」

現れたのはオレンジ色の髪をし、両側を縦ロールに括った女子

将軍はナニアレ?的な目で明久に訴える

「将軍。君の情報端末機で調べて」

「説明を放棄されるとま。えーっと何々……」

名前……清水美春

所属……Dクラス

性格……島田美波が大好き、男が大嫌い

以上の情報を見て端末機を閉じる将軍

「お姉様！そんなにお腹が空いてるなら美春を食べてください。」

「何でよーー？」

「島田。その変態倒して良いか？」

「出来れば！」

将軍の言葉に美波は即了承

「な、何を言つてるんですかお姉様！？美春はお姉様の事が「うらめしや～……（ガシッ、ムニユッ）」つて離しなさい！ブタ臭いです！しかもどこを触つてるんですか！？」

将軍は素早い動きで美春の背後に回つて（胸に当たつてゐるけど）ガツチリ抱え込み

「くたばれっ！」

綺麗なスープレックスを決めた

「く…………そ…………っ」

地面に叩きつけられ、美春の意識がブラックアウト

将軍は「本当に変な奴らばっかりいるな……」と実感した

「いたたた……今日は散々な目に遭いました。まあでも彼には一応感謝しますからよしとしてあげましょう」

その日の放課後、将軍のスーパークリックスを受けた美春が頭を擦りながら人気の無い場所に向かう

「如何ですか？一枚二百円でお売りしますが」

「「「「買います！」」」

一斉に紙の様な商品を買つ女子一同

その正体は

今朝の将軍の姿が写っている『真』だった

ジャンケンのチョキは結構痛いっ（後書き）

将軍の暴走劇がヤバかったかな…………？次回からはBクラス戦です！

## 放課後の暗躍

問 ( ) の中にに入る語句を答へなさい。

夏田漱石の作品

? 「我輩は( )である」

? 「( ) ひぢやん」

姫路瑞希の答え

? 「我輩は(猫)である」

? 「(坊) ひぢやん」

教師のコメント

正解です。この二つは夏田漱石の代表作とも言える作品です。姫路

そんには簡単過りましたか

土屋康太の答え

? 「我輩は（我輩）である」

教師のコメント

まあ確かにそうですが

吉井明久の答え

? 「我輩は（最強）である」

教師のコメント

君の答えはあらゆる意味で最強です

將軍の答え

? 「（よ）つかやん」

教師のコメント

先生もあの駄菓子は好きです

テスト漬けの授業が終わった放課後

將軍はBクラス戦に向けて単独で校内の視察をしていた

情報端末機に記録したデータを見ただけでは些か不安だと思い、細心の注意を払つての行動である

「なるべく早く終わらせないとな。確かに正門が完全に閉鎖されるのは午後6時ジャスト。それまでに引き上げず鉄人に見つかったらヤバい事になる……」

下校時刻を過ぎても残っているのは殆どが部活関連の生徒か補習を受けている生徒

関係の無い生徒が校舎に残つていると見回りをしている鉄人に見つかってしまう

更に捕まれば「チキチキ 朝まで鉄人とマンツーマン補習（と言つ名の拷問）」が発生してしまつので大半の生徒が恐れていた

「”虎穴に入らずんば虎児を得ず”。リスクを冒してこそ対価となる情報が手に入るかもしれない」

この時の将軍は今まで一番力ツコい」と思つ

しばりく歩き回つてゐる、明日の敵であるBクラスから話し声が聞こえてくる

「……で、Fクラスに勝てるのか？あのクラスには姫路瑞希や転校生がいるんだぞ」

「何の問題もない。作戦通りにやればこつちの勝利は確実だ」

将軍は気付かれないよつに教室の中の様子を伺う

「根本？もう一人の方もBクラスか」

何か有力な情報が手に入るかもしないと思い、携帯電話（改造版）を取り出す将軍

そして内蔵されている録音機能を作動させた

「作戦つて何だ？」

「まず10人くらいで廊下の様子見させる。その間に協定を結びたい」と言って坂本を含めた教室に残っている奴らをここに呼び出す。午後4時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し、その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止すると言った感じでな」

「（ほう。端末機には卑怯者と載っていたのに対等な条件の協定を申し出よひとは、随分と優しいな）」

「無論協定なんて嘘だがな

」（……前言撤回。奴は名前の通り根本から腐っている）

將軍は顔をしかめながら話の続きを聞く

「嘘なら何の為にそんな話を持ちかけるんだ？」

「奴らの教室が空になつてゐる間に、机やシャーペンと言つた勉強道具を壊す為だ

その言葉が耳に入った瞬間、將軍の手は拳を固めていた

「い、良いのかそんな事して……？卓袱台とはいえ学園の設備だぞ……？」

「構わねえ。寧ろ奴らFクラスには勿体無さ過ぎる設備だ！あんなクズ共に机なんて物は必要無いんだよ！」

将軍の怒りメーターが50%を越えた

「その後はそうだな……Fクラスの島田を人質に取つて牽制するんだ。数少ない女子を盾にすれば必ず攻められない」

怒りメーターが80%に到達

「だ、だが姫路瑞希や転校生はどうするんだ?」Dクラス代表を討ち取ったのは姫路、転校生は前線部隊をあつという間に殲滅した。敵を減らしても、この2人が揃つてしまつたら勝ち目なんて無い」

Bクラス生徒の正論に將軍の怒りメーターが45%に減少

だが心の中では名前くらいこ覚えといてくれと言つ切ない要望があった

「姫路に対しては問題ない。こいつを使つ

そつ言つて根本は封筒の様な物を取り出した

「？それは何なんだ？」

「姫路が昨日下駄箱に落としていた物だ。何なのかなは知らないが、よほど大事な物ではある」

「確かに、綺麗に糊付けされてる辺り……誰かへのラブレターとも言えそうだ」

「（誰かへのラブレターだと？姫路が誰かに……まさか！）」

将軍はこれまでの事を振り返り結論を導き出す

明久が叩撃した瑞希との手紙

秀吉から聞いた「姫路は明久の事が好きかもしない」と言つ事實

將軍は断定した……あれは姫路が書いた明久へのラブレターだと

「今どきラブレターとはなかなか可愛いじゃないか。今ここで読んでやつても良いが、こいつをチラつかせて姫路を無力化させる。もしそれでも試召戦争に参加してこよなら、封を開けて大声で読んでやりやあ良い」

下品な笑い声を背にして静かに立ち去る将軍

その顔は鬼神の如く

怒りメーターは臨界点を突破していた

「…………面白い事を企んでくれてるじゃねえか。根本恭一イ」

将軍から黒いオーラがにじみ出て床をとまよい、窓ガラスに亀裂が入っていく

「根本恭一ー貴様は完膚無きまでに叩き潰してやるー」

ヒビ割れゆく窓ガラスを気にする事もなく、将軍はある人物に電話をかけ、ある場所へと向かった

やつて来たのは全生徒が恐れる唯一無二の場所

「鉄人の根城」

「悪夢の拷問部屋」

「坂本雄一と吉井明久がいなかつたらここの来なさい」と言われて  
いる生活指導室

将軍は冷たい鉄のドアを開ける

「ん? どうした将軍。下校時刻はとつべに過ぎてるわ。補習を受け  
たいのか?」

「西村先生、実は折り入つてお願ひがあります」

「何だ」

「もう少しお待ちください。すぐに協力者が来てくれますから……」

将軍は怒りを隠しながら笑みを浮かべる

そこへ将軍が電話で呼び出した協力者がやつて來た

「（ガチャッ）どうしたの将軍？大事な用事…………オランウータン？」

「誰がオランウータンだ」

死亡発言をしてしまった明久は鉄人に頭蓋骨を締め上げられている

將軍が言つた協力者は明久の事であり、今後を考えて互いに携帯の番号を交換していたのだ

「西村先生、今はとりあえずOHANASHIをさせてください」

明久が解放されると同時に、先程の会話を録音した自身の携帯を取り出す

「將軍。校内に携帯を持ち込むのは校則違反だぞ」

「没収はこいつを聞いてからにしてください」

録音機能再生中

「「.....つー?ー?ー?ー?」」

オマケで再生中

「「.....つー?ー?ー?ー?」」

何がなんでも再生中

「…………（パキポキ）」

「…………（シャーツ、シャーツ）」

先程の会話を聞いた2人が取つてゐる行動

鉄人 指の関節を鳴らしながら補習について呟いている

明久 将軍が貸した日本刀を研いでいる

…………と言つた様に完全に根本を殺す

いや、倒す勢いである

「将軍。君はいろんな意味で頼りになる男だよ

「サンキュー明久。それと先生」

「いや、正直あいつの行動には目に余る物があった。こうなれば補習どころか、俺直々の肉体的補習を施す必要があるみたいだな」

「肉体的補習って……それは名前からして封印した方が良いと思う

……」

鉄人の肉体的補習

聞くだけで全身が震え上がりそうだ……

「それで将軍。頼みつて？」

「明久。これから俺が言つ事、そして明日俺達だけで実行する事は間違いなく無謀だ。普通に話せば誰もがこの意見に反対する……そして負ければBクラスだけでなく、Fクラス全員を敵に回し兼ねない計画だ。この多大なリスクを背負つ覚悟はあるか？」

将軍が真剣な表情で言い放つ

誰もが反対する無謀な計画

もし負けたらクラスの皆から恨みを買つてしまつ……

こんな話を聞いては普通なら協力なんて断固拒否する

だが明久の目に一切の迷いは無かつた

「…………やつてやうりうじやないか。その計画とリスク、僕も乗るよ」

「フツ、礼を言ひせ」

ガツチリと握手し合つ二人

そして計画の一歩始終を耳打ち

「…………本当にやる気なの？」

「さつを言つたら、それ相応のリスクを負いつて。逃げるなら今  
の内だ……お前がお前自身を許せるならな」

「許せる訳無いよ。後から後悔なんてのは無しだよー。」

「当たり前だー」と言つ訳で西村先生。是非ご協力お願いします」

「ふむ、大した覚悟だ。良からう。特例だが許可してやる」

鉄のドアが重く閉ざされ、将軍と明久は計画の第一段階を夜遅くまで実行した

## 放課後の暗躍（後書き）

卑怯者根本の計画を知った將軍の秘策とは何なのか…？次回にじっくりお見せします！

無謀な賭けに乗る勇気はあるか？

問 以下の問いに答えなさい

「女性は（ ）を迎える事で第一次性徵期になり、特有の体つきになり始める」

姫路瑞希の答え

「初潮」

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

「明日」

## 教師のコメント

随分と急な話ですね。

## 土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経と言つ。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十一歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

## 教師のコメント

詳し過ぎです。

## 將軍の答え

「明後日」

## 教師のコメント

吉井君と一日違いで急ですね。

「さて皆、総合科目「テスト」」苦労だった

午前中のテストを終えたFクラス

教壇に立つた雄一は皆の方を向いている

「午後はBクラスとの試合戦争に入る予定だが、殺る気は充分か？」

「おおーっ！」

一向に下がらないこのモチベーションはFクラスの武器と言つても過言ではない

將軍と明久も眠いのを我慢して殺る氣を出す

「明久、ここまで来て今更逃げるなよ?」

「將軍こそ、言い出しつぺなんだからしつかり頼むよ」

一応周りに聞こえないよう最終確認を取る2人

昼休み終了のベルがBクラス戦開始の合図となつた

「よし、行つてこい！目指すはシステムデスクだ！」

「サー、イエッサー！」

Fクラスの大半がほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面からゅうりくとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる

数は約10人

「生かして帰す「その戦争待つた！…」……つ！？」

Bクラス生徒よりもデカイ声が廊下を支配し、その場にいる者全員の動きを止めた

「て、鉄人！？」

「何で鉄人が割り込んで来たんだ！？」

明久と将軍以外の人間は状況が理解出来てない

まだ誰も戦死などしていないのに「補習の鬼」鉄人が唐突に出現し、戦争をストップさせたからだ

「何か御用ですか西村先生？」

「高橋先生。この戦争は一時中断をせてもらっています」

「　　はつ？」

鉄人の言葉で更に混乱する生徒達

「詳しい事は体育館に移動してから話す。両クラス早急に集合する  
ように」

体育館に到着した両クラスと鉄人

両クラスの生徒はまだざわつきが治まらない

「いったい何なんですか西村先生？こんな場所に移動だなんて」

「根本。試召戦争に勝つ為とはいえ、少しばかり悪戯が過ぎたようだな」

鉄人の言葉に一瞬動搖する根本

将軍と明久はうんうんと頷き、その他の生徒は訳が分からぬ状態に

「な、何の事ですか？」

「まずはお前達にこれを聞いてもらひつか」

取り出したのは昨日没収した将軍の携帯電話

そう、これには録音機能が搭載されてる

その一部始終が再生された

「これでもまだ言い訳出来るか？」

根本の顔から汗が垂れ、反感の声が飛び交う（特にFクラスから）

「根本！貴様なんて卑怯な！」

「卓袱台すり必要ねえだとー？ふざけやがってー！」

「しかも姫路さんの手紙を奪いつとは許しがたき畜行ー一万死に値する

！」

Fクラスから罵倒、Bクラスから侮蔑の視線

今の根本はまさに四面楚歌

「根本。本来ならお前に1ヶ月の停学を宣告した後、俺直々の肉体的補習を施してやるところだが……」

「肉体的補習」の言葉に全員が震え上がる

「チャンスをくれてやる。将軍」

「はい」

呼ばれた將軍が一步前に出る

「根本恭一。これからここで試合戦争を行うが、団体戦じゃなく一

騎討ちで勝負しても、ひつぜん

「一騎討ち……だと？」

「実は」の会話は俺が録音してた代物だ。キッカケは偶然だったがな

再びざわつき始めるクラス一同

「テメエの策が暴露されたんだ。不正行為で不戦敗にされるよりは一騎討ちで正々堂々とケリを着けた方が良いだろ?」

確かにこんな会話を聞かれたら代表としての発言力は底無

一騎討ちで勝てば実力は証明され、誰も文句を言わなくなるだろ？

「……勝負の方法は？」

「三回勝負で試合形式はタッグマッチ。試合毎に科目を変更しての勝負だ。ただし、こつちは俺と明久だけで試合をする」

つまりBクラスの参加人数は6人

それに対しFクラス側は将軍と明久のみ

3試合をぶつ続けて行う事になる

「うつと待て

そこへ雄一が怒りを孕んだ顔で抗議してきた

無理もあるまい

「何が不満でも？」

「一つだけ言っておく。負けたらクラス全員で明久共タブチ殺すぞ

「その言葉……この無謀な賭けに乗ると解釈しても良いんだな？」

「待つて将軍！殴られるのは覚悟してたけど、殺されるなら下りる  
べっぴー。」

逃げようとした明久の頸動脈を絞める将軍

覚悟したからには共に地獄へ行くしかない

「さあ、祭りの時間だ」

「…………（ピクピク）」

無謀な賭けに乗る勇気はあるか？（後書き）

Bクラス6人 vs 将軍&明久の変則タッグマッチ

次の話で将軍の腕輪の能力を出す予定です

根本恭一「ならぬ生け贋恭一」…？（前書き）

アクセス数が一万に近付いてきました。純粧に嬉しいです。感想や  
ご意見などありましたらどうぞお書きください。

## 根本恭一「ならぬ生け贋恭一」！？

問 以下の問いに答えなさい

「人が生きていぐ上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい」

姫路瑞希の答え

「?脂質 ?炭水化物 ?タンパク質 ?ビタミン ?ミネラル」

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね

吉井明久の答え

「?砂糖 ?塩 ?水道水 ?雨水 ?湧き水」

教師のコメント

それで生きていけるのは瓶だけです

### 将軍の答え

「？人間は　？砂糖だけで　？最低　？五日間は　？生き延びれる」

### 教師のコメント

そうですか

### 土屋康太の答え

「初潮年齢が十歳未満の時は早発月経と言う。また、十五歳になつても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になつても初潮がない時を原発性無月経と言つ……」

### 教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました

将軍の提案で成立したFクラス vs Bクラスの一騎討ち

将軍は卑怯者根本をどの様に殺そ  
と額に指を当てながら考えていた

もとい罰を下さよづか

「卑怯者には相応の罰が必要だ。爪に針を刺して蟻を垂らすか…？  
水責め、火責め、牛裂き刑…………はたまた歯を麻酔無しで引っこ抜  
いてやるつか……」

将軍の頭の中には幾多の処刑術が走り回っている

そこへ卑怯者こと根本恭一が声をかける

「おい、將軍つて言つたか？お前ら2人だけで挑もつなんてやつぱりFクラスはバカ揃いなんだな」

「ひるむことを獲も根本恭一。それは俺達に勝つてから言つひ詞だ」

「待てー・じやく紛れに俺を獲物つて言おうとしたなかつたかー！？」

「そんな失礼な事する訳無いだろ。一組田は誰が出るんだ獲物恭一？」

「今はつきり獲物つて聞こえたぞー！」

「空耳だ。仮にそう聞こえたとしても、お前には獲物の価値しかな

い

「待つてよ将軍。それは間違つてゐる」

「どうした明久？」

「彼は獲物じやなくて生け贋だよー。」

「もひと酷くなつてゐるがーー？」

「…………さうだな。奴は俺達Fクラスの生け贋になるから獲物じやなかつた」

「感心するなー！」

「ああ、覚悟しとけよ生け贋恭一」

ギヤーギヤー喚く生け贋を無視して試合を始める将軍

一試合田の科目は数学

Bクラスからは2人の女子のペアが出てきた

「最初はアンタ達か。宜しくな」

軽く挨拶する将軍だが、何故か相手側の2人は顔を赤くしてモジモジしている

「へ、どうした？ 具合でも悪いのか？」

「私だつて同じよ律子！ 次はいつ会えるか分からんんだから今しか無いわ！」

何か只ならぬ様子のBクラス先鋒

將軍と明久は首を傾げる

「あの…私、Bクラスの岩下律子って言います」

「菊入真由美です」

「あハ、これはどういひまじー御ー事。将軍ですか」

「えつと、一つだけ質問しても良いでしょうか?」

「なるべく手短なら」

将軍は何故か背中に刺さる視線と隣から感じれる殺氣が気になつた

「て、手紙は読んでくれましたか?」

「え? 手紙? ..... つ?」

将軍は手紙と共にコードから過去の出来事を探索

「もしかして……俺の靴箱に入つてたアレ？」

「せうですー真由美も一緒に書きましたー！」

この瞬間、隣から殺氣が凶器と共に伝わってくるのを予感した将軍  
は懐に手を伸ばす

「やつぱり君は裏切り者か死ねええええつー！」

ち込んだ

明久の繰り出すカッターナイフをかわして首に針を打

「…………（ピクピク）」

「ふう。予感が当たつたか」

「将軍……お前明久に何をした？」

「氣絶するツボに針を刺した。針を抜かない限り明久は起きない」

将军の背中に殺氣の視線を浴びせていた連中は今を見て恐怖を感じ踏み留まつた

「すまない。諸事情によりこの試合は俺だけで相手させてくれないか？」

「「あ、はい」」

氣絶した明久を放置、3人が召喚獣を展開して試合が始まる

岩下律子の召喚獣は中国服に巨大なハンマー（OVA参照）

菊入真由美は良質の鎧に金属棒と言った装備（こちらもOVA参照）

Bクラス 岩下律子&amp;菊入真由美

数学 189点&amp;151点

「流石はBクラス、まさに桁違いの強さだ。だが……俺も負けちゃ  
いないぜ」

Fクラス 将軍&amp;吉井明久

数学 389点&amp;UNKNOWN

「「「なにいつー？」」「

将軍の点数にBクラス生徒は驚愕

将軍は得意気な顔で根本を睨む

「悪いがこれも勝負なんだな。斬りせてもらひせ」

将軍の召喚獣が剣の切つ先を相手に向ける

「いくわよ律子！」

「オッケー真由美！」

互いの名前を呼び合ひ、将軍の召喚獣を挟み込む様に動く敵召喚獣

「ほう、挟み撃ちか。無難な戦法だな。なら俺は真っ向から迎え撃つてやる」

将軍の召喚獣は背中の銃剣に持ち変えて両サイドの召喚獣に発砲

牽制程度の攻撃なので相手は大したダメージにはならず

「やあっー。」

岩下の召喚獣がハンマーを振り下ろしていく

將軍は一步横に動かして避けさせる

「えいっー。」

今度は菊入の召喚獣が突っ込んできたので將軍はジャンプをせる

先程かわしたハンマーの上に綺麗に着地した將軍の分身

「そんな！攻撃が当たらない！？」

「召喚獣の操作は前回の試召戦争で慣れたんだ」

2人は次々と攻撃を繰り出すが、將軍は難なく回避

「さあて、そろそろいくか！」

ノコギリ刃の剣を握り締め、まずは菊入の召喚獣を一閃

その直後に銃剣で片足を撃つて動きを止め、岩下の召喚獣を一刀両断

一試合目は將軍の圧倒的な力で快勝に治めた

根本恭一ならぬ生け贋恭一！？（後書き）

次回は将軍の腕輪の能力を出す予定です

## 続Bクラス戦（前書き）

アクセス数が一万を越えました！これからも応援お願いします！

## 続Bクラス戦

「い、皆アトヒ菊入があつとこいつ間にやられたー…？」

「將軍、噂以上に危険な奴だぞ…」

Bクラスに焦りの表情が浮かび上がる

將軍はFクラス全員に向かつてサインを見せる

「ううひ、負けちやつた……

「ビ、ビービしたんだ？そんなに負けた事が悔しいのか？」

涙目の人を見てオロオロする将軍

岩下と菊入は將軍の方を向いた

「ここの際ダメ元でも良い……將軍さん…」

「なつ、何ですか？」

「本当は私達が勝つたら言おうと思つてたんですが、今ここで言います！噂を聞いて見かけた時に一目惚れしました！私と付き合つてくれませんか！？」

「え？！」

「律子！抜け駆けはダメって言ったじゃないー私だって将軍さんとお付き合いしたいのにー！」

なんと試合戦争の最中に告白されてしまったー！

いきなりの事態に将軍はパニクつてしまつ

「ちよちよちよちよつと待つたー俺とアンタ達は初対面だぞー！？二  
うこつ事は互いによく知り合つてからー！？」

将軍の危険察知センサーがフル活動

背後には覆面集団が金属バットや木刀を構えていた

「おのれ将軍！ 我らの希望の星でありながら二人もの女子に告白されると…皆これを許せるか…？」

「…………」

「何だ…？ 何なんだ…？ いつらは…？ 今までに感じた事のない邪悪なオーラを出してやがる…」

理不尽な怒りが頂点に達した時、彼らはFFクラスの生徒から異端審問会FFF団となつて異端者（主に女子と親しい奴）を処刑する

「諸君。」 何處だ?」

「「「最期の審判を下す法廷だ!」」

「異端者」 は?

「「「死の鉄槌を!」」

「男とは?」

「「「愛を捨て、哀て生めるもの!」」

「宣じて。」 これより2・下異端審問会を開催する。」

「話を聞く気はないが無か……やむを得ん!」

凶器を振りかざしながら襲撃してくるFFF団

將軍は懐から高圧洗浄機みたいな機械を取り出しスイッチを入れる

ブシャアアアアアアアツ！

「ふはっ！何だこの煙は！？」

「ギャアーッ！田が、田が痛いーっ！

「ぬがああつ！鼻が焼けるうううううー！」

将軍が噴霧したのは刺激物（唐辛子等）を配合した特製の催涙ガス

浴びた者は目・鼻・喉に激痛が走り、頭痛や吐き気などの症状を引き起します

多量に吸い込めば呼吸困難になつてしまふ程危険なガスを、將軍は容赦なくFFF団全員の顔面に直射し続けた

「……………」（ビクンビクン）「」

將軍を殺そうとしたFFF団は激しい痙攣を起こしながら白田を向く羽田に

「あー、もう良いか？」

「あ、すみません西村先生。次の試合をお願いします」

この後催涙ガスは鉄人に没収されるかもしれないが、気にせず試合を続けていく

次の勝負科目は英語だ

「よし、そろそろ起こすか」

将軍は気絶している明久の首に刺さっている針を抜く

抜いた直後に明久は目を覚ました

「つ？あれ、将軍？何で僕倒れてるの？」

「寝てたの間違いだろ。早く次の試合の準備をしてくれ」

「ひやー！一時的に記憶も混乱しているみたいだ

将軍は気にする事なく、明久はモヤモヤしながらも召喚獣を展開

英語 415点&amp;158点

VS

Bクラス 野中長男&amp;・藤信一

英語 164点&amp;158点

「おっ?これが噂に聞く腕輪か。なかなかカッコいいな」

「そういえば一定以上の点数を取つた人の召喚獣は腕輪を装備して出てくるんだつけ。僕には全く縁の無い話だったからすっかり忘れてたよ」

一定以上の点数とは400点以上

そう簡単に取れる点数では無いので味方なら頼もしい存在となるが、敵ならば厄介な脅威となる

「じゃあ早速使ってみるか

将軍の召喚獣の腕輪が光を発し、直後に全身から無数の刺が隆起した

「…………」

その場にいた全員が何コレ?を具現化した表情になつた

「もしかして、これで終わり？」

「人からハリネズミに退化したみたいな感じで何か拍子抜けしちま  
う んっ？」

召喚獣がブルブル震え始める

將軍が何も無いのかと欠伸をした瞬間

ボシュウンッ！（刺が一斉に飛び散る）

ズドドドドドッ！（刺が敵召喚獣にクリティカルヒット）

2体の敵召喚獣は飛び道具と化した刺をまとめて消滅した

欠伸途中の將軍や明久、生徒だけでなく鉄人も今の光景に開いた口  
が塞がらなかつた

「す、スゲー……」

「なんて言つが……これ一歩間違えたら大変な事になっちゃうよ  
ね……？」

これをくらつた時のフィードバックは計り知れない激痛だろ？と言  
う事に寒気が止まらない明久でした

「俺達、何も出来ずにやられた…………」

「俺達の方が生け贋みたいな気持ちになってしまった…………」

実力を発揮する事なく無惨に負けたBクラス2人の背中には哀愁溢れる空気が漂っていた

## 続Bクラス戦（後書き）

将軍の腕輪の能力は結構悩みました……一応名前は「針千本」と命名します。

根本恭一をブッ殺しちゃえ！？

試験召喚戦争Fクラス v S Bクラス

いよいよ最大のターゲット、根本恭一With男子が前に出てきた

「さて、いよいよ大詰めだな明久」

「うん。生け贋君が出てきたね」

「生け贋を名字みたいに使うな！」

ギャーギャー喚く根本

将軍と明久は軽く受け流す

因みに最後の勝負科目は日本史である

「「サモン！」」と召喚獣を呼び出す根本Witch男子

数珠で繋がれた二丁の鎌を持つ根本の召喚獣とオーソドックスな剣と鎧を装備した召喚獣が現れた

Bクラス 根本恭二&amp;加西真一

日本史 208点&amp;171点

代表だけあってやはり点数は他とは違う

「いくら将軍が高得点を持つていようが、パートナーがクズじゃあ勝つたも同然だな」

「ほう？ 本当にそう思ってるのか？」

根本のムカつく発言に明久の目付きが変わる

瑞希の純粋な気持ちを利用しようとした卑劣な奴をぶちのめすと言わんばかりに

「「サモンー」」

足元の魔法陣から将軍と明久の召喚獣が出てくる

「連續で試合をしてりやあ流石に疲れが出てい。それに吉井の点数はゴミ同然。集中攻撃しちまえばあつという間に將軍は一人になる。結局お前らクズは勝てない

」

Fクラス 將軍&amp;・吉井明久

日本史 354点&amp;・131点

「「「なにいつ！？」」

根本With加西だけでなく雄一達も明久の点数に驚く

振り分け試験時には50～60点程度しか取れていなかつた明久が倍以上の点数を取っている

「えー？ 吉井、アンタ何でこんなに点数が高いのよー？」

「う、うむ。あれはもつクラス並みの点数じゃ」

「おい将軍！ 何でのバカが100点オーバーの点数を取れてんだ！？ カンニングさせたのか！？」

「少しば信用くらいしたらどうなんだ？ 昨日この科目だけを集中的に教え込んだんだよ。付け焼き刃にしては結構取れた方だ」

「嘘だ！ バカでクズで最上級のゴミ虫、死んだところでどうでも良い様な明久が1日でこんな点数を取れる訳ねえだろー！」

「雄一、貴様あとでブツ殺してやるー。」

酷すぎる罵倒が明久に飛び、将軍はもつ放つておいつと根本 witt  
h 加西の方に向き直す

「はつー！マグレで取れたからっていい気になるなよー。」

根本の召喚獣が鎌で斬らんと襲いかかる

明久は横に飛んで回避させ距離を取る

加西の召喚獣も剣で突き刺そうと突進してくるが、銃剣が放つ弾丸に妨害される

「確かに俺は連戦で疲れちゃいるが、明久だけを片付けたら良いつてのは大間違いだ。それに……バカつてのは怒つたら一番怖い物だと言う事を思い知れ」

明久の召喚獣は木刀で動きを止められた加西の召喚獣を殴る

眉間、首、大腿と言った人体のウイーグポイントに攻撃を当て、点数を削り取っていく

「うわあっ！」

「でりやあっ！」

間髪入れない攻撃に加西の召喚獣はてんてこ舞い

將軍がアイコンタクトすると明久は無言で頷き、加西の召喚獣の背中を蹴る

將軍の召喚獣がノコギリ刃の剣を突きだし、敵の顔面を貫いた

「ば、バカな！奴らはFクラスなんだぞ！？クズのくせに何でこん  
な　　」

「何度も何度もクズ、クズって……他の言葉を知らないの？」

「言ひだけ無駄だ。」うこうのは実感させてやんねえと

二丁の銃剣を乱射する将軍の召喚獣に合わせて、明久の召喚獣が飛び出す

二丁の鎌が弾き飛ばされ丸腰になつた生け贅召喚獣（笑）の喉を突く

「仕上げだ明久！」

将軍は自らの武器である剣を明久の召喚獣に投げ渡す

キヤツチさせた明久はすう～と息を吸い込み

「人の気持ちを弄んだ報い、思い知れええええ～！」

憎き生け贅を真つ一つに両断

Fクラス v SBクラスの試験召喚戦争はFクラスの勝利で幕を閉じ

た

根本恭一をブッ殺しちゃえ！？（後書き）

遂に決着がついたBクラス戦。召喚獣にまで生け贅の称号を付けちゃいました（笑）

ペナルティは回答まみれになる物を採用！

問 以下の問いに答えなさい。

「(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、? ? ?  
の中から選びなさい。

- ?  $\sin A + \cos B$
- ?  $\sin A - \cos B$
- ?  $\sin A \cos B$
- ?  $\sin A \cos B + \cos A + \sin B$

姫路瑞希の答え

$$「(1) X = /_6 (2) ?」$$

教師の「メント

そうですね。角度を「。」ではなく「」で書いてありますし、完璧です

土屋康太の答え

「(1) × = めんべい」

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません

將軍の答え

「(1)(2) めんべい」

教師のコメント

だからと言つて解答欄に書かないでください

吉井明久の答え

「(2) めんべい?」

## 教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを付ける生徒は君が初めてです

## Fクラス v s Bクラスの試験召喚戦争

Fクラスの勝利によって終局を迎え、互いが思い思いの反応

「う、嘘だろ……？たった2人に負けた……？」

「Bクラスめ、ざまあみろ！」

「将軍はやつぱり我々の希望の星だ！すぐに胴上げの準備を！」

Fクラスの面々が將軍を（明久はついで）胴上げしようと走っていくが、將軍は手のひらを向けて制止させる

「嬉しい気持ちは分かるが、まずやる事を先に済ませたいんだ。そ  
うだろ雄一？」

「ああ、嬉し恥ずかしの戦後対談だ。な、負け組代表？」

「あいつまで好き勝手ほざいていた根本は不貞腐れる様に座り込んで  
いる

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプ  
レゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

「俺達Fクラスの目標はAクラス。ここは単なる通過点だからBク  
ラスが条件を呑めば設備を見逃すってんだろう？」

その通りだと將軍に言葉を返す雄一

「……条件は何だ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には好き勝手やられそうになつたし、正直去年から田  
障りだつたんだよな」

雄一の言葉は酷い言い方だが根本はそれだけの事をやつてきた

周りにいるBクラスは誰もフォローしようがない

「そこで特別チャンスだ。Aクラスに行って、試験戦争の準備が出来ていると宣言してこい。そうすれば設備は見逃してやっても良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか?」

「ああ。お前がこいつを着て言ひ通りにするならな」

そう言つて将軍は懐から女子の制服を取り出し掲げる

瑞希の手紙は根本が持っているので制服を奪つ必要がある

負け組代表に屈辱を味わわせ、目的の物も取り返す

一石二鳥のペナルティだ

「ば、馬鹿な事を言つたなー」の俺がそんなふざけた事を……」

「Bクラス全員で必ず実行をせよ!」

「任せて!必ずやらせるから!」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないなー」

四面楚歌、現状の根本に味方などいない

「んじゃ、決定だな」

「ぐつーよ、寄るな!「突撃隣の一Bクラス」変態ぐうつ  
ー!」

抵抗しようとした根本に将軍がダッシュの膝蹴りを叩き込む

「とつあえず黙らせたぞ」

「お、おう。手際が良いな。じゃあ着付けに移りうとするか。明久、  
将軍、任せたぞ」

「解つ

「ねいむ

ぐつたりと倒れている根本の制服をひつペがし、パンツ一丁で立  
る明久と将軍

「ハーン……これ、どうするんだるひつへ

「もつ全部頭に被せたら良いくんじやね?」

「私がやってあげるよ」

着付けに手間取つてゐる2人にBクラス女子の一人が名乗り出てくれた

「そう?悪いね。それじゃあ折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐つてゐるから」

酷い言われようだな根本は

「よし。俺も折角だから死上げを」

「つ?剃刀なんか取り出して何するの?..」

「ペナルティは屈辱的な物にしてやりたいんだ。根本の脛毛を全部  
剃り落とす」

将軍は悪い顔をしながら根本の脛毛を剃り始めた

明久は合掌してから根本の制服を漁り、例の物を取り出しポケットに入れる

皆より先にFクラスに戻る明久

そしてそれを見て追い掛ける様に教室へ向かう瑞希

根本の脛毛処理を終えた将軍は後はBクラスに任せ退散

その後、女子の制服を着させられた根本は撮影会までペナルティに入れられ、一生忘れられない素晴らしい思い出（と書いてトラウマ）を負う事になった

とある場所にて

「最下層のFクラスがBクラスに勝利ね。ふうん、なかなか面白い事になつてゐるじゃない。この分だとウチのクラスにも攻め込んで来るわね」

「かもしれない」

「それに、あそこには田の花婿がいるからいつまでも都合が良いわ」

「…………つーか、からかわないでよ刹那！」

「あはははっ！ホントあんたって分かりやすいわね。顔を茹で蛸に

じて

「あ、もうこの刹那だって……」

「あたしへま、違うって言つたら嘘になるけど」

「うへ……」

「何? 何か心配事? 憶むのは今じゃないでしょ。」  
「で、憶んでたら後先も憶んでしまつ。憶む前に動きなことを

「(パンパン)うん。頑張ろ!」

ペナルティは屈辱まみれになる物を採用！（後書き）

終盤で出た2人はオリキャラです。詳しい事は後々に

## 対Aクラス戦の秘策（前書き）

まだ序盤なのにアクセス数が一万五千に達しそうですー…やっぱりバ  
カテスは凄いです……

## 対Aクラス戦の秘策

Bクラス戦が終了し、点数補給のテストも受けたFクラスと  
言つより明久と将軍

戦つたのは2人だけなので然程時間要する事もなかつた

補給テストを終えた翌日、FクラスはAクラス戦に向けて最後のミーティングをしていた

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があつての事だ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。うしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思つ。だが、これは偽うざる俺の気持ちだ」

「ほう。明久を嵌めたり俺に敵意を持つてる人間にしちゃあ意外だな」

将軍は生物的に雄一が嫌いなのでまだ少ししか信用しきれてない

雄一は気にする事なく続ける

「（）まで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないと現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強だけじゃねえんだーっ！」

Fクラスの気持ちが一つとなつた

将軍はその士気\_ADDRESSに圧倒されかけた

「皆ありがとうございます。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を付けたいと考えている」「

教室中にざわめきが広がる

一騎討ちとはクラス間の戦争を代理で行つから代表同士の学力が純粋に勝敗を分ける

Aクラス代表とFクラス代表との学力はまさに雲泥の差だ

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「馬鹿っぽいお前が勝てると思つてんのか？（チツ）」「

明久より先に口が出てしまつた将軍の類をカッターが掠める

犯人は雄一だ

「次は耳だあああああつー？」

將軍発の首を狩ろうとした斧が黒板に刺さる

雄一はギリギリかわしたので被害は髪の毛だけで済んだ

「チツ、避けんなよ

「避けるわボケ！」

凶器に関しては將軍の方が何枚も上手の様だ

「まあ、將軍の言つ通り確かに翔子は強い。またもにやりあえれば勝ち田は無いかもしれない。だが、それはDクラス戦もBクラス戦もおなじだつただろう？俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる

「カッター投げる暇があるならそれで説明しそう」

将軍の指摘に雄一は対Aクラスの秘策を説明し始める

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

「小学生程度の問題だと満点が前題でNISしたら速攻負けになるじやねえか」

「だよね。同点だったらきつと延長戦になつて問題のレベルも上げられちやひし、ブランクのある雄一には厳しくない？」

「おじおこ、あまり俺をナメるなよ。こくらなんでも、そこまで運に頼りきつたやり方を作戦などと言つものか」

「勿体ぶらずにお前の秘策とやらを教えひよ」

「分かつて。俺がこのやり方を提案した理由は一つ。ある問題が出れば、antzは確実に間違えると知っているからだ。その問題は大化の革新」

雄一は誇らしげに言つ

「大化の革新で小学生程度の問題。何年に起きたとか言う事か?」

「ビンゴ。その年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ」

年号を問う問題は基礎中の基礎

こんな簡単な問題を間違える人間は早々いない

『明久。お前は分かるよな?』

『え？ 当たり前じゃないか。僕ですら鳴くよ（794）ウグイス、大化の革新とスラスラ答えるよ』

『残念。大化の革新が起きたのは645年だ……』

明久は将軍の視線から目を逸らした

「あの、坂本君」

「ん？ 何だ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

瑞希の言葉に明久は訝しげに雄一の方を見る

『どうしたんだ明久。まるで怨敵を睨む様な目付きになつてゐるぞ？』

『雄一……姫路さんに好かれているのみならず、才色兼備の霧島さんとまで良い関係なんて事はあるまいな……！？』

『おい、まだ姫路が好きな奴は雄一だと思い込んでるのか！？』

結局あの後誤解は解けていなかつたのだ

何故なら明久は自分に対しての好意には超がつく程の鈍感であるからして

「ああ。アイツとは幼馴染みだ」

「総員狙ええええっ！」

「なつ！？何故明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ男の敵が！Aクラスの前にキサマを殺してやるー！」

「俺がいつたい何をしたと！？」

「いやはや災難だな雄一。モテる男は辛いね～」

生物的に雄一が嫌いな将軍は現状を見て雄一を茶化す

だが、これを見逃す程雄一は甘い人間ではない

「せつ言つなら將軍、テメヒコモ試召戦争中にBクラスの女子2人に告りられてただろ？が！」

「將軍…やつぱり君は僕の敵なのか！」

「…」うちを向くな！あの後丁重に断つたんだよ！断つたけど、まだ諦めませんとか言われてどうしようかと

「君は47人分の靴下をくいつべきだ！」

「それなら貴様らにはこいつを贈呈してやるつ。あの世への片道切符だ」

将軍は懐から自作した銃を明久達に向ける

右腕に付けられしは毎分300発の弾丸を吐き出すガトリングキャノン

左腕に付けられしは高熱の炎を発するガスバーナー

上履き程度で勝てる訳がない

「全員回れ右！狙いを雄二に絞れ！」

危険度を察知した明久及びFクラスの大半は振り返つて上履きを構え直す

「あの、吉井君」

「ん？ なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりや、まあ 美人だし……えつ？何で姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと島田さん、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしてるの！？」

『姫路が明久を好いているって事態が嘘に見えてくらあ…………』

力オスな場面に将軍は顔をしかめながら疑問を浮かべる

考てる本人も充分力オスなんだがそこはスルー

「とにかく、俺と翔子は幼馴染みで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は システムデスクだ！」

自信満々の声

雄一を筆頭にしたFクラス首脳陣は宣戦布告するべくAクラスの教

室へ向かつた

## 対Aクラス戦の秘策（後書き）

次回はいよいよオリキャラの登場です！

## 2人の幼馴染み

問 以下の問いに答えなさい。

「PKOとは何か、説明しなさい。」

姫路瑞希の答え

「Peace-Keeping Operations（平和維持活動）の略。」

国連の勧告のもとに、加盟各國によって行われる平和維持活動の事

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

「Pants Koshibi-tsusuki Oppaiの略。

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事」

教師の「メント

君は世界の平和を何だと思ってるのですか。

將軍の答え

「Pocky Kuisugi Oh my god! の略。

お菓子のポッキーを食べ過ぎて体重が大変な事になってしまった被害者の念」

教師の「メント

某お菓子メーカーの職員全員に謝罪してください。

吉井明久の答え

「パウエル・金本・岡田の略」

教師の「メント

それはセ界の平和を守る人達です。

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

雄二を筆頭に明久、瑞希、美波、秀吉、ムツツリーーと言った首脳陣はAクラスに足を運び、宣戦布告をしていた

将軍は途中でトイレに行ったから後で合流するらしい

「うーん、何が狙いなの?」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

雄一と交渉しているのは秀吉の双子の姉、木下優子

雄一の話に彼女は訝しむ

学年最下位クラスが学年トップに挑む事自体が不自然なので裏があると考えるのが自然

「面倒な試合戦争を手軽に終わらせる事が出来るのはありがたいけどね、だからと言つてわざわざスクスクを

」

「乗つてやれば良いじゃない。その戦争」

木下優子の声を遮る誰かの声

その方角を見ると、ドクロ付きリボンと言つ奇抜なアクセで髪を束ねたツインテールの女子が前に出る

「誰だ？」

「はあ？人に名前を聞きたいなら自分から名乗りなさいよ。マナーつて物を知らないの？」

物凄く高圧的かつ傲慢そうな振る舞いに雄一は一瞬イラつてしまつ

「……坂本雄一だ」

「坂本雄一」……………決めた。あんた今からブサイクね

「だそうだ明久。お前はバカ改めブサイクだと

「セーでどづして僕の名前が出てくるの?」

「あんた耳おかしいの? あたしはあんたに向かつて言つたのよ

「はあっ! ?

いきなりの罵倒に雄一は席を立ち上がつて抗議

「待てやコラ! 僕が明久よりブサイクだと! ?」

「当たり前の事でしょ。」んな落書きみたいな「コラ顔、ブサイク

以外にどう表現したらいいのか?」

「刹那。ブサイクは言い過ぎだと知った」

刹那と呼ばれた女子の後ろから、身長ぐらいの高めはあるおやぢを持つ銀髪の女子が仲裁に入る

「何よ凪。まさかこのブサイクをフォローするの?」

「違ひよ。せめて動物園のボスゴリラにしてあげたらどうかなって

「分かったわ。と言つてあんた、今からブサイクゴリラね

「もつと酷くなつてんじゃねえか!しかも仲裁に入った奴まで俺を罵倒すんのか!」

度重なる罵倒に雄一は腹を立てる

「ゴリラがウホウホつるさいわね。そこにいる吉井明久に比べたら、あんたなんて人間の部類にカテゴライズする必要が無いわ」

今までで一番の罵倒に雄一はもつ冷静ではいられなかつた

しかし、何故明久の名が挙げられたのか？

「君、何処かでお会いしました？」

「なあに丁重な挨拶かましてんのよ。幼馴染みのあたし達を忘れたの？」

「「幼馴染みっ！？」」

刹那の言葉にFクラス首脳陣（特に瑞希と美波）は驚く

明久は首を傾げるが、数秒経つてアッヒ田を見開く

「思い出した……一まさか、刹那……………？」

「正解。やつと思に出した？ パッキー」

「お久しぶりです。モジモジ隊長」

「つい事は、その子はなつぢやん！？」

「またまた正解、気付くのが遅すぎ。パッキー以外の人間に自己紹

介をしつくわね、あたしは織田切刹那。<sup>おだぎりせつな</sup>ヨッシーの幼馴染み、以上

「初めまして、月詠凪<sup>つきよみなぎ</sup>です。隊長とは……その……小学校時代の同級生です」

自己紹介を終えた2人

この後、Aクラスの教室に大嵐が吹き荒れる事になるかもしない

.....

## 2人の幼馴染み（後書き）

遂に出ました！明久の幼馴染み

次回はヤバい事になりそうですが……

交渉?いいえ、交死よつです

「「「エリックの事よ吉井一（ですか吉井君一）」」

真っ先に明久に飛び掛かつた瑞希と美波

その顔、と書つか全身から異常な程殺気が

「えつ？何で2人して殺氣立つてゐるのー？」

「ちょっとそこは2人つるさい。コッサーの幼馴染みだつて言つて  
んでしょう？て書つか何であんた達が必死になる必要がある訳？」

刹那は高圧的な態度で瑞希と美波に話し掛ける

「そもそも、あんた達こそコッサーの何なのよ？」

「な、何つてそれは……吉井はウチのサンドバッグよー。」

「ア」は友達って言つべきなんぢゃないのー。？」

「サンドバッグねえ…………それ本氣で言つてるとしたら、あんた只、のバカよ？だつたらとやかく言つ資格なんて無いぢゃない。でしょ、凪？」

「はい。それに隊長をサンドバッグ扱いするとは無礼の極みです。そんなんあなた達を隊長に近付かせる訳にはいきません。危険なオーラが見えます」

「あなただつて吉井君に近付き過ぎですー！」

「あたし達は幼馴染みだから良いの。大体友達でも何でも無いあんた達には関係無いでしょ？」

刹那の言葉が2人の心に突き刺さる

「いや刹那。2人は一応クラスメイトなんだけど」

「つたぐ。姫路や島田だけでなくあと2人も幼馴染みって、こんなバカの何処が良いんだか」

パコッ！（雄二が明久の頭を叩く）

シユツ、グチャツ！（凪が一瞬で雄二の顔面に力カト落としをくらわす）

いきなりの事態に刹那以外の人間は凍り付いた

「な、なつちゃん……？」

「隊長に危害を加える人は殺します」

その目に偽りが無い事に更に恐怖が増す

「言い忘れてたけど、畠の家は空手道場やつてるし本人は三段だから。あんまりヨッシーに関して調子に乗らない事を忠告しちゃわ」

「か、空手道場つて……」

「躊躇いなく振り下ろしたの?」

「…………チツ。短パンだった」

「ムツツリー!」。『こんな状況でもヒロヒロ反応できる君はホントいろんな意味で凄いよね』

ムツツリーは首を横に振るがもつ氣にする必要もないだろつ

「いやあ、遅れてしまねえ……つて何コレ？俺が来る間に何があつた？」

そこへやつと来た將軍

雄一が血だらけで頭が床にめり込んでいる光景が彼の目に入った

「なるほど。そこのお一人は明久とは小学校時の同級生で、明久は2人がこの学園にいる事を知らなかつたのか」

「う、うん。今初めて知ったんだ」

「いやいや、お前トンでもない女子2人と幼馴染みなんだぞ？織田切剎那は父親が捜査一課の警部、月詠凪は月詠流空手道場師範月詠泰山さんの娘。そんな有名な人達の子供を忘れるとは思えないんだが……」

ちなみに将軍は織田切警部、月詠泰山のファンだつたりする

『警察と空手道場の…………』

『そんな人達が吉井君とお知り合いだなんて……ズルいです』

瑞希と美波は互いの状況の悪さを感じながら話し合っていた

将軍はそれに気付くも、厄介事を増やすのはやめておいたと雄一を放置したまま話を進める

「んで、試合戦争の件なんだが。話はもう終わっちゃったか？」

「まだよ。皿がその交渉人を殺したから」

「いや、死んではいないよ！？血まみれだけど微かにピクピク痙攣しているから一応死んでないよ！？」

「本当にですか隊長？なら今すぐトドメを

「刺すな！話を進めさせてくれ！」

トドメの力カト落としを繰り出さつとした廻を止める将軍

一騎討ちについて話を戻す

「試合形式はわざと雄二が言つた通り、一騎討ちで良いのか？」

「勿論、でも只の一騎討ちじゃつまらないわ。互いに7人を選抜して、七回の内四回勝った方の勝ちって言つのはどう？」

「7人か。代表同士の一騎討ちにしないのは、こっちは姫路もしくは俺が出てくるのを防ぐ為か」

今までの功績を考えてるようではいつ警戒はしている

その辺は流石△クラスと言つたところだ

「分かった。その形式で行こう。ただし、科目の内容は7つの内4つはこっちで決めさせてくれ。それくらいのハンデは良いだろ?」

「別に構わないわ。せめてもの情けね」

試合方式は決定した

開始時刻は10時で場所はこのAクラス教室

Fクラス（バカ）対Aクラス（エリート）の戦いが直に始まる……

『でも大丈夫なのかな？姫路さん』

『何でそこで姫路を心配するんだ？』

『いや、だつて……あの後、霧島さんから「負けた方は何でも一つ言ひ事を聞く」って言われたから』

『それがどうしたんだ？』

『霧島さんは女の子が好きだから、負けたら姫路さんの貞操と人生観が……』

『……………つ？』

## 開戦！Fクラス vs Aクラス（前書き）

アクセスが一萬に達しそうです。ありがとうございます。

## 開戦！Fクラス vs Aクラス

問 以下の問いに答えなさい。

「バルト三國と呼ばれる国名を全て挙げなさい。」

姫路瑞希の答え

「リトアニア ポストニア リトビア」

教師のコメント

その通りです。

土屋康太の答え

「アジア ヨーロッパ 浦安」

## 教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

## 將軍の答え

「ポルトガル テニアン トリニダード・トバゴ」

## 教師のコメント

頭文字を並べてバルト三国と言つ意味ではありません。それにこれではポテトになってしまいます。

## 吉井明久の答え

「香川 徳島 愛媛 高知」

## 教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていない事に違和感を覚えましょう。

決戦時刻の10時

巨大なプラズマディスプレイ、冷暖房完備、冷蔵庫にノートパソコンが個人部屋に一台ずつ

Fクラスの設備と比べても月とすっぽん

しかも担任は美人で才女の高橋女史

とことん羨ましい限りである

「くそつ。まだ顔が痛む」

「最初に見た時はふざけてんのかと思ったが、顔面にカカト落としどはなかなかエグい」

「明久、てめえのせいでの勝手に話を進められたんだ。後で覚えてろ」

「何で僕のせいになるのー?あれば雄一が悪いんじゃないか!」

雄一の勝手な言い分に反論する明久

そもそもカカト落としきらつたのは雄一の自業自得とも言える

「雄一、自分の非を認めずに他人に押し付けるのは卑怯者もしくはガキのやる事だ。クラス代表のくせにガキ臭い事しか出来ねえのか？」

「一人だけトイレに逃げ込んだテメエに言われたくねえな。その将軍つて名前に腰抜けの烙印でも付けてろ」

「ほう……良い度胸じゃねえか。新しく作った青竜刀の餌食になりたいか？」

雄一の発言にムカついた將軍は背中から青竜刀を出して刃先を向ける

その珍妙な光景にAクラスはざわつくが……

『優子。あの人、前にボク達を助けてくれた人だよ?』

『しかも将軍つて……』

将軍を指差す優子と顔を赤くする優子

2人は以前、シーフード軍団（笑）に襲われていたところを将軍に助けられた

その夜、優子は将軍の事が頭から離れなからりしく、彼から渡された上着を着たまま寝てしまつたとか

『どうしよう……！？ まともに顔を見れないー！』

将軍は気付いていないものの、優子は心臓が飛び出すんじやないか  
つてくらい鼓動が早くなる

「では、両名共準備は良いですか？」

「……問題ない」

「あ、大丈夫です」

將軍（青竜刀）と雄一（素手）は殴り合っているので明久が代わりに答える

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシが行くよ」

Aクラスからは木下優子が出てくる

対するFクラスの一人目は

「あ…………あ…………」いつの一人目は島田だ。頑張つてこい」

「任せといて」

Fクラスからは美波が先陣を切る

勝負科目はFクラスの選択権により数学

軍服にサーベルを持つた美波の召喚獣が展開される

「数学だけならウチはBクラス並の成績を持つてるのよ」

「それは凄いわね。サモン！」

Aクラス 木下優子

数学 325点

点数差100点以上

西洋鎧とランスを装備した優子の召喚獣に一撃で倒されてしまった  
美波の召喚獣

「アタシは勿論、Aクラス並だけどね」

負けた美波は落ち込みながら陣営に戻る

「うーん。負けちゃつた……」「

「胸が薄いは関係ないでしょ！？」

「K-1より凄いと言ったこところだが、今すぐやめた方が良いぞ島田。向こうで獣が噛み付こうと躍起になつてゐる……」

Aクラスの方に目をやると、飛び掛かるつとしている銀髪の獣が刹那に押さえられていた

「…………ひー…………ひー。」

「落ち着いて風ー今二じで殺つたら不正行為で負けるー。」

怒り心頭の風の姿にAクラス生徒は怯えを隠せず、美波も自然と関節を極めてる手の力が緩む

「……コホン。では、一回戦を始めます」

気を取り直して一回戦

Aクラスからせみつけまで獣化していた月詠風

「じゃあこいつは須川。お前逝つていい

「俺がか?」

「ああそうだ。俺はこのクラスを信じている。だから

「

「ふつ、仕方無いな。今までも言つたり行つてやつづじやないか

「ありがとう須川。俺はお前が

「

Aクラス 月詠凪

化学 287点

VS

Fクラス 須川亮

「秒殺される事を信じている」

「負ける方に信じていたのか！？」

「悪いな、お前は数合わせの為の捨て駒。勝ちの頭数に数えてないんだ」

改造空手道着と手甲を装備した凧の分身は、将軍の言つた通りザコを秒殺した

「……将軍。人の事言えないんじやないか？」

「明久や俺みたいに操作慣れしておらず、点の低い奴がAクラスに勝てる訳ねえだろ」

バツサリした切り捨て発言に須川は血涙を流す

2連敗してしまったFクラス

次に負けてしまうと後がない

三回戦、Aクラスからはショートボブカットの眼鏡少女 佐藤美穂

科目は物理を指定してきた

「将軍。 じいには僕に任せとよ」

「え、お前物理得意だつたっけ？」

「これ以上負けちゃつたら、もつ後がなくなる。この勝負で僕の本気を見せてあげるよ」

自信満々に言う明久

その言葉を信じて任せせる将軍

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

「あれ、気付いた？」名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない。今まで隠してきたけれど、実は僕

「

明久は大きく息を吸い、ポーズを決めて告げる

「左利きなんだ」

Aクラス 佐藤美穂

物理 389点

V S

Fクラス 吉井明久

物理 62点

左利きの観察処分者は、先程の須川と同じように秒殺された

「明久くーん。君は何考えてんだですかー? 勝負を舐めてるんですか  
」?

「…………すいません(ズキズキ)」

この日、將軍の怒りメーターは200%越えた

## 決着！Aクラス戦

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

「（ ）年 キリスト教伝来」

霧島翔子の答え

「1549年」

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄一の答え

「雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993」

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

ただ今の戦績は3戦0勝3敗

次の勝負で負ければ自動的にAクラスの勝利が決定する

「もうこれ以上勝ちはやれねえ。俺が出る」

「それなら、あたしが相手になつてあげるわ」

次の試合はFクラス将軍 vs Aクラス刹那

2人が前に出る

「教科は現国だ。サモン！」

「良いわ。サモン！」

双方の魔法陣から徐々に姿を見せる召喚獣

刹那の召喚獣はミニスカドレスと軽鎧に大きめで少し変わった形の  
薙刀と言つ装備だった

Fクラス 将軍

現代国語 355点

V S

Aクラス 織田切刹那

「点数差は100点以上か。だが戦争は何が起こるか分からぬ」

「その通り。それに、あたしの武器は普通の武器とは大違ひよ」

「うううと刹那は自分の武器を力チャカチャいじくり始める

「つー武器の形が変わつていくー？」

将軍が驚いている約2秒の間に、薙刀は鎖鎌へと変形した

「びっくりするのはこれからよー」

鎖で繋がれた宝玉が刀に絡み付く

「ぐつー。召喚獣勝負でこんな武器もありなのか……？」

「何が起じるか分からないつて言ったのはあんたで……っしょ！」

刀を奪い取られた将軍は銃剣に持ち替える

刹那は自慢する様に再び武器を変形させる

「大鋏か。 いつたい幾つに変形しやがんだ、 その武器は？」

「最初の薙刀から鎖鎌、 大鋏、 ブーメランに』。 この武器は幾つものパートで構成されてるのよ」

「5つか……パズルみたいな武器だな。あんたパズルの類いが得意なのか？」

「まあね。昔ルービックキューブの大会に出場した事がある程度だけど」

刹那の意外な経験にへえ～っと声が上がる

「お喋りはあんまり好きじゃないから、さつさと終わらせるわよー。」

大鋏の刃を開けて突っ込んでくる刹那の召喚獣に対し、銃剣を乱射させる将軍

刹那は直ぐ様大鋏の刃を閉じ、横にして銃弾を防ぐ

「！」となんじゅ上まへりなこわよー」

「残念。足がガラ空きだ」

将军が上半身を中心に戦っていたので足までには注意が行つてなかつた

一瞬の隙を見て足を撃つて動きを止めさせ、銃剣の刃先で喉を刺し、相手を戦闘不能にした

「はあ……はあ……結構疲れた」

「まだブーメランと凹を見せてないのに……」

「そこまで待つ暇が無いんでね」

将軍の勝利にFクラス陣営はイエーイーと大合唱

だが、まだ油断は出来ない

あと一回負けたら終わりだと云つ事態は変わっていなきからだ

「では、五人目の方どうぞ」

「…………（スック）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

ムツツコーーと歎息が出てくる

「聞けば奴は総合科目の八割を保健体育で獲得してゐんだつたな？」

「うん。 ここの単発勝負なら△クラスにだつて負けないよ」

「教科は何にしますか？」

「…………保健体育」

ムツツリーの唯一にして最強の武器が選択された

「土屋君だつけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？ でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ …… キミとは違つて、実技でね」

愛子の問題発言にFクラス男子は大興奮

将軍はアッヒ驚く様に何かを思い出した

「あーあんた、あの時のー?」

「ヤッホー、あの時はありがとね。良かつたらキリモ保健体育を  
教えてあげよっか? もちろん実技で」

「ちよつと愛子ー?」

将軍にウインクしながら誘惑する愛子と、ザヨシとする優子

将軍の背中にまた殺意を込めた視線が突き刺さる

「　　「将軍コロス將軍コロス將軍コロス將軍コロス將軍コロス將軍コロス」」

「将軍……君は僕の味方の筈だよね……？味方だって言つてよ……？」

「ちよつ、今の明久怖い！完全に目から光が消えてるつて！」

「そつちのキミ、吉井君だつけ？勉強苦手そつだし、保健体育で良かつたらボクが教えてあげよっか？もちろん実技で」

将軍に光なき妬ましい視線を送つていた明久に気付いたのか、愛子が指名してきた

指名された明久は正気に戻る

「フツ。望むところ

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよー」

「わつですー、永遠に必要ありませんー！」

「…………（大号泣）」

「姫路に島田。お前ら人の心を抉つて楽しいか？」

「将軍は呆れながらツツコミを入れる

バタバタバタつー（飛び掛かるつとした風が押さえられる）

「ちよつ、風！あなたの試合は終わったんだから前に出なくていいつて！」

「放して刹那！隊長に対する無礼な言葉を許せない！」この場での2人、人体にある216本の骨を粉々にしないと！」

匪の物騒な言葉に瑞希と美波だけでなく、將軍も雄一もビビッてしまう

「骨を碎くのは勝負が終わってからにしなさい！」

「おいそこー殺人予告を公認するな！」

奇天烈なやり取りが繰り広げられる中、ムツツリーニと愛子が召喚を開始する

前回、前々回では出番が無かつたムツツリーニの召喚獣は忍装束に小太刀の二刀流

対するは

「何だあの巨大な斧は！？」

「しかも例の腕輪までしてやがる！コイツはかなり強いぞ！」

セーラー服に巨大斧、そして特殊能力の腕輪を装備した愛子の召喚獣

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

巨大斧に雷が宿り、猛スピードでムッシュリーの召喚獣に詰め寄つ  
ていく

「それじゃ、バイバイ。ムッシュリー君」

斧が召喚獣を真つ一つにしようとした直後

「……………加速」

「……………え？」

突然ムツツリーーの召喚獣の姿がブレ、敵召喚獣の真後ろにいた

一呼吸置くと、愛子の召喚獣が消滅した

Aクラス 工藤愛子

保健体育 446点

V S

Fクラス 土屋康太

保健体育 572点

「572点ー？保健体育だとこんなに点数が高いのかつー？」

「下手すると僕の総合科目並の点数だ！」

「全部あれは低すぎないか？」

「そ、そんな……！このボクが……！」

相当ショックなのか、床に膝をつく愛子

あと一勝すればイーブンになる

「次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

「それなら僕が相手をしよう」

Fクラス側は瑞希

Aクラス側は学年次席、久保利光が出てくる

「君が一番の心配だ」

「そうだな。あの2人の実力は殆ど互角。不得意科目を突かないと負けるかもしけねえな」

「科目はどうしますか?」

「総合科目でお願いします」

総合科目は学年の順位がそのまま強さに反映される

「ちよつと待つたー何を勝手に

「

「構いません」

「姫路さん?」

クレームをつけようとした明久を止める瑞希

心配する明久だが、一瞬で決着がついた

Aクラス 久保利光

総合科目 3997点

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4409点

「マ、マジかー!?

「こいつの間にこんな実力をー?」

「IJの点数、霧島翔子に匹敵するだ

点数差400オーバー

尋常じやない強さに誰もが驚いた

「ぐつ……!姫路ちゃん、びつかつてそんなに強くなつたんだ……?  
…?」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のこころFクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから頑張れるんです」

瑞希からの嬉しい台詞に明久と将軍は笑顔になる

これで三対三となり、いよいよ次が最後の勝負だ

Aクラスからは霧島翔子

そしてFクラスからは雄一

「教科はどひしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

「雄一の宣言で△クラスにざわつきが生まれる

高橋女史はノートパソコンを閉じ、教室を出ていく

「雄一、あとは任せたよ」

「負けんなよ大将」

「ああ。任せた」

その後、ムツツリー二がピースサインを向ける

「坂本君、あの事、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ」

何故僕が話に出てくるんだ？！？と明久は疑問に思い、将軍はやれやれと呆れ。ポーズ

最後の勝負を行つ為、霧島翔子と雄二が視聴覚室に向かう

巨大ディスプレイに映る2人と日本史担当の飯田先生

問題用紙が配られ、テストが始まる

「これである問題が無かつたら俺達の負けだ」

「うそ。でも出ていたら、僕らの勝ちだ」

ディスプレイに問題が映し出される

「次の（ ）に正しい年号を記入しなさい」

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「出て、いた……」

「よ、吉井君！」

「勝った……俺達の勝ちだあああああつ！」

「ウチの爺爺は死んでる」

日本史限定テスト100点満点

Aクラス  
霧島翔子 97点

V  
S

Fクラス 坂本雄一 53点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になり

視聴覚室に向かつた將軍は斧、鎌、槍、日本刀、ガトリング、火炎放射機、その他諸々の武器を全身に武装した人間兵器と化していた

## **決着！Aクラス戦（後書き）**

見事に期待を裏切った雄一。将軍よ殺しちゃえーっ！と言つ  
心の声です。

「途な想いは応援すべし……！？」

「四対三でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込む明久達

先頭に立つ将軍は両手に持つてゐる武器をギリギリと握り締める

「……雄一、私の勝ち」

「……殺せ」

「良い度胸だ、ブチ殺してやるー歯を食い縛れー！」

「明久、俺のチーンソーを貸してやるーこのクソゴリヲをバラバラの肉片にするぞー！」

将軍が明久にチーンソーを渡し、2人同時にスイッチを入れようとするが瑞希と美波に止められてしまう

「だいたい53点ってなんだよー。0点なら名前だけ書かれてかも考  
えられるのに、この点数だと

」

「いかにも俺の全力だ

「何偉そうござつてやがんだ負け犬があ！今すぐブツ殺してやる  
！」

「將軍は上半身を、僕は下半身を切り刻むよー。」

「吉井、落ち着きなさいー。アンタだつたら30点も取れないでしょ  
うがー！」

「それについては否定しな  
いや、否定出来るー。將軍から曰  
本史を教わったから40点は取れるー。」

「殆ど変わらないじゃない！』

「それなら坂本君を責めちゃダメですっ！」

「いや、コイツは大見得切つて勝てるとは言ひた癖に負けやがった  
！Fクラス全員の期待を裏切つた罪は重い！」

「將軍の言つ通り、このバカには喉笛を引き裂くと言つ体罰が必要  
なんだよ…」

「それは体罰じゃなくて処刑です！」

「明久、そんな殺り方は生温過ぎるーまずは両目を抉り取つて踏み  
潰す！その後に四肢を切り落として顔の上半分を消滅させてやるの  
が正しい体罰だ！」

「はい、ストップストップ

後ろから刹那と凪が将軍に手錠をかけて拘束

将軍は手錠を引きちぎりと試みたが無理だった

「放せー！あの『コラに罪を償わせてやるー』

「慌てないの。あんた達が手を下さなくとも、あのブサイク『コラは終わるから

「……………？」

刹那の言葉に将軍と明久はおとなしくなる

その意味が理解できていなかっだ

そして霧島翔子の口から告げられた

「…………雄一、私と付き合つて

「…………せー?」

「やつぱつな。お前、まだ諦めてなかつたのか

「…………私は諦めない。ずっと、雄一の事が好き」

「え?、何?霧島さんは女の子が好きじゃなかつたの?」

「違う。最初から好きな相手がいたから他の男子に興味が無かつただけ

「つまり、一途な想い故の噂だったんですね」

2人はああっと手を打ち付けて現状を把握した

「拒否権は？」

「…………無い。約束だから。今から『データー』に行く

「ぐあつ！放せ！やつぱこ」の約束はなかつたことに

「うわ～最低。自分から約束を破るなんて」

「人間のクズです」

「あれは将軍が勝手に話進めたからだ！テメエ責任取つて何とかしろ！」

雄一はAクラスとの交渉時、皿に力カト落としをくらわされ死んでいた（違うけど）ので将軍が代理で試合方式やその後の事を話していた

なので、雄一は全て将軍のせいだと丸投げ

その態度にムカついた将軍は霧島翔子に近付き懐からある物を渡す

「霧島だつたつけ？カップル成立記念にこれをプレゼント」

渡したのは手枷とスタンガン（50万ボルト）

「万が一襲われたらコイツで迎撃を」

「テメヒ ハラ！」

「…………あなたは良い人。でも大丈夫。雄一になら襲われても良い」

「じゃあ雄一、逝つてらっしゃい（笑）」

「（笑）じゃねえ！テメエ覚えてろ！生きて帰つたらブチ殺してやるー！」

いきり立つ雄一は首を掴まれながら霧島翔子と共に教室を去った

そして生活指導担当の鉄人（西村先生）がいつの間にか教室に立っていた

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな。」

「ん？ 我がFクラス？」

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「　　「なにいつー?」」

将軍以外の男子生徒全員が悲鳴をあげる

「いいか。確かにお前らはよくやつた。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかつた。でもな、いくら『学力が全てではない』と言つても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからと言つて、蔑ろにしていい物じゃない」

「そうですね。無様な点を叩き出した雄一が良い例えだ」

「吉井、將軍。お前らと坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の観察処分者 2人組、その片方は学内最高危険人物とA級戦犯だからな」

「ええっ！？ 何で俺まで…？」

「当たり前だ。学園にチーンソーなどの凶器を携帯してゐる奴を監視しない訳ないだろう」

將軍はグウの音も出せなかつた

「そりはいきませんよー何としても監視の目を掻い潜つて、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には悔い改めるといつ発想はないのか

明久のやる氣の無さに鉄人は溜め息混じりの台詞

だが、この時の明久にはちょっとだけやる気が出ていた

負けたクラスは3ヶ月の間宣戦布告が出来ない

だから力を付けて、3ヶ月後にまた試召戦争を起こして勝てば鉄人から逃れる事が出来る

やつてやろうじゃないか！と意気込んでいた明久、刹那と皿が明久に歩み寄る

「ヨッシー、この後喫茶店に寄つていいくけど……どう？」

「隊長、今日くらいは羽目を外しても罰は当たりません」

「えっ？ 待つて、僕の生活費が……」

「俺の奢りだ。パートと使ってスカッといよつぜ」

「良いのー? よかつた……何とか明日を生き延びられる」

明久は生活費〇の危機を脱し、心底ホッとする

「そつそつ、その2人も一緒に来なさい。話したい事があるから」

「勿論よー。吉井が変な事しないか監視しなきやね!」

「そうですー!」

「…………僕つて2人に毛嫌いされてるのかな…………?」

「喫茶店では嵐が吹き荒れるな…………」

元元に転校したのは間違いだったかもしない。  
そんな考えを頭の中に過りさせてしまつ将軍だった

## オリキヤラ紹介（前書き）

オリキヤラ2人の紹介です

## オリキヤラ紹介

名前……月詠凪つきよみなぎ

イメージCV……伊藤静

2年Aクラス所属

銀髪の長いおさげが特徴で空手道場の娘（実力は三段）

小学生の頃から口下手で一人ぼっちだったが、明久が初めて友達になってくれた事から彼に好意を寄せている

ある遊びの名残から明久を「隊長」と呼び慕い、明久に危害を加えようとする人間には容赦なく攻撃する

スカートの下には常に短パンを着用している（蹴りが出しやすいから）

その為、明久や雄一並みのアクションを平氣でこなす

家事や料理の腕も申し分ないが、作る料理殆どが激辛（笑）

頼れる存在に見えるが明久並みのおバカでもある

召喚獣の装備は改造空手道着に手甲

織田切刹那  
おだきりせつな

イメージCV：釘宮理恵

凪と同じく2・A所属で明久の幼馴染み（明久は苦手意識してる）

捜査一課の警部を父に持ち、時折バイトとして捜査に協力したりする

凪と同じように明久を好いており、伝えたい事はハッキリと語り性格

召喚獣の装備は軽鎧付きのミニスカドレスと変形可能な薙刀（？鎖  
鎌、？大鍔、？ブーメラン、？弓）

**將軍の財布の住人は大体が福沢諭吉（前書き）**

アニメでやつてた話をアレンジしてみました

將軍の財布の住人は大体が福沢諭吉

本日午後12時

明久、瑞希、美波、秀吉、將軍は刹那と凪の提案で喫茶店に行こうとしていた

「時間あるから映画見に行く？」

「え、映画……！？」

映画のチケット、それも7人分となると値段が張る

明久は基本的にゲームや漫画等に生活費を使っているため食生活は乏しい

故に映画館での出費に狼狽してしまう

「将軍。出来れば助けて下さい」

「断る。金の管理は独り暮らしの必須事項だから管理出来る様になりました」

將軍は明久に渴を入れる

生活費に関しては明久が悪いので本人も反論出来なかつた

「負けたから奢るのは当然でしょ」

「でも刹那、5人のチケット代は高いよ。私達は自分で払おう」

「ん~、まあ仕方無いわね。ヨッシー、あたし達は自腹で払うわ」

明久は少しだけホッとするが、それでも3人分のチケットや飲み物、食べ物も買わなきゃならないので生活費が危機に陥るのに変わりはない

「まあ、今日ぐらいは覚悟していいや」

将軍は自分の財布から福沢諭吉を一枚取り出す

その瞬間、明久に手首をチョップされる

「痛つ！何すんだ！しかも俺の一万円パクるな！」

「お願いだ將軍！君の協力があれば僕の食費が消滅しないで済むんだ！」

「ふざけるな！借りた金を返せない様な人間に貸す金など無い！」

一万円を放さない明久

手首を捻つて一万円を奪還しようとする将軍

そこへ聞き覚えのある声が割り込んできた

「観念しろ明久。男とは……無力だ」

「何だ負け犬ゴリラか。随分と奇抜なファッショングで」

今の雄一は両手に手枷が付けられ、それから伸びる鎖は翔子が握っていた

「…………雄一、どれが見たい？」

「早く自由になりたい」

「代表。今日放映してゐ中で一番長い映画はあれよ」

刹那が追い打ちをかけるように放映リストを指差す

「…………じゃあ、それを見る」

「おい、それ7時間4分もあるだー!?」

「…………2回見る」

「14時間8分も座つてられるかあ!」

2回も見たら日付が変わる上に尻や腰が大変な事になりそうだ

「…………今まで会えなかつた時間の埋め合わせ」

雄一は無理矢理手を振り払つて帰らうとした

「…………今日は逃がさない」

「おい翔子、そのスタンガンで何をすギャアアアアアアッ！」

翔子は将軍から貰つたスタンガンで雄一を黒焦げにし、受付まで引きずつっていく

「すげえ、躊躇い無くスタンガンを……」

「…………学生2枚、2回分」

「はい。学生一枚、気を失った学生一枚、無駄に2回分ですね？」

なんで今のを見て普通に対応出来てんだ?と将軍は受付嬢の凄さにびっくり

そして、なるべく短い映画にしておこうと呟いた明久と将軍だった

「面白かつたですね」

「でしょ?ラストも良かつたけど、カーチェイスの場面はハラハラしたわ」

「うむ。手に汗握る展開じゃつたのう」

「……………映画館、得る物はあつたけど失う物もあつた（泣）」

「泣くな明久。覚悟の上だろ？」

映画館から出た明久一行は喫茶店へと向かおつとした

「おね———さま———っ！」

「な、何か走つてきたぞ！？」

「み、美春！？」

明久一行の前に現れたのは前にも一度会つた事がある女子

数日前の昼食時、将軍がジャーマンスープレックスで気絶させた清水美春だった

「あ、あなたはあの時のドリルっ娘!」

「誰がドリルですか!以前は不覚をとりましたが、今日いやはお姉様との甘い時間を邪魔させません!」

「…………ヨッシー、誰あいつ?」

「何だかヤバいオーラが見えてます」

「え~っと、彼女はロクラスの清水美春さんで……島田さんのお知り合い」

「違います!お姉様の恋人です!」

その発言に刹那と凪はバックステップで美波から距離を取った

「なに？ あんた同性愛？」

「人は見掛けによりませんね」

「違うわよー。ウチは普通で、ちゃんと男子が好きなんだからー。」

「いけませんお姉様！ そんな愚劣なブタ共といふなんて！」

ブタ呼ばわりされた事に将軍は懐に手を入れる

勿論力チンときたので武器を取り出す為にだ

「お姉様と映画を見た罪、万死に値します！ 覚悟しないブタ共ー。」

「えー?僕も入ってるのー?」

清水美春が手に持ったシャーペンやコンパス等の文具、更にはフォークを明久と将軍目掛け投げた

「本邦初公開、双龍阿修羅あー。」

「隊長危ないー。」

将軍は自作した二丁の銃（戦国無双、独眼竜が使つてゐる武器）で落ち落とし、風はおさげを鞭の様に振つて明久を護衛

「風のおさげはやっぱ便利ね～」

“いつから風のおさげは普段からこんな使い方がメインになり

「隊長に凶器を投げるとは……粉碎します（「オツー）」

「うおー！田詠から金色の鬪気がー？」

サ ヤ人並の戦闘力を剥き出しにした凪は超スピードで距離を詰め、渾身の肘鉄を美春の鳩尾に入れて沈黙させた

騒ぎに気付いた警備員を振り切り、明久一行は喫茶店に入店

「で、席はどうすんだ？」

「男子と女子に別れるわ。ちょっとこの2人と話がしたいから」

凪の提案により、男子陣と女子陣に別れて座る事にした

## 女子陣

「振り分け試験時に熱出して途中退席、悪いけどそれは自業自得ね」

「そうなんですけど、吉井君はそんなのおかしいって抗議してくれました。私が悪いのに必死で……」

「隊長は昔からそういうお人なんです。自分の事よりも他の人を優先させて……優しい」

「夙は小学校の時、ヨッシーに助けられた事あるからね。それ以来  
ゾッコンな訳」

「…………刹那…………」

「姫路と嵐がヨッシーを好きなのは分かるけど、あなたは何でヨッシーにいつも食つて掛かってるの？」

「なつ、何よいきなり！？べ、別に芦井の事なんて何とも」

「顔を真っ赤にして否定しても説得力は皆無よ？」

「本当はあなたも隊長の事が好きなんですね」

「…………」

「の陣は恋愛話で盛り上がつてるようだ

「しつかし明久、何つーかお前が羨ましいな。両手どこひつか両足にも花じやないか」

「お主にあれ程の女子が集まるとは思わなかつたぞい」

「いや…………なつちやんはともかく、刹那は島田さんと同じくらい苦手なんだ。小学校の頃、いつも馬を強要されるわ……椅子にされるわで大変だったよ…………」

「悪の女王が2人みたいな感じか、同情しちまつよ…………」

「と詫びよう、島田が2人じゃ のう」

「…………生きていられるかな?僕…………」

女子陣とは真逆に、葬式みたいな雰囲気になっていた男子陣だった

将軍の財布の住人は大体が福沢諭吉（後書き）

次回はオリ話です。

闇話 団の料理はギネス並の辛さ（笑）（前書き）

今回のバカテストはアニメの番宣問題を載せてみました。

閑話 回の料理はギネス並の辛さ（笑）

問 次の( )に当てはまる言葉を記入しなさい。

「私は（ ）を望みます」

吉井明久の答え

「今月の食費」

木下秀吉のコメント

「わびしい奴じやのう……」

## 月詠凪の答え

「たつ……たたたたた隊長と『デ』『デ』『デ』『デ』『デ』

木下秀吉のコメント

「少し落ち着くのじや」

織田切刹那の答え

「ミッキーが織田切家に婿入り又は養子縁組に入る事」

木下秀吉のコメント

「姫路と島田が釘バットを持って明久の方に向かっていつたのじや  
が……」

將軍の答え

「秀吉は男の筈なのに女子と言われる//ステリーの解説

木下秀吉のコメント

「ワシは元から男じゃつー。」

「負けて設備がランクダウンしたって聞いたけど、まさかみかん箱とは痛いわね……」

この日の放課後、Fクラスには2人の来客が来ていた

明久の幼馴染みである刹那と凪だ

びつやら設備を見に来たらしい

「まさか卓袱台より下があるとは思わなかつたよ」

「セウジヤのア」

「しかし隊長。このみかん箱も有効活用出来ますよ?」

嵐の言葉に疑問符を浮かべる明久一同

嵐はみかん箱の蓋を開いて自分の鞄をその中に入れる

「どうでしょ。卓袱台では不可能だった物品の収納が、みかん箱では可能になります」

「本當だ、凄いよなつちゃん!」

「セウジヤ感心するところかー?」

嵐のあまり賢くない打開策に感心する明久とツツ「ミミを入れる将軍

明久に讃められたせいか、凪の顔は紅潮していた

「で、お一人はこの寂れた設備を見に来ただけなのか？」

「違つわ。コッサーと瑞希と美波に差し入れを持ってきたのよ。この前で馬が合つてや」

この前のとは明久達が映画や喫茶店に行つた日の事

その際、瑞希達と話の馬が合つて、互いに名前で呼び合つ様になつたとか

「へへ、仲良くなつたんだ」

「ま、まあね。アキが変な事しなこうつに監視する為よ

「ん? アキって僕の事?」

「一年から一緒にいて名字で呼ぶのもなんだから、あたしが名前で呼んだら?って言ったのよ。別に構わないでしょ?」

「え、まあ良いけど…………」

美波は安心しきった様な表情、瑞希は何やら今の自分が不満そうな表情をしている

それに明久以外の人間は気付いていた

「夙、早く差し入れ出しなさいよ。ここで実は忘れてきたなんて洒

落にもならないから

「ちやんとあるよ。ちょっと待っててください隊長」

凪は先程収納した鞄を引っ張り出し、中身を取り出す

「随分とデカイ弁当箱だな」

「辞書みたいな大きさじゃの？」

「…………（ノクノク）」

手に持った弁当箱の蓋を開け、中身を披露する凪

見事な赤みを帯びたプルプルのゼリーが皆の前に姿を見せた

「弁当箱につっこむゼリーって……………ちょっと変だな?」

「「ココロはケチ言わない」

「誰が「ココロ」だ!」

「まあまあ、「ココロ」の話の事なんて気にするだけ時間の無駄だ」

「赤いゼリーとは。さしづめ苺かスマモトといったのがひつかう」

「スプーンをお渡しますので、遠慮なくどうぞ」

スプーンを渡された明久一同

最初にゼリーを掬つたのは明久と将軍とゴリラ（笑）

「今何か不快な物を感じたが気のせいいか?」

明久と將軍は無視、雄一は引っ掛けながらも掏つたゼリーを口に運び

盛大に火を吹いた

「な、何コレー!? ゼリーなのに物凄い辛味がーーーっ!」

「舌が！舌が痛ええええっ！」

「いいい痛いだけじゃねえ！焼けるー舌が口から顔まで焼けそうだ  
——っ！」

「あの、風貴ちゃん…………このゼリーは何ですか…………？」

「こいつたい何のゼリーなの…………？」

瑞希と美波が恐る恐るゼリーの正体を聞いてみる

风貴は自信満々に答えた

「特製ジロロキアゼリーです」

「ジョ、ジョロキアだと…………っ！」

ジョロキアとはギネスブックに載つた、世界一辛い唐辛子

その辛さはハバネロをも上回る

「あんたの激辛好きにはホント圧巻ね…………」

「どうして？こんなに美味しいのに。瑞希達もどうぞ」

ワンスプーンの激辛ゼリーを食べても平氣な凪はまだ食べていない  
瑞希達の前に差し出す

危険を察知したムツツリーは即座に逃げよつとしたが、明久と雄  
一に足を掴まれ逃走出来なくなつた

「何処行くノムツシリーネ? せつかくなつちゃんがくレタんだから食べなイと失礼だよ?」

「大丈夫ダ…… 将軍がチヤんと食べサセテくれるゾ」

「ああ……口ア開ケなムツツリー……」

千切れそつな速度で首を横に振るムツツリーーだったが……結局

激辛ジヨロキアゼリーを無理矢理食べさせられ、あまりの辛さに声を出せずにのたうち回る羽田に…………

「やはり隊長には辛過あがりましたか？牛乳をどうぞ」

明久思いの風は牛乳を渡した

牛乳を飲むと辛さが和らぐらしい

「ふはあつ…………食べ物くれるのは嬉しいけど、あまり辛いのは……」

「間違つて田に入つたりしたら大変な事になつちまつ」

反省した風に対しても鬪志を燃やすのは瑞希

負けじと鞄から箱を取り出し、ズイツと前に出す

「…………つー？姫路？それは何だ……？」

「実は私もクッキーを作つてきました！良かつたら皆さん食べてください！」

ダッシュ！ × 5

明久達は死にたくないと言わんばかりに超スピードで教室を出していく

つた

余談だが、剎那と風はせつかくだからと瑞希のクッキーを食して豪快に倒れた

その時に2人は自分達に対する嫌がらせだと受け取ってしまった。……

闇話 団の料理はギネス並の辛や（笑）（後書き）

次回から清涼祭編を書くもす。

## 清涼祭編プロローグ

### 清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

「あなたが今欲しい物は何ですか?」

姫路瑞希の答え

「クラスメイトとの思い出」

教師のコメント

なるほど。お姫さんの想い出になるような、やつぱり出した出し物も良いかもしませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきま  
す。

土屋康太の答え

「Hな本（訂正）成人向けの本」

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

月詠凪の答え

「たたたたたた隊長と」一緒に ~~f u g k p a w o w q m c e a s m k~~  
y

教師のコメント

緊張し過ぎの上、文字化けはやめてください。

織田切刹那の答え

「嘘発見機」

教師のコメント

使用目的が気になりますが、触れないようにしておきます。

吉井明久の答え

「カロリー」

教師の「メント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

將軍の答え

「俺の本当の名前」

教師の「メント

字の筆圧と血の痕から必死さが滲み出していますね。

「…………雄一

「何だ？」

「…………『如月グランドパーク』って知ってる？」

「ああ。今建設中の巨大テーマパークだら？もうすぐプレオープン  
つていう話の」

「…………とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したっていうアレか？面白そうだよな

「…………日本一の観覧車とか」

「ああ、相当デカイみたいだな。聞いただけでも凄そつだ」

「…………世界で二番目に速いジロシトコースターも」

「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするってやつか。どんなモンなのか分からんが、考えるだけでワクワクしてくるな」

「…………他にも面白こものが沢山ある」

「それは凄いな。きっと楽しさ」

「…………それで、今度そこがオープンしたら、私と」

「ああ、お前の言いたい事はよく分かった。そりままで行きたいなら

「

「うる」

「今度友達と行つてこいよ」

「……握力には自信がある」

「ぐあああつ！アイアンクローはよせつ！」

「…………私と雄一、2人で一緒に行く」

「オープン直後は混み合っているから嫌がらせもあつ。」

「……………それなら、ブレオーブンのチケットがあつたら行ってくれる？」

「ブ、プレオープンチケット? ケホツ、あれは相当入手が困難らし  
いぞ?」

「…………行つてくれる?」

「んー、そうだなー、手に入つたらなー」

「…………本当?」

「あーあー。本当本当」

「…………それなら、約束。もし破つたら  
」

「大丈夫だつての。この俺が約束を破るような奴に見えるか?」

「…………この婚姻届に判を押してもらひ」

「命に代えても約束を守る」

桜の花びらが徐々に姿を消し、新緑が芽吹き始めたこの季節

文月学園では新学年最初の行事、清涼祭の準備が始まりつつあった

各クラスが準備をしている中、Fクラスは校庭で野球をしていた

「吉井！-こいつ！-」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

「言つたなー? こいつなれば意地でも打たせるもんか!」

マウンドを足で均す明久はミットを構えている雄一のサインを待つ

そして来た悪友からの指示は

『カーブをバッターの頭に』

「それ反則じゃないのー?』

『ツッドボール確実のラフプレー指示を無視して得意球を投げよ!』  
した明久

雄一の背後に二つそりと将軍が立ち、明久に指示を送る

『ゴコロの股間に豪速球』

「こちらも（味方に対しても）デッドボール確実のラフプレーを指示した

『流石は将軍、的確な指示だよ…………』

普段から雄一のせいで酷い目に遭わされてる明久は、躊躇いなく豪速球を投げた

悪友の股間に

「ぐおおおおお——つー何故だまあああ——つー?」

「ナイスピッチング明久!」

「やつたよ将軍！才分の狂いなく直撃させたよー。」

将軍と明久はパチンと手を叩き合つていると

「貴様ら、学園祭の準備をサボつて何をしているかー！」

「ヤバい！鉄人だ！」

Fクラスの担任となつた西村先生、通称鉄人が校舎内から走つてきた

「吉井！貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違いますー！どうじでいつも僕を目の仇にするんですかー！？」

「野球をやめないと云つて出したのは雄一ですよー。いつこの場合は提案者が責任を取るべきだ！」

明久と将軍が弁解を主張するも、聞く耳を持つてくれないと云つか持とうとしない鉄人

将軍は仕方ないと云つ表情で明久にサインを出す

『フォークを雄一の股間に』

「違う！今は球種やコースを求めているんじゃない！そもそも変化球を使う意味がない！」

「全員教室へ戻れ！この時期になつてもまだ出し物が決まつていないなんて、うちのクラスだけだぞ！」

鉄人の恫喝が響き、明久達は教室に戻された

**将軍はもはや武器商人（前書き）**

アクセスが三万を越えました！

## 将軍はもはや武器商人

「さて。そろそろ春の学園祭、清涼祭の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが…………とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

「どうでも良さそうな態度で人に押し付ける雄一

試合戦争の時とは大違いである

「吉井君。坂本君つて学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

「直接聞いた訳じゃないから分からぬけど、楽しみにしてこらつて事は無さそうだね」

「興味があるならもっと率先して動く筈だもんな

いつもは明るい瑞希の表情に少し翳りがあります

「んじゃ、学園祭実行委員は島田といひ事でいいか?」

「え? ウチがやるの? うん……ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

実行委員を決める話で美波の名が上げられる

世界的にも注目されている試験召喚システムを世間に公表する場として、清涼祭期間中に試験召喚大会という企画が催される

文月学園の宣伝みたいな行事だ

「召喚大会?」

「うん、瑞希と一緒にね。ウチは瑞希に誘われてなんだけど。瑞希

つてば、お父さんを見返したいって言つて聞かないんだから

「お父さんを見返す？」

「家で色々言われたんだって。Fクラスの事をバカにされたんですね  
！許せません！って怒ってるの」

「ほ〜、俺達の為に怒ってくれるとば」

「だつて、皆の事を何も分かつてないくせにFクラスっていう理由  
だけでバカにするんですよ？許せません！」

怒ってくれるのは嬉しいが、誰が見てもFクラスはバカの集まりだ  
と思つ

明久と将軍は無言で顔を見合させる

「お前ら。話を続けていいか?」

「あ、ゴメン雄一。美波が実行委員になる話だつたよね?」

「だからウチは駅験大会に出るって言つてたの」

「ならサポーターを選出すればやり易くなるだろ。当候補を挙げてくれ」

将軍の提案で教室内からちらちらと推薦の声が聞こえてくる

「吉井が適任だと思つ」

「やはり坂本がやるべきじゃないか?」

「姫路さんと結婚したい」

「将軍でもいいだろ」

関係ないラブコールが混じっているが気にしないでおくれ

そこへ秀吉が手をあげてある人物を推薦する

「ワシは明久が將軍が適任じゃと思つがの」

「秀吉。僕もそういう面倒な役は出来ればパスしたいな～なんて」

「それは皆同じだし、んな事言つてたらいつまで経つても決まんねーよ。今拳がつた連中から2人ほど選んで、その中から決めるってのはどうだ?」

「それが良いわね。それじゃ……」

美波が黒板に副実行委員候補の名前を書いていく

候補？……吉井

候補？……明久

「さて。この2人のどちらが良いか選んでくれ

「おい。明らかにその候補の挙げ方はおかしいだろ」

「どうする？どうが良いと思つ？」

「そうだなあ……。どちらもクズに変わりないんだが……」

「そう言つてゐる貴様らこそが正真正銘のクズだろー。」

Fクラスのモラルの無さで将軍は頭を殴ませ、トイレに行く

「将軍じゃないか。何をしていろ

「トイレに行ってたんですよ。そんな何を企んでるみたいな言い方はやめてください」

戻る途中で将軍は様子を見に来た鉄人と遭遇した

そしてすぐに教室の扉を開けて黒板に書かれているFクラスの出し物に目をやる

候補? ウエディング喫茶『人生の墓場』

候補? 中華喫茶『ヨーロピアン』

「…………アホみたいな物ばっかし」

「…………補習の時間を倍にした方が良いかもしけんな」

鉄人の言葉に全員が驚愕する

「せ、先生! それは違うんです!」

「そりです! それは吉井が勝手に書いたんですね!」

「僕らがバカな訳じゃありません！」

明久を売る様な言い訳に将軍はとりあえず蹴りをお見舞いしておく

「お前らバカ、明久を売ろうとしてる時点でバカ。何処ぞのゆうゴリラみたいに他人に擦り付ける暇があるなら」の愚かさを見直せや

「テメエコラ！勝手に氣色悪い名前付けてんじゃねえ！」

「みつともない言い訳をするな！そもそもバカな吉井を選んだ事自体がバカな行動だと言つてるんだ！」

明久が密かに握り拳を震わせている

同級生だつたら間違いなくシバキ倒してと思えよう

「まつたくお前達は……。少しは真面目にやつたらどうだ？稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういうた気持ちすら無いのか？」

溜め息混じりの鉄人の台詞にクラス全員の目が輝き出す

少しふくらこの設備の向上なり学園祭の稼ぎで何とかなるかもしれない

「み、頑張りましょー！」

瑞希は立ち上がりつてやる気を表現し、クラスを煽動していた

「？姫路はやけに積極的だな？」

「さうだね。何だからじへない気がする

クラスの中に活気が溢れてきたのは良いが、違つ意見が飛び交う

その内『お化け屋敷』だの『カジノ』だの『焼きどりもろこし』だの、黒板に書いてない出し物まで拳がつてくる始末

「はいはい！ちょっと静かにして！」

美波が手を叩いて注意するが効果はなし

見るに見兼ねた將軍が懐から取り出した武器を民衆のど真ん中に投げた

畳に突き刺さったのは巨大な大文字型の手裏剣

將軍が自作した代物で、バイクなら簡単に真つ一つにしてしまう

「話が進まねーだろが。次は耳の穴を無理矢理抉じ開けんぞ」

鉄人とは別の気迫で皆を黙らせた将軍

突き刺さった手裏剣を放置して自席に座る

「もうつ。これじゃ決まりそうにないから、店はさつき拳がつた候補の中から選ぶからね！」

この言葉にまた不満や文句等が飛び交うが、将軍がグレネードランチャーを取り出そうとしたのが視界に入つて直ぐに治まる

しかも丁寧に正座した状態で

「それじゃ、写真館に賛成の人！　　はい、次はウェディング

喫茶！　　最後、中華喫茶！」

選挙の結果、僅差で中華喫茶がFクラスの出し物となつた

「うやつてテキパキと物事を進行させていく力は瑞希や明久には備わっていない

雄二の人選は強ち間違つてなかつたようだ

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するよ！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「…………（スクツ）」

中華喫茶の提案者、須川と何故かムツツリーーーが立ち上がる

「ムツツリーー、料理なんて出来るの？」

「…………紳士のたしなみ」

「そんなんたしなみ聞いた事ねえよ。まさかチャイナドレス見たさで中華料理店に通つてたら、見よう見真似で出来るようになつたとかつてオチじやねえだろな？」

核心を突かれたムツツリーーは無言で将軍から顔を逸らす

「まずは厨房班とホール班に分かれてもうからね。厨房班は須川と土屋の所、ホール班はアキと将軍の所に集まつてー。」

明久はいつの間にかホール班のトップにされていた

「それじゃ、私は厨房班に

「

「ダメだ姫路さんー君はホール班じゃないとー」

「その通りー極端に女子が少ないクラスだからホールに回つて客寄せをするんだー！」

何より食中毒で営業停止にしたくない…………その一心で明久と將軍が説得する

「それにほり、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんと接した方がお店として利益が痛あつ！み、美波！僕の背中はサンドバッグじゃないよーー？」

「か、可愛いんだなんて……。吉井君がそう言つならホール”でも”頑張りますねっ」

「”でも”じゃない。ホール専任で」

必殺料理人 姫路瑞希

## ホール決定

「そう考へると、島田と秀吉はホール。明久と俺は厨房に回つた方が良いな」

「そうだね、適任だと思つ。それに平然と武器を出す將軍がホールに立つたら、間違いなくお客さんが寄り付かなくなると思う…………」

「ああ…………それはそうだな…………」

自覚があるだけに將軍は少々傷付く

「…………やっぱウチは厨房にじょうつかな?」

「え？ 何で突然変更を要求すんの？」

「…………つーやつぱり私も厨房に回ります！ 吉井君と一緒に楽しくお料理をします！」

変更しようとした美波の視線の先には明久

それに気付いた瑞希が凄い気迫で厨房班に回ろうとした

「明久、お前はホールに行け。何か分からんが…………お前が厨房に行つたら違う意味で大変な事になる」

「そっ、そうだね。じゃあ厨房は任せるよ」

「うしてFクラスの人並みの生活が懸かつた学園祭が幕を開けた

**将軍はもはや武器商人（後書き）**

まだ一巻のところなのに結構しんどいです  
.....

## 秀吉の声・帯模写は神業の領域

問 学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

「喫茶店を経営する場合、制服はどんな物が良いですか？」

姫路瑞希の答え

「家庭用の可愛いHプロン」

教師のコメント

如何にも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

「スカートは膝上1~5センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいの物を用意し裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを」

## 教師の「メント

裏面にまでびっしりと書き込まなくとも。

## 將軍の答え

「格闘・武器収納向き且つ動きやすい服装」

## 教師の「メント

君の基準で考えないでトトさい。

## 吉井明久の答え

「ブランジャー」

## 教師の「メント

ブレザーの間違いだと信じています。

「アキ、ちょっと良いく？」

帰りのH.R.が終わった放課後、特にやる事がない明久は帰ろうとしたが美波に呼び止められる

「ん? 何か用?」

「用つて言つか、相談なんだけど」

「相談? 何の相談なんだ?」

話が耳に入った将軍も首を突っ込む

美波が眞面目な顔をしてる辺り、何か良い話では無いなと悟る

「相談？僕で良ければ聞かせてもらひつけど」

「……ひょっとして、明久が織田切や月詠と幼馴染み付き合いにあるのが許せないからどうやって処刑した方が良いかつて相談か？（笑）」

将军が冗談混じりで発した言葉に明久は猛ダッシュで逃げようとしたが肩を掴まれ阻止された

「「めん、冗談だ。冗談だから島田も睨むなつて」

「……もうつ。アキが言うのが一番だと思つんだけど の、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

「うへん、それは難しいなあ……。さつきも言つたけど、雄一は興味の無い事には徹底的に無関心だからね」

実行委員の選挙や出し物の決定を他人に丸投げする辺り、そつだろ

「でも、アキが頼めばきっと動いてくれるよね?」

「え? 別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらなこと思うけど」

「それに明久や俺を平氣で捨て駒にするような人間だからな。そんなもんお前らでやれって言われるのが目に見えてる」

「ううん、將軍は何も分かってない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれる筈。だって」

「そりゃ確かに、よくひるんでこるけど、だからと言つて別に

「だってアンタ達、愛し合つてゐるんでしょう?」

「もう僕お婿にいけないっ!」

「何で真顔でそんな台詞が出てくるんだー!?.」

明久は泣き崩れ、將軍は一步後退する

「誰が雄一なんかと一だつたら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

「……あ、明久？」

偶然近くにいた秀吉の動きが止まり、徐々に顔が赤みを帯びていく

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんな事を言われても、ワシらには色々と障害があると思ひのじや。その、ホラ、歳の差とか

……」

「ひ、秀吉ー違うんだ！物凄い誤解だよーさつきのはただの言葉のアヤでー！」

「障害つづつても俺達は同じ年だろーいや、それ以前に何で顔を赤くしてんだー？」

男だと理解してゐ筈の秀虹の反応を見て將軍はギョウとする

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？ あ、うん。そういう事になるかな」

「詳細を聞かせてくれないか？ 何故そこまで喫茶店に拘るのか」

將軍の一言で美波は一瞬口<sup>ヒ</sup>もれる

重苦しい空氣の中、美波は口を開いた

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……。けど、一応秘密の話だからね？」

「口外するつもりはない。遠慮なく話してくれ」

「実は瑞希なんだけど……あの子、転校するかも知れないの」

「「なにつ！？」

予想の範囲を越えた話に3人は驚く

普通ならこういう話は教師から話される物なんだが、瑞希が教師にも話してない事を考へると余程深刻な事態に陥つてゐると言えよう

「む。マズイ。明久が処理落ちしかけとるぞ」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「そんな話を唐突にされたら誰だつてパニクるわ！しつかりしろ明日久！お前はまだ生きている！」

白目の明久を揺さぶり、なんとか正気に戻らせた

「やあ将軍……、モヒカンになつた僕でも、味方になつてくれるか  
い…………？」

「…………どう処理をしたら、瑞希の転校から「ひこ」反応が得ら  
れるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしけんの」

「落ち着け。なつてやるから落ち着け」

「どうやらまだ正気には戻りきれてないようだ

「美波！姫路さんが転校つて、どうこいつ事かー。」

「どうせこいつも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃ  
うかもしだれないの」

「ここのままだと…………？」

「恐らくFクラスの環境が原因だろうな。本来姫路は俺と同じように高いレベルにいる筈の人間。それがみかん箱と言つ設備とバカだらけのクラスで勉強してゐるなんて、普通の親なら転校させようと考えてもおかしくない」

「それに瑞希は、身体も弱いから…………」

「そうだよね。それが一番マズイよね…………」

衛生的に劣悪な教室では瑞希じゃなくても体調を壊しかねない

だから喫茶店を成功させて設備を向上させたいのが美波の考えなのだ

「…………アキはその…………瑞希が転校したりとか、嫌だよね…………？」

「もちろん嫌に決まってる！姫路さんに限らず、それが美波や秀吉、將軍であつても…」

明久の言葉に美波が嬉しそうに頷き、將軍は頬を搔きながらほくそえむ

ちなみに本心は、雄一だったらどうでも良いうらしく

「やうこつ事なら、何としても雄一を焼き付けてやるやー。」

「やうじやな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙つておれん

「俺も協力するぜ」

秀吉と將軍も参戦したところで明久は携帯を取り出し、雄一の携帯に電話をかける

「あ、雄一。ちょっと話が  
え? 雄一。今何してるの? 雄一  
! ? もしもしー! もしもーしー! 」

明久が携帯をしまう

「どうした？ なんて言つてたんだ？」

「えっと、『見つかっちゃった』とか『鞄を頼む』とか言つてた」

「…………？ その様子からして、誰かに追われてるみたいだな」

「大方、霧島翔子から逃げ回つてはいるのじゃろう。アレはああ見て異性には滅法弱いからの」

「自分が負けたせいで霧島と付き合ひ事になつたつづのに、逃げ回るとは流石ゴリラの思考だな」

毒を吐く将軍を他所に明久は教室を出よろとする

「おい、連絡が取れないんじゃあ探すのは難しくないか？」

「相手の考えが読めるのは、なにも雄一だけじゃない。秀吉、お願

い出来るかな?」

「うむ。任せとおへのじゅ

「いつまで教室で待たなきやなんねえんだ?」

「そんなの分からない  
あつ、電話。もしもし?坂本?ちよ  
つと待つて。今替わるから

将軍が?マークを頭に浮かべる中、美波が秀吉に携帯を渡す

「……雄二。今どい」

プツッと電話が切れる音

なんと今のは学年首席 霧島翔子の声

「これぞ演劇部のホープと言われる秀吉の特技、声帯模写である

「す、すげえ！今の完全に霧島の声だったぞー？他にも出来るのか  
！？」

「当然だ（将軍の声）」

「おおっ、俺の声まで……明久が絶対に言わない様な台詞とかも  
言えるか？」

「うむ。では 勉強つて楽しいよねー（明久の声）」

「ふっせつせつせつせあー！」すげえ！

秀吉の声帯模写の威力は将軍のツボに入つたよつだ

学園祭はお偉さん  
の筆（前書き）

更新がかなり遅れてしまつて申し訳なく思つています。色々と長篇じ  
たもので……

## 学園長はお偉いさん の筆

「さうか。姫路の転校か……」

場所はFクラス

明久は雄二を連れて美波、秀吉、将軍の3人と合流していた

「そうなると、喫茶店の成功だけでは不十分だな

「不十分? どうして?」

「よく考えてみる明久。『ざとみかん箱つづり貯蔵相な設備は、普通に考えて快適な学習環境とは言えない

「将軍の言つ通りだが、これは喫茶店が成功したら利益で何とかなる

「だったら問題は無いんじや?」

「まだある、この老朽化した教室自体だ。こいつをどうにかしよう

と並ぶなら学校側の協力が不可欠だ

「確かに。業者に頼むしか無いし、それなりに手続きや金が掛かる」

将軍と雄一は淡々と姫路が転校を勧められた理由を説明する

設備は喫茶店の利益で改善出来るが教室はそうはいかない

「そして、レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促す事の出来ない学習環境という面だ」

「これに関しては誰も否定出来ないな。何せ姫路や今更にいるメンバー以外の人間はバカの塊だ」

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「やうじやな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいの」

「そもそもねーよ? 島田が姫路と共に召喚大会で優勝したらFクラスにも学年トップと渡り合える生徒がいるって証明できるんだ。それに喫茶店の宣伝にもなるから設備もどうにか出来る。そうだろ?」

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。どうしても転校したくないから協力して下さいって。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼めたら、ね?」

いつもと違つ優しい表情の美波に明久は一瞬目を奪われる

瑞希と美波が召喚大会で優勝すれば大団円なのだが、將軍は万が一の事を考える

「バックアップ代わりと言つちや何だが、俺と明久も参加しよう

「え? 僕も?」

「一応だ。仮に姫路と島田が負けてしまっても俺達が優勝したら結果は同じだが効果は段違い、2つの方法で何倍も特になる

「なるほど……うん、将軍が味方になってくれるなら百人どころか  
一万人力だよ」

将軍と明久も参戦を決意した事により、一つ田と三つ田の問題は解  
決出来そうだが……

「それはそうと、二つ田の問題はどうあるの？」

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

当然と言わんばかりの態度に将軍の田は見開く

「お前なかなか勇気ある行動を提案するな……学園の最高責任者  
に直訴つて、ヤクザに殴り込みかける様なモンだぞ？」

「平然と斧やら刀やらを人に向ける殺人鬼に言われたくないねえ」

それはもつともである

「でも雄一、僕らが学園長に会つたくらいで何とかしてくれるかな？」

「あんな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とは言え、生徒の健康を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「それを言われたら流石に学園長もOKしてくれるかもしねえな。よしつ。俺、明久、雄一、秀吉で学園長室に行こう。島田は学園祭の準備計画をしといてくれ」

「何故ワシもなのじや？」

「俺と明久は学園の問題児とも言える観察処分者だ。そんな奴らが動物園を脱走した」「リラと共に学園長室に乗り込んでみる。クーデターと間違えられちまつ」

「おー将軍、ちょっとシラクサガハコ」

挑発的な言い分ではあるが否めない

將軍は転校生であつても既に学園中に危険度が認知されている

中には『將軍は織田信長の生まれ変わり』と呟く者も

「俺はそんなに酷い奴に見えるのか?」

「そんな事…………無い」と囁ひよへ。

「何で今一回も間を空けた?」

ちよつと悲しい事実に將軍は涙を流しそうになるが、そんな暇は無い  
いなと言わんばかりに学園長室を手摺して教室を後にした

『…………賞品の…………として隠し…………』

『…………いや…………勝手に…………如月グランデパークに…………』

新校舎の一隅にある学園長室前までやつて来た将軍一行

中では何やら言い争つてゐる声が聞こえてくる

「どうした、明久」

「いや、中で何か話をしているみたいなんだけれど」

「ひむ。言ふに争つてゐる様に聞こえるの」

中に学園長がいる事は確かなのだが、とても穏やかな様子ではない

しかし、今は教室の問題を解決するのが最優先

「無駄足にならなくて何よりだ。さつと中に入るぞ」

「それもせうだな。待つてゐる暇はないとは無い訳だし」

「失礼しまーす！」

「ワシがついてきた意味は無いのではないか……？」

さつきまで学園長室に乗り込む事はヤクザに殴り込みかける様なモノと言っていた将軍も、明久と雄一に続いて学園長室にズカズカと入った

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

室内にいたのは長い白髪が特徴で、試験召喚システム開発の中心人物でもある藤堂カヲル学園長

第一声からガキども言つてる事から、相当規格外な人間らしい

「やれやれ。取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これは話を続ける事も出来ません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園長を睨み付けたのは鋭い目付きとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い竹原教頭だ

教育現場に似つかわしくない単語のオンパレード

学園の経営について語り合っているのだらうか

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなヤツに手を使わなきゃいけないのか。負い目があると詫び訳でもないのに」

「それほどどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「やつから言つてこむよつて隠し事なんて無いね。アンタの見当違ひだよ」

「それで、この場合は失礼をねじ頂きます」

学園長室を出る際、一瞬部屋の隅に視線を送ったのを将軍は疑問に思いながらも見逃せなかつた

「今日は学園長にお話があつて来ました」

「アタシは今それどいつもじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

こんな横柄な婆さんに礼儀を説かれるなんて世も末だ。と心の中で思う将軍と明久だった

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄一」

「同じくF組の木下秀吉と申す」

「それでこいつが 二年生を代表するバカ一人でグハツ」

人をコケにするような紹介に腹を立てた将軍は、雄一の頬にエルボーを入れた

「普通に名前を言えやボケが」

「ほう……そーカー! アンタ達がFクラスの坂本と吉井、そして木下と将軍かい」

「ちょっと待って学園長ー僕達はまだ名前を聞いてませぬねー?」

「気が変わったよ。話を聞いてやるひじやないか

「俺や明久の話は聞かないのか」

明久の言ふと將軍のシッコリを無視して口の端を吊り上げる学園長

こんなババアでも一応学園の最高責任者である

「あつがとうござます」

「礼なんか言づ暇があつたらひじやと話しな、ウスノロ」

「分かりました」

口汚く罵倒されているにもかかわらず、雄一は落ち着いた態度と運動を保つて話を進める

「Fクラスの設備について改善を要求しにきました」

「そうかい。それは暇うつで羨ましい事だね」

この時点で既に将軍は懐に手を入れる準備をしているのに大した奴だと感心してしまう面々

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

『あ、言動が綻び始めた』

「学園長の様に戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今

の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

『戦国時代から生きているなら歳500年だぞ。流石に人として死んでるだろ』

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるか、わざと直せクソババア、と言つ駄です」

ようやく雄一の話が終わつたが、学園長は思案顔になつて黙り込む

これだけ無礼な説明の仕方に腹を立ててもおかしくはない

「あの、学園長……？」

「今の無礼に怒つたならば謝罪致す。じゃから、どうか話だけでも聞いて」

「……ふむ、丁度いいタイミングだね……」

一瞬小声で何かを呟いた学園長は、将軍達の方に顔を向き直す

「よしよし。お前達の言いたい事はよく分かった

「え？ それじゃ、直してもらひやんですねー。」

「却下だね

教室改善の話はバツサリと断られた

「雄一、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよつ

「待て明久。こんなシワクチャの老婆を捨てたら環境破壊が促進されちまう。ここは燃やして灰にして枯れ木にばら蒔いて花を咲かせた方が世の為だ」

「明久に將軍、お前らもつ少し態度には気を遣え

「……お主が言えた台詞ではないぞい」

次々と本音が漏れ出す3人に對して突つ込む秀吉

「將軍は学園長に頭を下げて学費の支払いを延期してもらつたのだが、  
もう二二二二まで言われたら我慢など出来る筈もない

「全く、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「正当な理由を聞かずに引き下がれませんよ、クソ妖怪ババア」

「…………お前達、本当に聞かせてもらいたいと思つてるのかい？」

「…………申し訳ない」

笑顔でババア呼ばわりしてゐる3人の横で頭を下げる秀吉

ババア

もとい、学園長が呆れ顔で将軍達を見る

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちらいガキども」

「ちつ、確かにそれはもつともだが、このままだと虚弱な生徒が倒れて」

「……と、いつもなら言つているんだけどね。可愛い生徒の頼みだ。」ちりの頼みも聞くなら、相談に乗つてやるつじやないか

学園長が交換条件の案を提示してきた

ただで話を聞くつもりは無い様だが、今の明久達にとつては棚からぼた餅の話だ

しかし、雄一は何の反応もせずに口元に手を当てる何かを考えている

「その条件つて何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ。俺と明久で出場しようと思つてたところですよ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「え？ 優勝賞品？」

「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと白金の腕輪、副賞には如月グランドパーク プレオープンプレミアムチケット。あと準優勝者には黒金の腕輪が用意してあるのさ」

文月学園は特異な学園方針と試験召喚システムによつて多くの企業から注目を浴びている

如月グループもその内の一つであつた

因みに隣では雄一がペアチケットと並んで言葉を聞いてペクッとした

していた

「はあ……。それと交換条件に何の関係が

「話は最後まで聞きな、慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「はい、知りません」

「堂々と答えるものではないぞい…………」

「優勝賞品のペアチケットなんだけど、ちよつと良かりぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

「回収？それなら、賞品で出せなかよ良こじやないんすか？」

「そう出来るならしてこるさ。さぶね、この話は教頭が進めたとは言え、文用学園として如月グループと行つた契約だ。今更覆す訳にはいかないんだよ」

「「契約する前に気付いてください」とよ。学園長なんだから」

将軍と明久のツツコミが見事にハモる

「つむさーいガキどもだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「それで、悪い噂と聞つのはばどのよつな物なのじや？」

つまらない内容である事を前置きして学園長が口を開く

「如月グループは如月グランドパークに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカツプルは幸せになれる』っていうジンクスをね」

「？それのどこが悪い噂なんですか？」

「そのジンクスを作る為に、プレニアムチケットを使ってやつて来たカツプルを結婚までコーディネートするつもつらしき。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、何だと！？」

突然雄一が大声を上げた

将軍は隣に位置していた為、鼓膜に微量のダメージ

「どうしたのさ雄一。 そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろ！ 今ババアが言つた事は、『ブレオーブンプレミアムチケットでやつて来たカツプルを如月グループの力で強引に結婚させる』って事だぞ！？」

「別に言い直さなくとも分かつておるぞ？」

「なるほど。 そのカツプルを出す候補に、この文月学園を選んだつて訳か」

耳を擦りながら将軍は如月グループの口論見を把握した

「くそつ。 うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムといつ話題性もたっぷりだからな。 学生から結婚までいけばジンクスとしては申し分ないし、如月グループが口をつけるのも当然つて事か」

「それにそのジンクスが巷に広まれば、如月グランドパークは大勢の客を引き付けられるし企業利益もアップする。まさに一石二鳥だ」

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか。それと将軍って言つたかい？アンタも編入試験トツプは伊達じゃないね」

学園の最高責任者だけあって彼らの事はそれなりに知つてゐるようだ

「雄一、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知つているんだから、行かなければ済む話じやないか」

「…………絶対にアイツは参加して、優勝を狙つてくる…………。行けば結婚、行かなくても『約束を破つたから』と結婚……。俺の、将来は…………！」

「こつたこどうしたと聞つのじや？」

「霧島に『チケットを手に入れたら一緒に行つてやる』って安請け

合いでもしたんじやねえの？約束を破つたら結婚してもいいとか言  
われて。もしそうならただのバカだな」

からかいつ様に言つた将軍を雄一はゆっくりと向いて睨み付ける

「…………テ・メ・エ・ガ・シ・ク・ン・ダ・ノ・カ？」

「当たつてんのかよ」

図星だつた事に将軍は苦笑い

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、つちの可愛い生徒の  
将来を決定しようつて計画が気に入らないのさ」

「つまり交換条件つてのは

「

「そりゃね。『召喚大会の賞品』と交換。それが出来るなら、教室  
の改修くらいしてやるついでないか」

つまり優勝賞品を手に入れば良いと考えた明久と將軍は、互いにアイコンタクトで優勝賞品の強奪を計画しようとしたが

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじやないよ。譲つてもらつのも不可だ」

先読みされ阻止された事により強奪作戦はなしとなつた

「……僕達が優勝したら、教室の改修と設備の工場を約束してくれるんですね？」

「何を言つてゐるんだい。やつてやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ。ただし、清涼祭で得た利益で何とかしようつて言うなら話は別だよ。特別に今回だけは目を瞑つてやつても良い」

本来なら自分達でお金を出して設備を変える事すら許されないので、取引に応じている為許可してくれた

「つ～む。喫茶店をしながら大会で優勝しなければならないとは結構キツいのう

「確かにキツいと言つちやキツいが、取引に応じなければ教室の改修は白紙になつちまつ。話を聞いてくれただけでもラッキーなんだからよ」

「それじゃ交渉成立だね

「ただし、こりからも提案がある」

「なんかい？言つてみな

話がまとまり、教室に戻ろうとした寸前で雄一は学園長に話しかけた

「召喚大会は一対一のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学と言つた具合に進めていくと聞いている

学園の宣伝行事であるから、なるべく派手にした方が効果がある

試合毎に科目を変更するのは試合や来賓を白けさせない為であろう

「それがどうかしたかい？」

「対戦表が決まつたら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ……。良いだろ？ 点数の水増しとかだつたら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

雄一の目付きが鋭くなつた事に明久と将軍は少し気になつたが

「で、ペアはどうする？ 僕と明久が組めば良いのか？」

将軍が召喚大会のペア決めと言つ話題に変更してきた

「いや、秀吉は前回の試合戦争では指揮や裏方しかやっていないし、俺は一度も召喚した事がない。付き合いの長さから考えて、俺が明久と組む方がベストだ」

「となると、ワシは將軍とペアになるのじゃな

すんなりと自動でペアが決まった

「わい。やここまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝出来るんだ  
わいね?」

「無論だ。俺達を誰だと思つていい?」

「今の俺達には負ける氣がしねえよ」

「絶対に優勝して見せます。そつぱん、約束を忘れないよ!」

「ワシも全力を尽くすわ!」

「それじゃ、ボウズ共。任せたよ」

「「「おつよつー。」」」

「承知した！」

ついして、明久&秀吉の『文月学園最低コンビ』

將軍&秀吉の『狂乱武将に捕らわれた美少女コンビ』が誕生する事になった

## 清涼祭スタート！（前書き）

更新速度が遅れている事に関して謝罪致します。

## 清涼祭スタート！

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどうのよひに選ぶべきですか？

「？可憐らしさ　？統率力　？行動力　？その他（ ）」

また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

「？可憐らしさ　候補……姫路瑞希&a mp;島田美波」

教師のコメント

甲斐つけがたいと言つたところでしょうかね。

吉井明久の答え

「？可憐らしさ　候補……姫路瑞希（訂正）木下秀吉（訂正）  
島田美波」

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

### 将軍の答え

「?可憐らしく 候補……木下秀吉（訂正）姫路瑞希? & amp;

島田美波？」

### 教師の「メント

何回も書き直した跡がある上に、何故?マークを付けるのですか。

### 坂本雄一の答え

「?その他（結婚相手） 候補……霧島翔子」

### 教師の「メント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

### 清涼祭初日の朝

Fクラスの教室はいつも小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店

に姿を変えていた

「ここのテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

「ああ、流石は演劇部だ」

「ま、見かけはそれなりの物になつたがの。その分、クロスを捲るところの通りじや」

教室内の至る所に設置されているテーブルの正体はみかん箱

積み重ねてテーブルクロスをかける事で立派なテーブルへと変身を遂げたのだ

その内の一つのクロスを捲る秀吉

そこには汚いみかん箱が顔を出した

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとし

ても見なかつた事にしてくれると想ひよ

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールする様な人は来ませんよ、きっと」

「そうだな。そんな事する奴がいるとしたら営業妨害が目的としか思えねえ。もし仮にやつてきたら、俺がここに転校してくる前に知り合つた便利な後輩達を呼んで、そいつらを人気の無い場所に埋めてもらひう」

「ダメだ将軍！僕は友人から犯罪者を出したくない！」

危険な武器を携帯している時点で危ぶまれるのだが、そこはスルーした

「…………飲茶も完璧」

「おわッ」

「おつムツツリーー。厨房の方はOKか？」

「…………味見用」

ムツツリーが木のお盆を差し出した

その上にはライーセットと胡麻団子

「わあ……。美味しい!」

「土屋、これウチらが食べちゃつていいの?」

「…………（ノクコ）」

「では、遠慮なく頂こうつかの」

そう言つて3人は作りたての胡麻団子を勢い良く頬張る

「お、美味しいです!」

「本当!表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし!」

「甘過ぎない」といつも良いの!」

「やつぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、3人とも」

明久の言葉に一ヶ所おかしな点があつたが、将軍は気にする事なく頷く

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

胡麻団子の美味しさに2人はトリップ状態となつた

「それじゃ、僕も貰おうかな」

明久が残つた胡麻団子を手に取り一口

「ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘過ぎず辛過ぎる味わいがとってもンゴパつ！」

口から有り得ない音を発して豪快に倒れた

「あ、それは姫路が作ったものじゃな」

「秀吉！見たなら最初に言つとけよ！明久の口から変な色の泡が吹き出してんじやねえか！」

急いで將軍が救命措置（と言ひ名のギロチンドロップ）を施し、明久は三途の川から無事に生還

「おい姫路、この胡麻団子なんだが……いつたい味付けには何を入れた？」

怒りを孕んだ視線で瑞希に殺人胡麻団子の詳細を聞く將軍

彼は一人暮らしの為か料理はシェフ並みの実力を持っている

それ故に料理には少し煩い

「別に変な物は入れてませんよ？隠し味に硫酸を入れただけです」

硫酸……無機酸の一つ。金・白金以外の多くの金属を溶かす

將軍は臆面もなく危険薬品混入発言をした瑞希に絶句

「姫路、料理に薬品は使わんぞ」

「え？ 将軍君は使わないんですか？」

「俺だけじゃなく全ての料理人が薬品なんぞ使わんわ！」

「將軍落ち着いて！ 懐から何かを取り出そうとしてる手を引っ込むんだ！」

あまりのイライラに將軍は自作武器を取り出しちゃった

危険を察知した明久は將軍の手を掴んで制止させる

「うーっす。戻ってきたぞーって、何やつてんだお前ら？」

そこへ雄一が戻ってきた

「あ、雄一。おかえり。今ちょっと将軍が暴走しかけて」

「ん?なんだ、美味そうじやないか。どれどれ?」

「雄一は躊躇いなく”明久の食べかけ”の胡麻団子を口に運んだ

「……たいした男じゃ」

「雄一。君は今、最高に輝いてるよ」

「お前の勇猛さに敬礼……」

「?お前らが何を言つているのか分からんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘過ぎず辛すぎる味わいがとつてもンゴパッ!」

デジャブ発生

「明久、今度姫路に料理のイロハを叩き込んだ方が良いと思つが

「これ以上変な方向に進まないか心配だけどお願ひするよ。刹那と

なつちやんにも援護を頼んでおいた方が良いかな……？

将軍と明久が小声で瑞希のバイオ兵器改善計画を立てていると……

「ふつ。何の問題も無い。あの川を渡ればいいんだろう?」

「ゆ、雄二ーーその川はダメだ！渡つたら戻れなくなつちやんーー！」

「つか今の一口で致命傷にまで至るのか！？」

雄一は三途の川を渡りかけていた

明久は急いで心臓マッサージを施す

「六万だと？バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まって  
はつ！？」

何とか蘇生に成功した

これ以上めんどくさい事態に巻き込まれるのは嫌だと将軍は話を逸

「う

「……何で、今まで何していたんだ？」

「あ……ああ、ちょっと話しかけにな

本当は学園長室に行って試験科目の指定をしてきたんだが、バレると厄介なので適当に誤魔化す雄一

「そうですか。それはお疲れ様でした」

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バツチリじや」

「……お茶と飲茶も大丈夫」

『姫路作のバイオ兵器が混ざっていなければ完璧だろうな』と心の中で呟く将軍と明久

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉と将軍、ムツツリーに任せせる。

俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな

「あれ？ アンタ達も召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あつてね」

「俺と秀吉も出る？ まあ一回戦は俺達の方が後だけじ

将軍と明久は言葉を濁すよつた返答

学園長から『チケットの裏事情については誰にも話すな』と口止めされてる故に下手な事は言えない

「え？ 吉井君と坂本君がペアなんですか？」

「ああ。前回の試験召喚戦争じゃ雄一と秀吉は殆ど召喚していないから、俺達はフォロー役

「もしかして、賞品が目的とか…………？」

「うーん。一応そういう事になるかな

正確には賞品と設備の交換である

優勝賞品の白金の腕輪は召喚獣を2体同時に呼び出す「同時召喚型」、立会人になれる「代理召喚型」がある

準優勝賞品の黒金の腕輪には白金の腕輪と同じ「代理召喚型」、そして消費した点数によって武器を変えられる「装備変更型」の腕輪が贈呈される

「……誰と行くつもり?」

「ほえ? な、何で目が攻撃色に…?」

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思つていたんですか?」

美波だけでなく、いつの間にか瑞希まで戦闘モードに入っていた

おそらく2人が言つてるのはペアチケットの事だ

「だ、誰と行くつもりって…………（何とかして将軍…）」

明久は2人には見えないよう指で将軍に助けを求める

将軍は何とかしてやがて頭を回転させる

すると、ものの数秒で良い」アイティアが浮かんだ

「勘違いするな姫路に島田。俺達のどちらかが優勝してもペアチケットはある人に売るつもりだ」

「ある人って誰よ？」

「霧島翔子」

将軍の一言で雄一はこの世が終わるみたいな形相となつた

「ちよつ、待て将軍！何を言つてグゲツ！」

「ペアチケットは霧島に売るんだよな明久」

「え？……あ、うん、そうだよ。僕だとそういう相手はいないし、持つても意味が無いからや。霧島さんにあげるんだ」

雄一の口を掴んで黙らせた將軍はすかさず明久にペアチケット売買の話を振り、明久もその話題に合わせる

因みに瑞希と美波は、明久が如月グランドパークに行く気が無い事を聞いて安心しつつも落胆

話が終わつたところで雄一は將軍の握力から逃げ出した

「おいコラ将軍！テメエ俺の人生を何だと思ってやがるつー？」

「はつ？お前の人生つて何か貴重なモンなの？」

「あ、そろそろ一回戦が始まっちゃう。ほら行くよ雄一

「ぐ、ぐそつー覚えてろーいつか殺してやるー

小悪党みたいな台詞を吐き捨て、明久と雄一は試合会場に向かつて  
いった

「つて、よく考えたら俺達もすぐ試合だつたな

「やうじゅのわ。コシラサエとじゆつか

試合会場に行く為、教室を出ようとしたら後ろから襟首を掴まれてしまひ

「あのつ、何すか？」

「ねえ、さつあペアチケットを売るつて話したわよね？」

「こくらで譲つてくれますか？」

優しい口調ではあるが、瑞希と美波の田には尋常じゃない何かが宿つていた

その気迫に将軍の「メカミから一筋の汗が垂れる

「ま、まあ俺達が優勝しないとチケットの売買は出来ないから、なるべく考えておく

「本當？絶対よ？」

「約束してくださいね？」

将軍は「クククと頷いてから秀吉と共に教室を抜け出した

『危ない奴は俺だけじゃないのか……』

将軍は親近感に近い何かと複雑な気分を感じさせられた

清涼祭スタート！（後書き）

なるべく更新を早める様努力しますので応援お願い致します。

営業妨害する奴に容赦はするなー（前書き）

更新速度を早める様にすると言つたのにこの有り様……ホントに申し訳ありません

**営業妨害する奴に容赦はするな！**

校庭に作られた特設ステージ

「」で召喚大会一回戦が行われる

明久と雄一はDブロック、将軍と秀吉はBブロックで試合を進めていく

一応この一組が決勝で当たる様に学園長が配慮したのだ

「三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

一回戦の科目は数学

将軍はAクラスレベルの学力を持つてるので余裕が混じった表情をしていた

「秀吉。一回戦は練習みたいなモンだから先に戦死しても気に病むなよ」

「分かっておるが、ワシの点数じゃとあまり力になれんかもしけぬ

少々自信無さげな秀吉と正反対の將軍の前に対戦相手のチームがやつてくる

「あれ？アンタらはBクラスの……確かに下と菊入だつたっけ？」

「良かつた……名前覚えられてる……」

意中の相手が名前を呼んでくれた事により下と菊入は顔をトマトイみたいに真っ赤にした

「が、頑張りうね律子」

「うそ！」

「相手がBクラスとなると厳しいの！」

「実際は向こういつも秀吉と回しよつに操作慣れしていない。条件だけで言つながら」つちが有利だ

観察処分者の將軍は明久と同じく召喚獣の操作には慣れている

殆どが実戦で培われたが、観察処分者にのみ課せられる雑用もこなしているからである

「では、召喚してください」

「「サモン・!」」

Bクラス 岩下律子&amp;菊入真由美

数学 179点&amp;163点

岩下と菊入は前にも見たハンマーと金屬棒を装備した召喚獣を呼び出した

「じゃあ俺達も、サモン・!」

「つむ、サモン・!」

## 現れた將軍と秀吉の召喚獣

漆黒の鎧に身を包み、ノコギリ刃の剣と2本の銃剣を持つ將軍の召喚獣

薙刀に袴と言つた古風な装備をした秀吉の召喚獣が対戦相手に向かって構えの姿勢を取る

Fクラス 將軍&amp;木下秀吉

数学 368点&amp;76点

「あのつ、將軍君！」

「ん？ 何だ？」

「私達、まだ諦めません。だからこの試合に勝つたら……どちらか選んでくれませんか？」

「アンタらもなかなか粘りますねえ……まあ、俺に勝てたらの話だがな」

將軍は2人の気迫に押し負けたのか、渋る様に交際約束を了承

岩下と菊入はより一層氣合いが入る

「明久もそうじゃが、お主も大変じゃのう」

「のんびりお喋りしてる暇は無いぜ？来るぞ」

前を向いてみると、敵召喚獣が武器を振り下ろしてきた

將軍は左に、秀吉は右に召喚獣を横つ飛びさせて攻撃を回避

そこから岩下は將軍の、菊入は秀吉の召喚獣を追い掛ける様に跳ぶ

「えいっ…やあっ…」

「むっ…はあっ…」

菊入の召喚獣の攻撃を回避しながら秀吉の召喚獣が攻撃をくらわせ

ていく

動作は双方共にぎこちないが、まあまだなと将軍は内心評価する

「えいっ！えいっ！」

「そんな大振りの攻撃、目を閉じても避けられるぜ」

岩下の召喚獣のハンマーを素早い動きでかわし、アクロバットな動作も披露する将軍

鎧を装着しているにも係わらず軽快にジャンプ

時には捻り回転も加えたりと大技を繰り出すが……

「あつ」

「えつ？」

ボヨヨンッ

將軍の召喚獣が岩下本人の胸にしがみつく様な形で着地

更に観察処分者設定な為、その感触は本人にも伝わってしまう

「…………！（汗だく）」

「だ、ダメーーっ！！」

「（バチンッ！）平手いっ！」

余程恥ずかしかったのか、岩下は將軍の召喚獣に力一杯ビンタ

観察処分者特有の物理干渉能力はポヨヨンの感触だけでなく痛みも  
フィードバックされる

將軍の頬にもその衝撃と痛みが走り、勢い余つて顔面から地面に倒  
れてしまった

「痛い…………フィードバックも地面も痛い…………！」

「お主は句をやつておるの、じや……」

「直接呴こひやダメよ律子ー。」

「『めん真由美ーでも、おっぱに触られひやつた……』

召喚獣ーことは言々女性の胸を触つてしまつた将軍は立ち上がりて即座に移行

何とか許してもらひ試合を続行させる

「ある程度の痛みが反映されるのは聞いていたが、まさかここまで痛いとは……悪いが速攻で決めさせてもらひつー。」

高得点を活かしたスピードで相手を翻弄しながら接近し、敵召喚獣の身体を剣で貫く

その直後に背中に背負つた銃剣を一本、菊入の召喚獣に投擲

隙が出来た事で秀吉の薙刀が相手を切り裂いた

「勝者、将軍・木下ペア」

立会人の教師が勝者の名前を告げ、一回戦は無事終了（将軍以外）

「「また負けちゃった……」」

「これも一応勝負なんでな。すまない」

「結局最後は助けられてしまったの？」

「これからだよこれから。早いトコ教室に戻るぞ」

「まったく、責任者はいないのかー」このクラスの代表ペッパー

「私が代表の坂本雄一です。何か」不満な点でも御座いましたか？」

教室に入るや否や、雄一が客の一人らしき坊主を殴り飛ばしている

のが将軍達の目に入った

明久達の相手はEクラスのペアで、危なげ無く勝利したから先に教室に帰還していた

将軍は現状を知りたいが為、明久から話を聞き出す

話によるとクロスで覆い隠したみかん箱が気に入らなかつたらしく、態々それを剥がして文句を言つていた

確かに食べ物を扱う店に相応しくないと言つ事は理解できる

だが、あれは明らかに営業妨害が目的としか言えない

「しかも3年かよ。俺達生徒の中じゃ一番大人のくせに」

「まづいのう。この悪評は経営に響くぞい」

「あ、秀吉。丁度良かつた、雄一から伝言なんだけど」

明久から雄一の伝言を聞かされた秀吉は教室内のクラスメイト数名

に声をかけて教室を出た

その最中、雄一は『キックでつなぐ交渉術』でもう一人の男、ソフトモビカンを蹴飛ばしていた

その前が『パンチから始まる交渉術』らしい

「しかし、クレーム処理の仕方がなってねえな雄一は

「いや、あれでも充分だと思つけど」

「俺が手本を見せてやる、と将軍は雄一の所へ歩み寄る

「代表。この場は交渉人の私、ネゴシエーター・将軍にお任せを」

「そうか。なら任せよう」

そう言つて雄一は一步下がり、将軍はまず丁寧にお辞儀

「只今より代表に代わりまして、ネゴシエーター・将軍が交渉を務めさせて頂きます」

「いて……ほ、少しは話が通じる奴が出てきたか。そこのクズ代表に代わってこの始末をつけ『ピヤアツ！』

相手が変わった事で強気になつた坊主は将軍の飛び膝蹴りで吹っ飛ばされた

「おい！お前も話を聞く前に相手を殴つたり蹴つたりするのか！？交渉はどうしたあー？」

「いえいえ、今のは代表と同じ様に私がモットーとしている『飛び膝蹴りから始まる交渉術』にござります」

将軍の交渉術は雄一よりもアグレッシブだった

「ふやけんなー！これのどいが交渉術グベアツ！」

「そしてこちらが『掌底でつなげる交渉術』です。最後は『代表とのスーパーラトン技でお帰り願う交渉術』が控えていますが、どうされます？」

「わ、分かったー！こちらは夏川を交渉に出そう！俺は何もしないか

「ちよ、ちよっと待てや常村！お前俺を売られたと言つのがー…？」

「ちよ、ちよと待てや常村！お前俺を売られたと言つのがー…？」

坊主は夏川、モヒカンは常村と名前が判明

明久は言いにくいから夏坊主、常モヒカン

雄一はまとめて常夏コンビと命名した

「それで坊主川とモヒ村。まだ交渉を続けるか？（雄一にアイコンタクト）」

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらひ」

将軍の殺氣に気圧されたモヒ村（笑）は撤退準備

因みに将軍が命名した坊主川とモヒ村の名前に明久は必死に笑いを堪えている

「そりゃ。それなら

」

小さく頷いた直後、雄一が坊主川（笑）の腰を抱え込み、將軍が懷から特殊カーボン製のナックルを装備して拳をモヒ村（笑）に向ける

「おい！俺もう何もしないよな！？どうしてそんな大技をげぶるあつ！」

「俺達退散するって言つたぞ！？何でそんな武器をほべばあつ！」

「これにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めた雄一が平然と立ち上がり、昇龍拳を決めた將軍がナックルをしまう

『あの2人が組んだらとてもなく恐ろしいコンビになる……』  
と、明久は恐怖を感じざるを得なかつた

「お、覚えてるよっ！」

モヒ村が倒れた坊主川を抱えて走り去つていき、一つの問題は片付いたのだが……

「流石にこれじゃ、食つていいく氣はしないな

「折角美味しそうだつたんだけどね」

「食つたら腹壊しそうだからなあ」

もう一つの問題が発生

クロスの中のみかん箱を目の当たりにし、一人目が席を立つ

『ん？ 竹原教頭？』

將軍は竹原教頭の姿に疑問心を抱くも、今は余計な事を考えている場合ではない

一人目が立つと次々と客が席を立つてしまう

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたので、暫定的にこのような物を使ってしまいました。ですが、たつた今本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい」

客に頭を下げる雄一の後ろ、秀吉とクラスメイト数名がテーブルを運んできた

演劇部で使っている大道具のテーブルなので風評対策としては良しだ

「あれ？ テーブルを入れ替えてるの？」

「あ、おかげり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」

「はいっ。なんとか勝てました」

笑顔で丶サインをする瑞希

これで試合の方は心配ない

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせて頂きますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、  
ごゆっくりとおくつひを下さい」

締めの言葉を残して雄一は明久達のいる廊下に出た

「雄一、どうなつてやがんだ？たかが学園祭の喫茶店で営業妨害されるのはおかしいだろ」

「確かにそうだが、今は他のテーブルを手に入れる事が先決だ」

「何か宛てでもあるの？」

雄一は口の端を吊り上げて悪役顔負けの笑みを浮かべ、明久と共にテーブル調達に向かつた

ヴィーーっ！ ヴィーーっ！

突然将軍の携帯が鳴った

開いて相手が誰なのか確認すると『非通知設定』と表示されていた

ピッ！

「もしもし？…………っー？」

「どうしたのじゃ将軍？顔色が悪いぞ？」

「んにやつ、何でもない。ちょっと古い友人からの電話だからビックリしただけだ。ここだと邪魔になりそだから向こうで話してくれる」

最初は曇んでしまったが何とか平静を取り繕い、將軍は邪魔されないようトイレに向かう

「何故この携帯の番号を知っている？番号は変えた筈だぞ…………！  
？何の用だ？ ふざけんな！お前らとはもう縁を切ったんだ  
！何を今更…………っ！？今何処にいるんだ……！？ 分か  
つた。だが時間をくれ。学園祭が終わった後で必ず電話する。それ  
までここや俺の知人には手を出すな…………！」

將軍は乱暴に携帯電話を切り、トイレのドアを拳で叩いた

「過去からは逃げられないのか…………っ！」

営業妨害する奴に容赦はするな！（後書き）

将軍の電話の相手は誰なのか……？終盤辺りで明らかになると思いま

## 10連続で100連コンボ！？

召喚大会一回戦

将軍と秀吉は走って試合会場に向かっていた

原因是将軍が先程の通話終了後に暫く考え込んでしまい、それを秀吉が呼びに来た為である

「まつたく。試合に遅れて負けてしまつては洒落では済まされぬぞ？」

「いやあ悪い悪い」

走りながら謝罪する将軍の顔は先程とは正反対と言える位正常な物だった……が、秀吉は『何かあったのじゃな?』と感付いていた

演劇部のホープは伊達ではなく、将軍の取り繕いを見抜いたが……大事な試合に支障をきたしてはならないと気を遣つて黙認する

試合会場に到着すると、明久達の試合が先に開始されていた

相手チームはBクラス代表根本恭一とCクラス代表小山友香のペア

科目は英語

各自の召喚獣の頭上に点数が表示される

Bクラス 根本恭一&amp; Cクラス 小山友香

英語W 199点&amp; 165点

「流石はクラス代表と言つた点数だな。んで、明久と雄一は

Fクラス 坂本雄一&amp; 吉井明久

英語W 73点&amp; 59点

「うん。普通に殺り合つたら負ける」

「以前明久に勉強を教えたのではなかつたのかの?」

「俺が教えたのは日本史だけだよ。その内本格的に勉強を教えるけど。まあ、あの余裕そうな顔からして大丈夫だろう」

「何故じゃ？」

「一回戦の相手には細工は出来ず、一回戦の相手には細工が出来るから勝算があるって事だ」

『そ、それは……………』

根本が焦りを交えた顔をしているのが目に入る

雄二の手には門外不出の根本恭二個人写真集「生まれ変わったワタシを見て！」（脛毛処理済み）」が握られていた

「あの写真集、相当出来が良かつたらしきぞ。俺が奴の脛毛を剃つただけに

「うっふ……氣分が悪くなってきたのじや……」

おそらく写真集に載っている根本の両足は完全な不毛地帯となつて

るだらつ

「さて根本君。この写真集をバラ蒔かれたくなかったら

「おこおこ明久。交渉の相手が違つたぞ？」

「え？ そいつなの？」

交渉の相手が根本じやない事に将軍は耳を疑つ

雄一は将軍に気付いていたのか、手で小さく動かしてこいつへ来て指示

将軍は訳が分からぬまま雄一の元へ

「何だ雄一？」

「こいつを……こ……るんだ」

「分かつた」

雄一から言われた通り写真集を持つて一步前に出た将軍

「えっと、Jクラス代表の小山だつたっけ？ちょっと良いか？」

「あなたが将軍君ね。何かしら」

将軍は一旦雄一の方を向き、雄一は無言で小さく頷く

やれと言ひ合図であつ

「チラリズム（1ページ目を捲る）」

「さ、坂本！分かった！降参する！だからその写真だけは…………！」

この瞬間、明久と雄一の勝利は確定したが更に追い打ちをかける

「明久、根本を押さえろ」

「ん、了解」

「よしよし。さて、Cクラス代表。この写真集が見たかったら、俺達に負けるんだ」

「ち、坂本つーお前は鬼か！？」

「鬼じゃない。こいつは外道だ」

将軍の「雄」は外道」発言を無視して交渉を続ける雄一

「……いいわ。私達の負けよ」

「交渉成立、だな」

今のはただの悪役だが、相手が相手だけに情けをかける必要はない

「んじゅ小山」。プレゼントフォー・ユー

「ゆ、友香！？頼む！見ないでくれ！」

根本の懇願も虚しく、小山は写真集を開いた

「明久。勝負はついた。喫茶店も気になるし、戻るぞ」

「そうだね。將軍、また後で。遠藤先生、僕らの勝ちといふことで

「あ、はい！坂本君と吉井君の勝利です！」

これで文月学園最低コンビは三回戦進出を決めた

「…………別れましょ」

「ちよ、ちよっと待つてくれ！これには事情がある……」

「秀吉。俺、目の前で人に天罰が下るトコ初めて見た」

「あれは流石に同情するのう……」

『將軍君、木下君。試合が始まりますので指定の場所に着いてください』

そこへアナウンスが流れて2人は早足で指定場所に向かう

息を少し切らしてやつて来た将軍達の次なる相手チームは

「あつーー！」の間のブタ野郎！』

「あつーー！」の前のドリル！』

清水美春とDクラス女子のチームだった

「誰がドリルですか！以前はよくも美春とお姉様の濃密な愛の時間を邪魔した上に、美春の純潔を汚してくれましたね！あなたの死をもって償つてもらいます！」

「ちょっと待つた！前者は何となく覚えはあるが後者は何…？純潔を汚した…？俺そんな事してねえよ…！」

「将軍。お主はいったい何をやらかしたのじゃ……？」

「秀吉つ、そんな性犯罪者を見る様な目で俺を見るんじゃねえ！俺は無実だ！冤罪だ！」

「黙りなさいブタ野郎！ 美春ははつきり覚えていますー下劣なブタ  
野郎の手が美春の胸を汚しながら地面に叩き付けた忌まわしき口を  
！」

「ん？ 地面に叩き付けた……？」

将軍は思い当たる口を全て振り返つてみる

ふと思い浮かんだのはロクラス戦終了後の昼食時

あの時、将軍は清水美春にジャーマンスープレックスをくらわした

「あつ、あれ？ 腹かと思ってた」

「死になさいブタ野郎！」

清水美春は将軍にフォークやカッター等の凶器を投げ付ける

だが、将軍は様々な凶器を所持しているので……

「生温い。」

……今日は三節棍（特殊カーボン製）で飛来してきた凶器を打ち落とした

「お主は懷に幾つの武器を隠しておるのじゃ？」

「本気を出せば1000個くらに入れんが」

多すぎである

「あの~。そろそろ試合を始めてもらいたいよなじこですか？」

見るに見兼ねた立会人の教師が試合開始を促す

そして4人の召喚獣が展開される

Dクラス 清水美春&amp;玉野美紀

英語W 121点&amp;108点

VS

Fクラス 将軍&amp;木下秀吉

英語W 394点&amp;78点

「もう少しで腕輪が付いたんだけじゃなあ

「それでも破格の点数じゃぞ」

「そだな。じゃ、いつちよ殺つてやるか！」

将軍の召喚獣は右手に剣、左手に銃剣を持って構えを取る

一方、向こうはオーソドックスな鎧と剣を装備した美春の召喚獣と弓道着に矢と古風な装備をした玉野の召喚獣

「将軍。あなたは確か吉井明久と同じ観察処分者でしたね……召喚獣を痛めつけられ、その痛みはあなたにも反映される。つまり、美春はどんなにブタ野郎を攻撃しても文句を言われる事はありません！…よつて覚悟して死になさい！」

「死ぬのは嫌だ」

将軍の相手は強制的に美春になってしまった

その上、攻撃を受ければファイードバックで本人にも痛みがやつてくれる

なので今回は極力攻撃を受ける訳にはいかない（正確には受けたくないだろ？）

「お姉様への愛の為に生け贋となりなさい！」

「やなこった！」

将軍の召喚獣は相手の剣を必要最小限の動きでかわしていく

距離を取つたら銃剣で撃ち、逆に詰めできたら接近戦と切り替えていく

「この卑怯者！逃げてないで潔く美春に殺されなさい！」

「相手の意図が分かつてゐる以上、素直に従う程俺はバカじゃないんですね」

猪みたいに荒ぶれながら攻撃を仕掛ける美春の召喚獣

将軍はヒット & amp; アウェイで相手の点数を徐々に削り取つて  
いく

「ワシらは完全に蚊帳の外じゃの」

隣では秀吉が玉野と戦闘を行つていたが、最早メインは将軍 vs 美春の方だった

將軍が『今回も楽勝かな』と氣を緩めたその瞬間、頭を掴まれた様な感覚が……

「ふふふつ。捕まえましたわブタ野郎！」

「おい」「ハー何しやがる！？召喚者が戦闘に参加するのは反則だぞ  
つ！」

「黙りなさい！あなたが大人しく殺されないのが悪いんです！このまま串刺しなって死になさい！」

「ふざけんな離せーって、何でこいつ召喚獣より力強いんだ！？全然離れねえ！」

本来召喚獣の力は一桁代でもゴリラ並みの力を持つているから普通の人間では敵う筈も無いんだが……将軍の召喚獣は頭を掴まれたままジタバタと足掻く事しか出来なかつた

「んならおつ、もつあつたま來た！お前がその氣ならこいつちだつて手加減しねえ！怪我しても知らねえぞオラアアアアアアアッ！」

將軍の召喚獣が掴まれた体勢で美春本人にパンチやキックを仕掛けるが悉くかわされる

……  
美春の召喚獣が將軍の召喚獣を串刺しにしようと剣先を向けた……

ビリッ！

……  
その瞬間、パンチによつて美春の制服が破けた

「　「　「　あ…………」「　」」

全員の一言がほぼ同じタイミングに合流せり

「死になさいいいいいいいいいいいいいいい！」

「げぶるあああああああつー!?

美春の強烈な拳で召喚獣が壁に吹っ飛ばされ、将軍本人もその衝撃と痛みで吐血及び回転しながら宙を舞う

「！」の変態鬼畜畜以下の腐れ外道！お姉さまとの愛の時間や美春の純潔を汚しただけでは飽き足らず服を破いて恥をかかせる強姦魔！存在その物が性犯罪のブタは細切れのミンチとなつてこの世から消滅しなさい————つ！—」

耐え難い恥辱に激昂した美春はブライジャーが見えてる事にも気に留めず将軍の召喚獣をリンチ

それに連なつて將軍はファイードバックで空中を舞い続け、美春がトドメに召喚獣を踏みつけると自身も後頭部から地面に落ちた

全身が痙攣を起こし、頭から水溜まりが出来るくらいの血を流す

普通の人間なら死んでいる状態だ

「が…………はつ…………10連コンボ…………ビリレジやねえ…………つ  
！」

しかし將軍は頑丈に出来てるので生き地獄をも迷ひ羽田に……

試合は『清水美春の不正行為による失格』で將軍& a m p;秀吉ペアの勝利（？）に終わつたが、直後に將軍は服を破いてしまつた責任として購買へ行き美春の制服を弁償する強制イベントに直面

その際、お釣りも没収されてしましました……

「学問のすすめの先生が…………一枚も消えた…………つー」

「あ、あれは明らかにお主の自業自得じや

「先に反則をしたのは向こうなのに何故こんなに遭わなきゃなんねえんだ————つー？」



## 腕相撲はサービスとは程遠い（前書き）

今年最後の投稿となりました。これからも何卒よろしくお願ひします  
す

## 腕相撲はサービスとは程遠い

「瑞希ー！」

「美波ちゃんー！」

「殺るわよー！」

「「うふあつー？」

「何事つー.?」

試合を終えた将軍と秀吉の目に入ったのは、いきなり瑞希と美波が明久の後頭部にコンビネーション技を叩き込んでいた場面だった

「おっ、将軍と秀吉か。姫路と島田も勝ち残ったぞ」

「それより何だこの摩訶不思議な光景はー?お前が2人に何か吹き込んでボコられせてんのか?」

将軍は真っ先に雄一を疑う

彼は基本、生物的に雄一が嫌いなのである

「バカ言つな。俺がそんな非「ああ見える」道な人間にって、せめて最後まで言わせらりよー」

「瑞希。 そのまま首を真後ろに捻つて。ウチは膝を逆方向に曲げるから

「い、いつですか？」

「のままだと明久は死ぬかもしれん

そう思つた将軍は一策を仕掛ける

「つーつ、月詠さん。どうしたんすか？」

「」「つーつ？」

月詠凪は唯一明久を攻撃しない女の子

ただし、明久を攻撃する輩は一切許さない超過激な人物でもある

「ち、違うんです凪ちゃん！吉井君には何もしてません！」

「何もしてないから落ち着いて！」

「いねえよ、今のは嘘だ」

瑞希と美波はホッとしたように胸を撫で下ろす

「あ、ありがとうございます将軍。いくら幼女暴行犯に間違えられたとは言え、この扱いはあんまりだよ……」

「幼女暴行犯？」

将軍が辺りを見回す

するとツインテールの小さな女の子の姿が目に入った

「幼女って……」の子？』

「「」の子じゃないです。葉月です！」

葉月と名乗る子が頬を膨らませる

「ああいめんじめん。で、葉月ちゃんだけ？明久と知り合になのか？」

「違いますー葉月はバカなお兄ちゃんのお嫁さんですっー。」

将軍の脳が一瞬停止した

「…………やうかあ。明久のお嫁さんかあ…………明久、悪い事は言わん。性犯罪はやめておけ…………」

「違つひよー輝きを失つた目で僕を見ないでー。」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよー。」

葉月が美波を見て涙を引っ込めた

その言葉や葉月と並んで前を思い返す明久

「ひじやつと思いつく

「ああーーあの時のぬいぐるみの子かーー」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

「そつか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はーいですっーー！」

純真無垢で満面の笑顔を見せる葉月

将軍は明久が性犯罪に身を染めてなくて良かったと心底ホッとする

「将軍。今何か物凄く失礼な事を考えてなかつたかい？」

「ギクッ。い、いや…………そんな事ないぞ」

「今ギクッて聞こえた様な気がするんだけど」

これ以上追求されるのを避ける為、将軍は無理に話題を戻す

「じ、とにかく畠田。さつも葉円ちゃんがお前を見ても姉ちゃんと言つたが、葉円ちゃんってお前の妹なのか？」

「ええ。やうだね？」

その話を聞いて明久は葉円の顔をマジマジと見る

元気そつた雰囲気や勝ち気な田が確かにそつくりだと改めて認識

「吉井君はずるこじす……。田ちゃんや刹那ちゃんと言つ幼馴染み  
だけでなく、美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いだなんて……。  
私はまだ両親にも会つてもらっていないのに……。もしかして、実は  
もう『お義兄ちゃん』になつちゃつてたり……。田ちゃんと刹那ちゃん  
の両親には『お義父さん』や『お義母さん』  
つて呼んだりしてこたり……」

瑞希の発言に明久は首を傾げ、将軍は『遂に姫路の壊れ具合が最高  
潮に達したか』と肩を落とす

「とにかく、この密の少なめがどうかの事だっ。」

教室内を見回した雄一が言つ

今のFクラス内には殆ど密がない

「そういうれば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん? どんな話だ?」

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

その言葉に明久達は思わず呻き声を上げそうになる

確かにクロスの下は汚いみかん箱であったが、今はテーブルにチエ  
ンジしたため問題は解決済み

なのに悪評が流れ続けている……

「ふむ……。例の連中の妨害が続いてるんだろうな。探し出してシバキ倒すか」

「いや、そんなもん生ぬるいぜ。ここは俺が新たに自作した武器『スタンガンクロー』で丸焦げにした後、ガス式ガトリング銃で撃ち抜くのが良い」

将軍が懐から出した武器を両腕に装備

右手には五個のスタンガン（一本80万ボルト）を取り付けて作った爪、スタンガンクロー

左手にはガスを利用して弾丸（拳大サイズ）を発射するガトリング銃

製作に掛かった時間と費用は1ヶ月と90万円らしい

「将軍……君は本当に色々な武器を作ってるんだね？将来は殺し屋を目指してるの……？」

「バカ言つてもらつちゃ困る。俺が自作した武器の大半は過失致死防止加工が施されてるからギリギリ合法だ」

「スタンガン使用してゐる時点で合法じゃねえだろ」

「武器の違法性の有無は置いといて、例の連中の妨害つて、あの常夏コンビ?まさかそこまで暇じゃないでしょ?それに坊主先輩は雄二にバックドロップ、モヒカン先輩は将軍にアッパー食らわされたから、これ以上何かしてくるとは思えないよ」

「いや、雄一の言つ事が本当なら様子を見に行く位はした方が良い。それに噂が何処から流れて何処まで広がつてゐるのか確認する必要もある」

小学生が聞いたくらいだから、かなりの勢いで広まつてゐるとも言える

放つておけば確実に経営に響く

「俺達は召喚大会があるから、早めに昼飯を済ませた方が良い。昼食も兼ねて敵情視察だ。秀吉もその方が良いだろ?」

「やうじやな。ワシも相伴に預かひつ」

「そうだね。それじゃ葉月ちゃん、一緒に『お皿』飯でも食べに行く？」

「うん」

瑞希と美波も試合に備えて昼食を済ませるため同行する事に

葉月を含めて計7人

学園祭の中を歩き回ることは結構な人数である

「それで葉月ちゃん。さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるかい？」

「え？ とですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店」

「なんだって！？ 将軍、雄一ー。それはすぐに向かわないとー！」

「そりだな明久！ 我がクラスの成功の為に、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」

「ふつ。敵クラスの商売がどんな物か見せて貰おうじやねえか！」

聞いた瞬間、3人のバカは全力ダッシュで向かった

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

「将軍、どんどん悪い色に染まつておるぞ……」

「明久、ここはやめよつ」

「ソレまで来て何を書つてこらのせー早く中に入るよー。」

「そりだ！桃源郷を前にして引き下がる訳にはいかねえだろー。」

「頼むー。」だけは、Aクラスだけは勘弁してくれー。」

3人がやつてきたのは、宿敵のAクラスが経営してる「メイド喫茶『』主人様とお呼びー。」と言つ桃源郷だった

「そつか。ここに坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

雄一が抵抗してゐる間に女子3人と秀吉が追いついてきた

そんな彼らの前で見慣れたメイドが椅子に座つて受付をしていた

「あつ、隊長！来ててくれたんですか！」

「なつちゃん？ここで何してるので？」

「受付でしうつ」

なつちやんと呼ばれたメイドは明久の幼馴染みの一人、月詠凪

明久を好いている女の子だが、少々危険な人物もある

明久が来た事に動搖したのか噛んでしまった

「隊長の方」へ、監さんとお揃いでどの様な用件でしょつか？」

「監でお皿」飯を食べに来たんだ」

「そりなんですか、ありがとうござります。……？そりうの女の子は？隊長のお知り合いですか？」

「お知り合いじゃないです、葉月ですっ。葉月はバカなお兄ちゃんのお嫁さんですっ」

一度目の爆弾発言にその場の空気が凍る

特に瑞希と美波は無言で明久を睨み、雄一は面白い事になりそうだと一矢二矢したり、明久はまた凪が暴走するんじゃないかとビクビ

クしていた

しかし……

「葉月ちゃんは隊長 バカなお兄ちゃんが好き?」

「はいっ。大好きですっ」

「じゃあお姉さんも応援するから頑張ってね」

なんと暴走しないどころか、葉月の頭を優しく撫でた

その光景を前にした全員が驚きで目を見開いた

「どうしたんですか? 鳩が豆鉄砲を喰った様な顔になつてますよ?」

「いや……純粹に驚いてたんだよ。あんな言葉を聞いたのに怒り剥き出しじで暴走しなかつたから」

「暴走?何を言つてるんです。小学生の言葉で嫉妬するなんて、い

「くらなんでもバカバカしいですよ」

嵐の返答に約2名が顔を横に向けた

「姫路に島田。お前らより月詠の方がよっぽど大人だぞ」

「…………うるさいわね。アキがいけないのよ」

「何でそこで明久のせいになるんだよ？」

「どうして私は吉井君と幼馴染みじゃなかつたんでしょうか……？」

「姫路も落ち着け」

將軍は何れ頭痛に悩まされそつだ

ふと机に張られてる紙に注目する

その紙には『腕相撲サービス実施中』と言う文字が書かれていた

「腕相撲はサービスと言えないだろ」

「相変わらずキングコングは失礼ですね」

「お前の方が失礼だ！それにゴリラからキングコングに格上げしてんじゃねえ！」

「分かりました、ゴリラ」

「だからってゴコラに戻していくとは言ってねえ！」

「あなたの名字及び名前はどうもゴコラと紛らわしくて」

「どこがだ！？坂本雄一とゴコラだぞ！？形どこにとか文字数すら合つてねえよ！」

「それでは腕相撲サービスについて説明させて頂きます」

「話をすり替えんなあ ああああっ！」

雄一が珍しく手玉に取られている光景に明久はパチパチと手拍子、

将軍は口を押さえながら笑う

「まずは挑戦者は挑戦料として500円を支払っていただきます」

「あ、お金取るの?..」

「そして腕相撲で私に勝利したお客様は、当店のみで使用出来る1000円分の無料券を贈呈致します」

凧が手作りの無料券を前に掲げる

「なるほど。で、負けた場合は?..」

「ペナルティとして1000円支払ってもらいます。つまり私は勝つたら1500円の利益、負けても500円の利益を得る事が出来ます」

「なんて確立されたビジネスだ」

ただ腕相撲をするだけで稼げる

なんとも羨ましい事業だ

「誰か挑戦者はいたの？」

「はい。30人中30人が腕を押さえながら帰つていきました」

「…………折つたりしてないよね？」

「大丈夫です。ちゃんと脱臼に留めました」

「全然大丈夫じゃないよね！？」

「最早挑戦者には氣の毒としか言い様が無い」

1500円×30人＝45000円の儲け

「明久、せっかくだからやつてみたらどうだ？」

「将軍。君はいったい何を言つているんだい？僕がなつちゃんと勝てる訳が無いじゃないか（汗）」

「でも勝つたら1000円分、飯が食えるんだぞ？500円も得するじゃないか。それってたぶん勝てる」

「ホントに？もし負けたら治療代も払ってくれる？」

「ん~、良いだろ？」

将軍の言葉を信じて明久は挑戦料の500円を献上し、椅子に座つて机上のリングに肘を立てる

「こへら隊長と言つても勝負は勝負。手加減はしませんよ。」

「う、うん……僕も食費が懸かってるから負けないよ

双方の右手がガツチリと握られる

ギュッ（明久の手に力が入る）

プショーッ（凧の顔が真っ赤になリショートを起す）

ポテツ（明久の勝ち）

月詠風、本日初黒星

そして明久は見事に1000円無料券を手に入れた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4412w/>

---

バカとテストと召喚獣もう一人の観察処分者

2011年12月31日22時46分発行